五河士道（23）による
デート・ア・ライブ

キラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五河士道。

年齢：２３、職業：来禅高校教師。

新学期のはじまりに、彼は異世界の存在・精霊と出会う。

〈プリンセス〉と呼ばれるその少女は……とてもおっぱいが大きかった。

※士道の年齢プラス７歳、および性格改変を行った再構成ものです。

目次

五河士道の平凡平穏な一日 ―― 1
十香デッドエンド
非日常への入口 ―― 14
誰のために ―― 25
勝負の前の下準備 ―― 34
初仕事・君の名前は ―― 45
人間の世界 ―― 64
手を伸ばすための力 ―― 86
まずは一歩から ―― 100
四糸乃パペット&折紙アヴェンジャー
鳶一折紙 ―― 117
彼女の理由 ―― 127
嵐の前の静かな時 ―― 142
緊急事態？ ―― 154
ＡＳＴ×精霊×ラタトスク ―― 169
四糸乃と折紙 ―― 189
それが彼女の選択 ―― 203
和解、そして芽生えるもの ―― 217
狂三ネゴシエーション
喧嘩するほどなんとやら ―― 229
転校生、時崎狂三 ―― 240
人を殺す精霊 ―― 255

五河士道の平凡平穏な一日

「いつ来ても、ここはいい眺めだ」
夕暮れ時の公園。見晴らしのいいその場所で、ひとりの男が柵に手をかける。夕焼けに美しく染まった街並みを、両の瞳でじっと見つめていた。
「君も、そう思うだろう？」
横を向き、隣に立つ少女にそう尋ねる。すると彼女は、少しの逡巡の後、小さく、しかし確かにうなずいた。
「俺はさ。こういう景色を、もっと君に見ていってほしい。これからも、ずっと」
少女の綺麗な瞳を真っ直ぐ見据えて、彼は偽りのない言葉を紡いでいく。
「たとえ君が、精霊という存在だとしても。過去に、何があったとしても」
自らの気持ちを伝えるべく、彼は彼女に向けて右手を差し出す。
「君に、生きていてほしいんだ」
驚いたような顔をして……しかし、少女は上品な笑みを浮かべる。
そして、差し伸べられた手を、ゆっくりとした動作でつかみ——

＊

「……」

夢を、見ていた気がする。覚めるのが惜しいような、素敵な夢だったと思う。
ジリジリと鳴り響く目覚まし時計のスイッチに手を伸ばしつつ、五河士道はその夢の内容を思い出そうとする。
……確か、士道は囚われの姫君（巨乳）を救うために立ち上がった勇者という役柄だった。
町一番の鍛冶屋に作ってもらった剣を手にして、魔王の潜む悪魔城へと旅立ったのだ。
道中で女騎士（巨乳）や魔法使い（巨乳）と出会い、パーティーを結成。魔王の部下のモンスターとの苦しい戦いを乗り越え、ついに悪魔城にたどりついた。
そして、魔王と対峙して……
「それからどうなったんだっけ」
うんうんうなる士道だが、残念ながら冒険の続きは記憶から抜け落ちてしまったらしい。
いつまでも布団の上にいるわけにもいかないので、諦めて部屋を出ることにした。あ

まり余計なことをしていると、仕事に遅れてしまうからである。
「今日も冴えない顔だ」
眠気を払うため、洗面所で顔を洗う。その際鏡で自分の顔を見て、士道の口からはそんな感想がこぼれていた。
彼自身はダンディな男を理想としているのだが、どうにも生まれつき童顔ならしく、子供っぽい雰囲気が抜けきっていない。顎から生える無精ひげが、なんともアンバランスだった。
「ひげを剃るのは飯の後にしよう」
ようやく目もぱっちり開いてきたところで、士道は妹の部屋の前まで移動し、軽くノックした。
「琴里。朝だぞ」
返事はない。
中に入ると、すうすうと可愛らしい寝息をたてる五河琴里の姿があった。
今年で１４歳になる妹の容貌は、兄の贔屓目を抜きにしてもなかなかレベルが高いと士道は感じている。そろそろ彼氏のひとりでもできるんじゃないかと戦々恐々であるが、いまだ彼女の口からそのような話は聞いたことがない。
「ほら琴里。起きろ――！」

ゆっさゆっさと体を揺らすと、顔をしかめながらも彼女の目がゆっくりと開いた。
「む、むう……なにー？」
「朝だぞ。起きなさい」
「学校、明日からだよー？」
「もう明日からなんだから、当日寝坊しないように早起きする癖をつけておくべきだろう」
「……本音はー？」
「俺は朝から仕事なのにお前だけぐーすか寝てるのは気に食わん」
「さいてーなおにーちゃんだー」
ぷくーと頬を膨らませると、琴里は頭から布団をかぶってしまった。どうやらまだ起きる気はないらしい。
「そういえば、なぜか魔王の姿が琴里だったんだよな」
夢の中で魔王役を演じていたのは、士道の妹である琴里だった。現実では天真爛漫な可愛い少女が、鞭でビシビシ部下の悪魔をなぶっていたのはギャップがすさまじかった。
ただ、一瞬妙に似合うと感じてしまったのはなぜだろう。
「あんまり遅くまで寝てるんじゃないぞ」

　最初に言ったことは事実でもある。今日までだらだらした生活を送っておいて、明日いきなり早起きするのは結構きついものだということを、士道は学生時代にしっかり経験している。

「なんで教員は春休み中にも仕事があるのかねえ」

　琴里の部屋を出て階段を下り、リビングへ。愚痴りながらも朝食を軽く済ませ、歯を磨いて身だしなみを整えてスーツを着用する。

　この毎朝の一連の流れも、1年続ければ完全に習慣と化してしまっていた。

「さて、そろそろ行くか」

　余った時間で目を通していた新聞を机の上に置き、鞄を持って玄関に出る。

　すると、ちょうどその時2階から琴里が下りてきた。どうやらちゃんと起きたらしい。

「行ってくるからな。ちゃんといい子にしてるんだぞ」

「おー……」

　まだ眠いのか、ごしごしと目蓋をこすっている。声にも覇気がない。

「帰りは夕方くらいになると思う。お昼は昨日のカレーの残りでも食べといてくれ」

「わかったー。お仕事がんばるんだぞ、おにーちゃん」

「おう」

軽く手を挙げてから、士道は玄関から外に出た。

＊

五河士道。年齢23歳、独身。恋人もいない。
「おはよう」
「五河先生、おはようございます」
職業、高校教師。担当科目は現代国語。
「先生おはよー！」
「おう、おはようさん。よそ見しながら走ると危ないぞ」
正門をくぐって職員室に向かう途中、士道は部活動で登校していた生徒達とあいさつを交わす。
都立来禅高校に雇用されたのは、今から1年前の出来事である。地元の大学に通っていた彼は、運よく自宅からそう遠くないこの学校に就職することができたのだ。
1年間授業を受け持ち、様々なことを経験した結果、今ではある程度自信を持って仕事に励むことができている。いろいろよくしてくれた先輩の先生方には感謝してもしきれないと、士道は心から思っていた。

「おはよう士道くん！」
「こら、教師を君づけで呼ぶんじゃありません」
「あはは、怒られちゃった」
　年齢が近いこともあり、士道は生徒達からかなりフレンドリーな態度をとられている。慕われているということで、それ自体は悪い気分ではないのだが、やはりわきまえるべきラインが存在するのも事実なわけで……そのあたりのさじ加減が非常に難しい。

＊

「五河先生。この書類のコピー、お願いできますか」
「あ、はい。わかりました」
　先輩から新たに仕事を受け取った士道は、早速コピー機のある場所へ向かう。幸い先客はいなかったので、スムーズに使用することができた。
「もうすぐ昼か」
　どこかに食べに行こうかとも考えた士道だが、デスクワークが結構残っていることを思い出す。新学期開始直前とあって、仕事が溜まってしまっているのだ。
　しばし腕を組んだ後、できるだけ早く帰りたいと考え、昼食は抜きにすることを決断

した。
「さて、頑張りますかね」
　無事書類のコピーを終え、自らの席に戻る。
「気合十分ですねぇ。これ、どうぞ」
　そんな彼の手元に、湯呑みがコトリと置かれた。中身は日本茶のようである。
「岡峰先生。ありがとうございます」
「いえいえ、お気になさらず。自分のを淹れてきたついでですからぁ」
　岡峰珠恵。士道と同じく来禅高校の教員で、その愛らしいキャラクターから生徒達にも人気の存在である。士道的チャームポイントは、微妙にサイズの合っていない眼鏡だ。
「五河先生には、明日から頑張ってもらわないといけませんからねぇ」
「はは……正直、結構不安ですよ。2年目でもう担任任されるなんて」
　本年度、士道は2年4組のクラス担任を受け持つことになっている。初めて背負うことになる大役に、緊張していないと言ったら嘘になる。
「それだけ五河先生が評価されているということですよぉ。もっと自信を持ってください」
「だといいんですけどね」

「それに、先生をサポートするために副担任の私がいるんですよぉ？　困ったときはいつでも頼ってください」
「……ありがとうございます。ほんと、岡峰先生がいてくれてよかった」
　人当たりのいい彼女が力になってくれるのは、士道としてもうれしいことだった。もちろん、なんでもかんでも頼ってしまわないよう、気を引き締めるのも忘れない。あくまで珠恵は副担任で、メインで生徒達をまとめるのは彼自身の仕事なのだから。
「俺、頑張ります」
「はい！」
　改めて気合いを入れ直し、仕事に取りかかる士道。家から持ってきたノートパソコンを開き、作業途中のフォルダを呼び出す。
「……ところで、五河先生」
「はい？」
　隣から声がかけられた。どうやら珠恵の話はまだ終わっていなかったらしい。
「五河先生って、彼女いたりするんですか？」
「……いないっす。募集中ではありますす」
　ぐさっと心に突き刺さる話題を持って来られてしまった。心の中で嘆く士道だが、だからといって２３にもなって女性との交際経験がほぼ皆無という悲しい現実は変わら

ない。
「そ、そうなんですか。実はですね、私も今、フリーなんです」
「はぁ」
「私、もう29なんですよね。親からも、早くいい人見つけなさいってことあるごとに言われてて」
「それは、大変ですね」
椅子に座ったまま、珠恵はじりじりと士道との距離を詰めてくる。彼女が何を言いたいのか、なんとなく士道にもわかってきた。
「あのですね……五河先生は、私みたいな女性はどうですか？」
うつむき加減で指をもじもじさせながら、彼女は士道に問いかける。結構な本気具合が伝わってきたのは、彼の気のせいではないだろう。
だからこそ、答えは慎重に選ばなければならない。
「俺……」
しばらく言葉を考えた後、士道は意を決して口を開いた。
「俺、彼女にするなら巨乳の子って決めてるんで」
「がーん！」
ついでに言えば、もっと大人のエロスを感じる体つきの人が好みだ。

「うぅ……そうですよね、こんな子供みたいな体型の女、誰も欲しがりませんよね」
「いやいや、岡峰先生普通に可愛い系だし、全然需要ありますって」
世の中には幼い体型を好む男もいるらしい。士道もそのくらいのことは知っている。知っているだけで、到底同意はできないのだが。
……結局、傷心の珠恵を慰めるのに10分ほど要してしまったのだった。

＊

「おにーちゃん。今日の晩ごはんは？」
「喜べ。ハンバーグだ」
「おー！　太っ腹だー！」
「そうだろうそうだろう。お兄ちゃんのこと好きか？」
「愛してるぞおにーちゃん！」
五河士道はシスコンである。妹のことが好きで好きでたまらないのである。
ただ、さすがに妹と結婚したいとまでは考えていない。たとえ琴里が血の繋がっていない義理の妹だとしてもだ。
「琴里はまだ胸ちっちゃいしな……いや、仮にでかくなっても欲情なんてしないけど」

誰に対してのものかもわからない言い訳を口にしつつ、士道はひき肉をテンポよくこねていく。
五河家の両親はそろってエレクトロニクス企業に勤めており、仕事の都合上２人とも長期間家を空けることが多い。その間の食事担当は士道なので、自然と料理は最低限こなせるようになっていた。
ちなみに、食費その他の生活費は基本的に琴里のぶんまで士道が負担している。社会人のくせにいまだに実家から出ていない以上、最低限そのくらい払うのが筋だと考えたためだ。
「琴里ー。明日の準備、ちゃんとできてるか？」
「うん、ばっちり」
「そうか」
明日からは新学期が始まる。騒がしい生徒達に囲まれる生活が、また幕を開けるのだ。
大変だろうが、それでもやりがいのある仕事だと士道は思う。教師になったことを、後悔はしていない。
「あーっ！」
「どうした？」

「筆箱入れるの忘れてた！」
「おいおい、しっかりしろよー」
騒がしくも明るい妹の姿に、思わず笑みがこぼれてしまう。
できることなら、この平凡で平穏な日常がずっと続いてほしいと、そんなことを思う士道だった。
……そんな彼のささやかながら傲慢な願いは、いとも簡単に崩れ去ることになる。
大きな選択を迫られるその瞬間は、刻一刻と迫っていた。

十香デッドエンド
非日常への入口

４月１０日。今日は来禅高校の入学式と始業式が行われる。
教員のひとりとして、もちろん士道も出席することになっている。
「先生おはよう！」
「久しぶりだねー」
「今日もそこそこにイケメンに見える」
校内に入ると、本日から2年生に進級した３人組に声をかけられた。
左から、山吹亜衣、葉桜麻衣、藤袴美衣。去年彼女達の学年の授業を受け持っていたので、名前も容姿もよく覚えている。
「おはよう。いつも一緒だな、お前達」
「そりゃまあ、気が合うからね」
笑って答える亜衣。こういった学生の姿を見ていると、教師としても心が温まってくる。
「今年もよろしくな」

「うん！」
「ほどほどにね」
「テストの採点は甘めにねー」
３人と別れ、職員室へ向かうために廊下を歩いていく。
その途中、士道は見知った背中を視界に捉えた。
艶のある白い髪を肩にギリギリかかるくらいに伸ばした、細身の少女。
「おはよう、鳶一」
士道が声をかけると、彼女は立ち止まってくるりとこちらに体を向けた。
「五河先生。おはようございます」
鳶一折紙。亜衣達と同じく、今日から2年生になった生徒のひとりである。
「相変わらず綺麗なお辞儀だな。シャキッとしていて大変よろしい」
折紙は寡黙なタイプで、あまり友人と仲良くしている姿も目にしていない。ただ、どういうわけか士道の仕事（荷物運びなど）を手伝ってくれることが多く、自然と話をする回数も増えていた。
「五河先生のクラスに入れて、よかった」
「それは光栄だな……あれ、なんで俺が担任だって知ってるんだ？」
折紙のクラスは2年４組で、確かに士道が担任なのは事実。しかし、どのクラスを誰

が担当するかはまだ生徒に明かされていなかったはずである。
「……秘密」
「秘密ときたか、まあいいけどな」
無表情で答える折紙に対して、特に追及する気もなかった士道は肩をすくめる。たまに得体の知れない不思議な一面を見せるのが、彼女の特徴のひとつだ。
「1年間ビシバシ鍛えていくからな。とはいっても、鳶一には特に厳しくする必要ないか」
「どういう意味」
「頭脳明晰、運動神経抜群。文句のつけようがないってことだ」
「それは、褒めていると受け取ってかまわない？」
「ん？　そりゃもちろん」
「そう」
小さくうなずく折紙。感情の起伏が非常に乏しい彼女だが、今は若干口角が吊り上がっているように士道には感じられた。
出会ってすぐのころは、まったく表情を変えない子だと思っていた。しかし、注意深く観察するとわずかな変化を見つけられる時があるのだ。
「あ、でももうちょっと他人とコミュニケーションとった方がいいぞ。どうしても無理

だっていうなら強制はしないけど」
「善処する」
「そうか。じゃあ、また教室でな」
折紙と別れ、今度こそ職員室へ。
「善処するって、逃げ口上にもよく使われるよな」
謎多き少女だが、もっといろんな人と仲良くしてほしいというのが、士道の偽らざる本音だった。

*

時間は進み、そろそろ正午かというころ。
「とりあえず、一仕事終わったな」
始業式と新学期のホームルームを終え、士道は食堂の自販機でコーヒーを購入していた。
自分が担任だと知った時の生徒の反応も良好だったので、一安心である。
「岡峰先生の時の方が反応がでかかったのが悲しいところだが」
彼女には小動物的な可愛らしさがあるため、仕方がない。タマちゃんなんて愛称がつ

けられるほどだ。

「ふう……」

コーヒーを一口飲み、肩の力を抜く。明日からはもっと忙しくなるだろうから、しっかり気を引き締めなければ。

と、士道が物思いにふけっていた、その瞬間。

ウウウウウウ――

けたたましいサイレンの音が、空間全体に鳴り響いた。

直後、街の方からアナウンスの音声が聞こえてくる。

「まじかよ」

その内容を把握すると、士道は半分以上残っていた缶コーヒーを捨て、すぐに食堂を出た。

「こらそこ、廊下を走るな！　落ち着いて避難するんだぞ」

今しがたのサイレンは、空間震警報が発令されたことを示すもの。

空間震とは、原因不明、発生のサイクルも不明の天災である。規模は不確定で、突然の爆発や建物の倒壊、そして物体の消失……そのような現象が起きる。

初めて空間震が起きたのは今から３０年前。当時の甚大な被害を教訓に、人類は空間震対策を進めてきた。その一例が、空間震の発生を察知する警報なのだ。

「ほら、焦らなくてもシェルターはすぐそこだ。前を押さないように歩いて行け」
教員一同には、警報が発令された際の行動マニュアルがしっかり叩き込まれている。
この高校の地下に作られたシェルターに、生徒達を安全に誘導するのが第一だ。
「走るなよ、絶対走るなよ！」
「五河せんせー、フリみたいになってます」
途中生徒の一部に笑われたりもしたが、無事に全員をシェルターに連れて行くことができた。
人影がなくなったことを確認して、士道も地下シェルターに足を踏み入れる。
全校生徒を収容できるよう設計されているだけあって、そこは非常に広い空間になっていた。
「おっ」
まだ放課後になってさほど時間が経っていなかったため、教室から一緒に避難してきたのだろう。２年４組の生徒達は、だいたい同じ場所に固まって座っていた。それを見つけた士道は、彼らのもとへ近づいていく。
「お、五河先生。訓練じゃない本番の避難って、なんだかドキドキするな」
「殿町か。確かに、俺も同じだ」
適当に会話をしながら、顔ぶれを確認していく。昨日のうちにクラス全員の顔と名前

は覚えていたので、さほど難しい作業ではない。

「……ん？」

　目に見える範囲の確認を終えた士道は、少し離れた場所にいた珠恵に声をかける。

「岡峰先生。鳶一、見ませんでしたか」

「鳶一さんですか？　えっと……多分、見てないです。他のところにいるんでしょうか」

「そうですか。ありがとうございます」

　４組の生徒のうち、鳶一折紙の姿だけが見えない。

　そのことが気になった士道は、彼女を探してシェルター内をうろつき始めた。

「………」

　折紙の白い髪は目立つ。なので、この大人数の中でも見つけることができると彼は踏んでいた。

　だが……。

「いない」

　シェルターを一周しても、折紙の姿を確認することができない。

　まさか、まだ学校に残っているなんてことは――

「おや、五河先生？　どちらへ？」

　無意識に出口へ向かおうとしていた士道の足は、背後からかけられた初老の教師の声

によって止められた。
振り向くと、その教師だけでなく周りの生徒も士道に注目している。
このまま彼がシェルターの外に飛び出せば、彼らにいらぬ混乱を与えてしまうことになる。
「……いえ、別にどこにも」
焦る気持ちを抑え、士道は壁にもたれかかる。
何も、折紙がいまだに避難していないと決まったわけではない。単純にここにいるのに士道が見つけられないだけかもしれない。あるいは、警報があった時にはすでに校外に出ていて、ここことは別のシェルターに行ったのかもしれない。
どちらの推測も、彼女が地上にいる可能性よりは高いはずだと士道は考える。
不安が拭いきれるわけではないものの、最終的にはおとなしく空間震が去るのを待つことに決めたのだった。
見回り等も教員の仕事なので、しっかり取り組まなければならない。

＊

避難命令が解除され、士道が家の前まで戻った時には、すでに夕焼け空が頭上に広

がっていた。

「……やっぱり気になるな」

頭に浮かぶのは、結局姿を確認できなかった教え子のこと。どうしても、最悪の可能性が脳裏をよぎってしまう。

こんな状態でいては、琴里を心配させてしまうだろう。

「確かめに行くか」

折紙は現在、マンションの一室を借りて生活をしているらしい。そのマンションの住所も、担任である士道は把握している。

とりあえず部屋に戻って、余計な荷物を置いたらすぐにでも彼女の自宅に向かおう——

——そう決めた士道は、玄関の戸を開けて家の中に入った。

「あ、おにーちゃんおかえり！　待ってたよー」

「ただいま。待ってたってどういうことだ？」

「おにーちゃんに大事な話があるの」

リビングから出てきた琴里の言葉に首をかしげる。

「いいからいいから。ちょっとじっとしてて」

とことこと駆け寄ってきた琴里は、靴を履いて士道の隣に立った。

「はい、準備オッケー！」

「お前何言って――」
疑問の言葉は、最後まで続かなかった。
思わず口の動きを止めてしまうほどの驚きが、士道を襲ったからだ。
「……は？」
彼と琴里は、直前まで自宅の玄関にいたはずだ。
だが、現在目に映る景色はそれとはまったく異なるものだった。
まるで映画に出てくる宇宙船の内部のような装飾。メカメカしい、なんて単語が士道の頭には浮かんでいた。
「な、何がどうなって」
「こっちよ」
混乱する士道の腕を引くのは、隣に立っていた琴里だった。ただ、いつもと様子が違う。
「おい、琴里？　ここはいったい」
「後で説明するから、黙ってついてきなさい」
「お、おう」
普段と全く異なる妹の態度に気圧され、士道は彼女の誘導に素直に従う。狭い通路を歩く途中、彼女の髪をくくる2つのリボンが白から黒に変わっていることに気づいた。

「ここよ。入って」

電子パネルのようなものを操作して扉を開けた琴里に続き、士道も中に足を踏み入れる。

「なっ……！」

再び、言葉を失う。

視界には広大な空間が広がり、様々な機械やモニターが設置されている。そして、多数の人間がせわしなく何かしらの作業を行っていた。

「ようこそ、〈ラタトスク〉へ」

部屋の真ん中に置かれた席に座り込み、琴里が聞きなれない単語を口にする。

士道はただ、そんな妹の言葉を黙って聞くことしかできなかった。

誰のために

「……つまり、お前の話をまとめるとこうなるのか」

琴里の説明を一通り聞いた士道は、そこでようやく口を開く。

「空間震は、そこのモニターに映ってる精霊ってやつが現れる時に起きるもので、それは精霊の意思とは関係なく発生してしまう」

「続けて」

「精霊は異世界に住む存在で、よくわからんがすごい力を持っている。で、危険だから一般人には秘密で自衛隊の部隊……ＡＳＴ？　が処理しようとしてる。琴里達〈ラタトスク〉は、そんな精霊達を救おうと活動している組織。精霊を説得して、この世界や人間を好きになってもらおう、むやみに暴れないようにしてもらおうというのが目的だ。そして、その交渉役に俺が選ばれた。……ついでに、ここは上空１５０００メートルだっけか？」

「オーケー、一度で理解できたわね。最低限、社会人として必要な能力は備えてるってことかしら」

「到底信じがたい話だけどな」

「でも、士道は信じているでしょう？」

「実際にドンパチやってる映像とか外の景色とか見せられちゃあな。全部演出って可能性もあるけど、俺ひとりだますのにここまで大がかりな仕掛け使うなんてありえないし」

「当然ね」

満足げにうなずく琴里。好物のチュッパチャプスをくわえたまま、器用に話している。

「いくつか聞きたいことがあるんだが、まずひとついいか」

「何かしら」

足を組んで士道の言葉を待つ妹に対し、大きく深呼吸をひとつ。

そして、あらん限りの思いをこめて最大の疑問をぶつけた。

「お前のそのキャラなんなんだ!?」

「キャラって何よ。私は私、誰かの真似してるわけじゃないわ」

「ば、馬鹿な……！　俺の知ってる琴里はもっと可愛げがあってだな！」

「細かいこと気にしすぎ。そんなんだから２３にもなって彼女のひとりもできないんでしょうが」

「お、お兄ちゃんはそんなひどいこと言う子に育てた覚えはないぞ」

「自分でお兄ちゃんとか言わないでよ気持ち悪い」
　冷たい視線で睨まれ、士道はふらふらとよろめいた後、がくりと膝をつく。
「……いや、おかしいと思ってたんだよ。うちの妹はいつになっても反抗期が来ないなーって。このままでいられるなんて楽観視していた俺が駄目だった。まさか、まさか裏でこんなこと考えてたなんてな……」
　ぶつぶつと独り言をつぶやき始める士道。そんな彼の傍らに、ひとりの青年が座りこんだ。
「はじめまして。副司令の神無月恭平です。ひとつ言わせてもらうなら、こうして美少女に罵倒されることをご褒美と考えてはいかがでしょうか。私はそう思っていますが」
「確かに、世の中にはそういう意見があるのは知っています。でも俺は、罵られるならもっと色気たっぷりのお姉さんだと決めてるんですよ！　琴里みたいなちっちゃい子にはエンジェルのままでいてほしかった！」
「……なるほど。あなたにも譲れない信念があるということですか。ならば後日、私と一緒に飲みに行きましょう。そこで思う存分語り合おうではありませんか」
「か、神無月さん……俺、俺っ！」
　神無月の手を取り立ち上がる士道。そしてそのまま、固い握手を交わす。
「話が進まないから寒気のするようなやり取りはやめてもらえるかしら」

抱き合おうとしたところで、琴里に釘を刺されてしまった。
「なんだよ、せっかく男の友情を育もうとしてたのに」
「士道が神無月とお友達になろうがおホモだちになろうがかまわないけれど、今は精霊に関する話をしてるの。いくら馬鹿でもそのくらいはわかるでしょう？」
「俺はノーマルだっての」
とはいえ、士道も本題を見失っているわけではない。話を戻し、次の質問に移ることにした。
「俺が交渉役になった理由を教えてほしい。普通に考えたらありえない人選だ」
「もっともな疑問ね。確かに常識で考えれば、女の子との交際経験がろくにない士道に彼女達精霊の相手をさせるのはおかしいわ」
「もうちょっとオブラートに包めないかなあ？」
士道のツッコミはあえなくスルーされ、琴里は淡々と事情を説明し始めた。
「要因は大きく分けて2つあるわ」
続いて彼女の口から語られる、士道に白羽の矢が立った理由。
その内容に、周囲の人物も驚いてるように見えた。どうやら彼らにも、今語られた内容は伝わっていなかったらしい。
「どう？　これで納得できた？」

「……お前、自分がすっごく胡散臭いこと言ってるの、わかってるか」

「突拍子もない話なのは認めるわ。でも事実だし、確証もある」

「そうか。なら、信じるよ」

　大きく息をついてから、士道は深くうなずいた。

「ずいぶんものわかりがいいのね。もっと余計な発言をするものかと思っていたんだけど」

「俺は基本的に、可愛い妹の言葉は信用するようにしてるんだ」

「……そう」

　そっぽを向く琴里。横顔がちょっぴりうれしそうに見えるのは、士道の気のせいだろうか。

「まあ、話が早い分には助かるわ。早速、今後の作戦についてだけど」

「ちょっと待て。信じるとは言ったけど、俺は精霊と対話するなんて一言も口にしてないぞ」

「……なんですって？」

　琴里が眉をひそめる。しかし士道の反応もある程度予想していたのか、さほど困惑している様子はなかった。

「精霊が本当に会話の通じる相手なのかどうか、まだわからないんだろう？　最悪、人間

を滅ぼすのが使命、なんて極端な例もありえる。そんな得体の知れない、とんでもない力を持っているやつに近づくなんてリスクが大きすぎる」
　モニターに映る、精霊とＡＳＴの戦闘映像に目をやる。
　精霊は、ただ剣を一振りするだけで、何から何まで切り裂いてしまっていた。それが恐ろしい力であることは、こういった分野に明るくない士道にもはっきりと理解できる。
「やる前から諦めるってこと？　交渉できる相手じゃないと。確かに困難な道のりなのは想像に難くないけど、私達が全力でサポートするわ」
「……そもそも、俺はお前がそんな役職についてることにも納得がいってないんだ」
　琴里はまだ１３歳なのだ。とても組織の司令なんて役柄を背負うような年齢ではないはず。兄として、危険なことには手を出してほしくないというのが士道の本音である。
「私は、今の立場を捨てるつもりはないわよ」
「わかってるよ。今のはただの俺の意見だ、強制するつもりもない」
　だが、手放しに賛成できないのも事実だ。
　士道は再びモニターに視線を移し、戦闘の規模の大きさを再確認する。
　こうして見る限り、ＡＳＴの隊員は命がけで戦っている。それだけ激しいものなのだ

と士道は考え――
「……っ！　ちょっと、映像止めてくれ！」
「はあ？　いきなりなによ」
「いいから頼む。ついでに、拡大とかしてくれると助かる」
「いいけど……」
映像が止まり、続いて精霊周辺の部分が拡大される。
そこには、精霊と真正面からぶつかり合うＡＳＴの隊員の姿があった。
黒の長髪をなびかせる精霊に対し……彼女は、白い髪を乱して戦っている。
「……間違いない」
どうりでシェルターにいなかったわけだ、と納得する士道。空間震警報が出ていた間、彼女は避難せず地上に残っていたのだ。
「映像、進めてくれ」
士道の言葉を、琴里は無言で受け入れた。拡大と停止が解除され、再び戦闘の様子が流れ始める。
「…………」
精霊とつばぜり合いを行い、弾き飛ばされ、再び接近して。
鎧のようなものを身につけた少女は、精霊が姿を消す最後の瞬間まで、最前線で戦い

続けていた。
先ほど心の中に浮かんだ言葉を、もう一度思い出す。
……ＡＳＴは、命がけで戦っている。
「琴里。確認するけど、今の仕事を辞めるつもりはないんだな」
「ええ。士道に何を言われても、続けるつもりよ」
「そうか」
迷いのない琴里の言葉を聞き、しばし逡巡を重ねて……覚悟を決めた士道は、首を縦に振った。
「受けるよ、交渉役」
「……急な心変わりの理由、聞かせてくれるかしら」
真っ直ぐな瞳が、彼を捉えている。琴里だけではなく、ここにいる全員が士道の発言に注目していた。
「さっき戦ってたＡＳＴの中に、うちの学校の生徒がいた」
鳶一折紙。
ほとんどいつも無表情な彼女が、敵対心をむき出しにして武器を振るっていた。
「精霊と戦うなんて危険なこと、彼女にはしてほしくない。そう思っただけだ」
映像で見ただけの、会ったことも話したこともない存在を救うために立ち上がること

は難しい。
　けれど、大事な教え子のためにならば、ちゃんと立ち上がることができる。
「理由としては微妙なところね。これから精霊を口説こうっていうのに、他の女の子のことで頭がいっぱいだなんて」
「仕方ないだろ。そう思っちまったんだから」
「……ま、とりあえずはそれでいいわ」
　厳しい表情をしていた琴里が、白い歯を見せる。
「改めて歓迎するわ。ようこそ〈ラタトスク〉へ」
「ああ」
　この瞬間をもって、士道は本格的に非日常の世界へ足を踏み入れることとなったのだった。

勝負の前の下準備

　士道が空中艦〈フラクシナス〉を訪れ、妹の隠された顔を知った翌日のこと。
　朝のホームルーム前、２階の廊下で折紙の姿を見つけた士道は、あいさつをしようと声をかけた。
「おはよう、鳶一」
「おはようございます」
　こちらを振り向き、いつものように起伏のない言葉を返す彼女。そこには、昨日精霊と激しい戦闘を繰り広げた面影はどこにもない。
「今日も一日頑張ろうな」
　こくりとうなずく折紙。このまま別れてもよかったが、もう少しだけ話を続けることにした。
「昨日は大変だったろ」
「……空間震のこと？」
「そうそう。って、他に何かあったのか？」
「別に、そういうわけではない」

かすかに眉が動いたような気もしたが、ほとんど表情の変化は見受けられない。
「そういえば、鳶一は去年部活に入ってなかったよな。どうだ、今年はどこかに入りたいとかないのか」
「そのつもりはない。当分は」
「そうか。まあ、絶対所属しなきゃいけないわけじゃないからかまわないんだが……俺個人としては、挑戦してみてほしいかな。学生時代の部活っていうのはいいもんだ。後から振り返るとよくわかる」
「そう」
あまり気持ちのこもっていなさそうな返事だった。
「じゃあ、俺は一度職員室に寄るから」
軽く手を挙げて、折紙に背を向けて歩き出す士道。
十分離れたところで、思わずため息がこぼれてしまった。
「こんな遠まわしな言い方じゃ意味ないよな」
しかし、ストレートにＡＳＴをやめてほしいとも言えない。
精霊やそれに対抗する組織の存在は伏せられており、本来一般人である士道が知るはずのないことだからだ。
下手にそのことを口にすれば、折紙経由でＡＳＴに情報が流れ、警戒されて自由な行

動がとれなくなる可能性まである。
……今の段階で、彼女に対してうまく説得ができる可能性は低い。それゆえに、リスクを冒すだけのメリットが見いだせない。
まずは、彼女達ＡＳＴが戦わなくてもいいと言えるだけの結果を示さなければならない。つまり、士道達の力で精霊の力を封印する必要がある。
現在の士道の考えとしては、こんなところだ。
「頑張ろう」
やると決めた以上、後戻りはできない。
改めて、ひとり決意を固める士道だった。
もっとも、その前に教師としての仕事にも真剣に取り組まなければならないのだが。

＊

それから３日後。
精霊を攻略するための訓練、その第１弾として、士道は〈ラタトスク〉監修により作られた恋愛シミュレーションゲーム『恋してマイ・リトル・シドー』の完全クリアを命じられていた。

琴里からゲームを渡されて３日間、寝る間も極力惜しんで攻略に励んでいる。

励んでいるのだが。

「おい、またゲームオーバーになったぞ」

「……はあああああ」

なかなかエンディングまで進めない士道のプレイ状況を隣で眺めていた琴里が、大きな大きなため息をついた。

「なんでうまくいかないんだろうな」

「女の子に出会うたびに片っ端から胸を揉んでるんだから当たり前でしょうが。馬鹿なの？　学習しないの？」

「失礼な。揉んでるのは巨乳の女の子の胸だけだ。たとえばこの琴里に似ている妹キャラには一切手を出していない」

「………………」

くいくい、とこちらに来るよう指示する琴里。それに従い、士道が椅子から立ち上がると。

「ふんっ」

「ぬおっ!?」

ゲシッ！　とすね蹴りを食らい、痛みで飛び跳ねてしまう。

「真面目にやりなさい」
「わかったわかった。俺もそろそろ、胸を触ろうとするスタイルはまずいかと思い始めてたんだ」
「初日で気づきなさいこのトンマ」
　気を取り直して座り、再びプレイを始める士道。今度は『胸を揉む』という選択肢が出ても無視して先に進んでいく。
「やればできるじゃないの。最初からそうしてればクリアも早くなったのに」
「いや、多分あんまり関係ないと思うぞ」
「なんでよ」
「ゲームオーバーになってやり直しまくってる間に、各キャラの性格とかが把握できてきたからな。今スムーズに進められてるのは、その時間があったからだ」
　ふうん、と腕を組む琴里。
「なるほど……さすがに何も考えてないわけじゃなかったのね」
「そうそう。だからお兄ちゃんのこと褒めてくれよー」
「気持ち悪い」
　どさくさ紛れに繰り出した、ささやかな兄の願いは一蹴されてしまった。
　つけているリボンの色によって琴里の性格が変わることに士道が気づいたのは、一昨

日のことである。以来黒リボンの時に可愛いセリフを言わせようと努力しているのだが、うまくいってはいない。

「そういえば、どうして今日はわざわざ〈フラクシナス〉でやってるのよ」

いつもは夜の自宅で行っている訓練だが、今日は士道の希望により上空１５０００メートルに位置する空中艦の中でプレイしている。

「ああ。一段落ついたら、クルーの人達にあいさつしておこうと思ってさ」

「あいさつ？」

「これからお世話になるんだから、ひとりひとりとちゃんと話しておくのが筋ってもんだ」

「それもそうね。さすがは社会人ってところかしら」

「いや、きちんとした社会人なら初日にあいさつしてると思うぞ」

「じゃあ社会人失格ね。大学からやり直し」

手厳しい感想をいただきながらもゲームのストーリーを着々と進展させていった士道は、１時間後にヒロインひとりのルートを完結させたのだった。

「よーし、いっちょあがり」

「残りヒロインは５人よ。その調子でさっさとクリアしなさい」

「ああ。でも区切りがいいし、そろそろ休憩がてらあいさつ回りに――」

士道が思い切り伸びの姿勢をとっていると、部屋にひとりの女性が入って来た。
「……やあ、2人とも。首尾はどうかな」
目の下に大きな隈のできた、若い女性だ。軍服のポケットからはクマの人形が顔をのぞかせている。
「令音さん。いやあ、今日もお美しい」
「……ん、ありがとう。シンもなかなかだ」
「そうですか？　あはは」
「お世辞に決まってるでしょう、馬鹿」
「夢を壊すようなことを言うな！」
村雨令音。〈ラタトスク〉の解析官である彼女を、士道はすでに知っている。
なぜなら3日前、彼女が突然来禅高校の教師として彼の目の前に現れたからである。
士道のサポートが目的とのことだが、なぜか彼のことを『シン』と呼んでいる。
「………………」
士道の視線が自然と下がる。すると目に入るのは、令音の豊満なバスト。非常に触り心地がよさそうだった。
「……精霊の前でも同じように鼻の下伸ばしてたら、胴体真っ二つにされるわよ」
「えっ！　な、なんのことだ琴里？」

顔を上げて取り繕う士道だが、琴里は呆れたようにため息をつくだけだった。
「ほら、みんなにあいさつしてくるんでしょう。さっさと行ってきなさい」
「あ、ああ。じゃあ行ってきます」
これ以上の追及を避けるために、士道は逃げるようにして通路に出て行った。

＊

「まったく、あのエロ兄は……どうしたのよ、令音」
下心が透けて見える士道の態度に文句を言おうとした琴里は、令音が部屋の出口をずっと見つめていることに気づく。
「……いや、なかなか予想外だと思ってね」
「予想外？　なにがよ」
「……シンの態度さ。すでにここの環境にも適応しているように見える。初めてここに来た時も、もっと混乱すると思っていたのだがね」
「ああ、そういうこと」
令音に言われて、琴里も先日の出来事を思い出す。精霊だのなんだのと、到底信じられないような話を次々されたにもかかわらず、士道はある程度冷静に事態をのみこんで

いた。唯一取り乱したと言っていいのは、琴里の態度の豹変についてだけだ。
「昔からそういう人間なのよ、士道って」
「……と、いうと？」
「滅多なことじゃ自分を見失わないというか……クソ度胸とでも言おうかしら。とにかく、メンタルは強い方ね」
「……なるほど。それならなおのこと、精霊との対話には適任か」
「後はあの胸への執着を抑えてほしいんだけど……そこを考えると頭が痛くなるわ」
「……彼は胸が好きなのかい？」
「見ればわかるでしょ。生粋のおっぱい星人よ」
　再びため息をつく琴里。さすがに士道も本番となったら自重するだろうと信じているのだが、ついいつもの癖が出てしまうことだって十分にありうる。
「よりにもよって、どうして〈プリンセス〉は――」

*

「あの〈プリンセス〉って精霊……ぶっちゃけ巨乳ですよね」
「うん。士道くんの言う通り、それは間違いないだろうね。鎧の上からでも形の良さが

はっきりとわかる」

「実は私のストライクゾーンど真ん中なんです。彼女が精霊じゃなかったら交際を申し込んでいるところですよ」

「俺は実際に話し合いに行くんで、うっかりガン見しすぎないように気をつけないとですね」

〈フラクシナス〉の艦橋で、士道は男性クルー達と談笑していた。

若干下世話な内容も混じってはいるものの、全員ノリよく彼の話に付き合っている。

「頼むよ士道くん。我々の命運は君の話術にかかっているんだ」

「やれるだけはやってみます。これでも一時期美人の彼女がいたことあるんで、その時を思い出してみますよ」

「ほう、それは本当かい？」

「ま、一日で別れたんですけどね」

「駄目じゃないか！」

「でも可愛かったかなあ、あの子。今どうしてるんだろ」

「ひょっとして、その子も巨乳だったりするんですか」

「さすが川越さん。よくわかってる」

「士道くんが巨乳好きなのはよく伝わってきましたからね」

わははは、と盛り上がる男性陣。

その様子を遠目で観察していた女性陣は、本当にこんなんで大丈夫なのかと一抹の不安を抱いたという。

初仕事・君の名前は

『緊張しすぎるんじゃないわよ。噛み噛みでまともに話せないようだと対話にすらならないんだから』
「わかってる……多分、おそらく」
『小声で不安になるような発言を付け足すのはやめてもらえるかしら』
訓練開始から１０日後。ついに士道にとって、〈ラタトスク〉にとっての本番がやってきた。
４月１０日に出現した精霊〈プリンセス〉が、再び天宮市に姿を現したのだ。
『ＡＳＴの妨害なしに接触できるまたとないチャンスよ。必ずものにしなさい』
右耳にはめているインカムから、琴里の声が聞こえてくる。何かあったらすぐに士道に指示を飛ばせるよう、通信の確保は欠かせない。
現在、精霊は来禅高校の校舎内で立ち止まっている。屋内での戦闘を苦としているＡＳＴは、彼女が外に出てくるのを待っているらしい。
その膠着状態の合間を縫って、士道は校舎内に侵入したわけだが。
「俺のクラスの教室にいるっていうのは、変な偶然だな。琴里、もう中に入っても大丈夫

か」
『ええ。気合い入れて行ってきなさい』
「よし」
確認をとってから、士道は教室の戸に手をかける。
ここからが勝負だ。鳶一折紙に危険な真似をさせないためには、この場で失敗するわけにはいかない。
「……失礼します」
一言断りを入れながら、ゆっくりと戸を引いて教室の中に足を踏み入れる。
夕陽が射し込む部屋を見渡し、彼は窓際の机に誰かが腰掛けていることに気づいた。
「………」
ドレスのような鎧を身に纏った、黒髪の少女だった。腰まで届きそうな長い髪は、蝶のような形のリボンでくくられている。
不思議な輝きを持つ澄んだ瞳は、今しがた教室に入ってきた士道をまっすぐ見据えていた。
思わず言葉を失ってしまいそうになるほどの美しさ。これも精霊の力なのかと、そんな考えが士道の脳裏をよぎる。
「俺を攻撃する前に、聞いてほしい」

士道も目を逸らさず、事前に準備していた言葉を口にする。
「俺は、君を襲うためにやってきたわけじゃない」
精霊が出現している間は、一般人は全員シェルターに避難している。ほぼ間違いなく、彼女は今までＡＳＴ以外の人間と接触したことがないはずだ。
だから、彼女の中では『人間＝自らに害をなすもの』という認識ができていてもおかしくない。そう士道は考えたのだ。これには琴里をはじめとしたクルー達も同意していた。
その認識を変えるために、まずはこちらに敵意がないことをはっきり示す必要がある。
「ただ、君と友好的な関係を築こうと――」
だが、彼の言葉は最後まで続かなかった。
精霊が立ち上がったかと思うと、次の瞬間には彼女に胸倉を思い切りつかまれていたのだ。
「襲うためにやってきたのではないだと？　そう言って油断させるのが目的か」
「ち、違う。俺は」
「ふん、信じられるものか。今だって、いつ私を殺そうかと算段を組み上げているのだろう」

「くっ……」

　畜生、と心の中で悪態をつく士道。

　予想はしていたが、やはり彼女はまったく人間を信じていない。こんな状態では、まともな会話など望めそうもない。

『落ち着きなさい、士道』

　琴里の声が聞こえてくるが、そう簡単に心の制御ができるはずもない。

　眼前には、冷めた目つきをこちらに向けている精霊。その気になれば、彼女は士道の体を吹き飛ばすことだって簡単にできるだろう。

　どうすれば、彼女に心を開いてもらえるのか。考えれば考えるほど、どんどん頭がこんがらがってくる。

「言え。何が狙いだ」

　頭が真っ白になる。特に意味もなく、彼女の全身に視線をやる。

　顔や腕、脚を眺め……そのうち、ある部分に目を奪われた。

「でかい」

「なに？」

　思わず口走ってしまうほど、豊満なバスト。すでに映像で目にしてはいたが、生で、しかも至近距離で見るそれは本当に美しい形をしていた。

……そして、この状況でそんなことを考えることができる己の思考に、士道はほとほと呆れかえっていた。

「……はは っ」

呆れかえると同時に、混乱していた頭が冷えていくのを感じる。

「なぜ笑っている」

「いや……人間、そう簡単に本質は隠せないと思ってな」

「隠す? やはり私を騙そうとしていたということか」

「違う。そうじゃない」

窮地に立たされても胸に注目してしまうなんて、本当にどうしようもないやつだと自嘲する。

だからこそ、もう開き直るしかないと士道は考えた。

事前に用意しておいた言葉など、ほとんど役には立たないだろう。相手のことをまったく知らない状態で考えたのだから。

今この場で彼女を知り、その都度言葉を紡いでいくしかないのだ。

「もう一度言う。俺は、君を襲うつもりはない。ただ、話をしに来ただけなんだ」

「……話だと?」

「俺は丸腰だ。君を不意打ちしようとしたってできやしない。武器を隠してるって疑う

んなら、ここで全裸になってもいい」
　そう言って、スーツに手をかける。
「……まあいい。どうせ人間ひとりでは、私に傷をつけることなどできはしない」
〈プリンセス〉は、士道の胸倉をつかんでいた手を離して一歩後ろに下がった。
「話をするとは、どういうことだ」
「互いのことを知るために、ちょっとお話ししようってだけさ。君は人間のこと、ほとんど知らないだろう?」
　士道に危害を加えようという様子は見受けられない。この機会を逃さず、話を進めていくしかない。
「たとえばさ。君は人間が全部で何人いるか知ってるか」
「全部で?」
　こちらの質問に腕を組む彼女。どうやら真面目に考えてくれているらしい。
「……100、いや200か?」
「残念、もっと多いぞ」
「では1000でどうだ」
「もっともっとだ。この街だけで1万人は越えてるし、世界中全部入れたら何十億にもなる」

「なっ……馬鹿な。私は今まで何度もこの世界に来たが、そんな数の人間がいるとは到底思えん」
「当たり前だ。君がいる間、普通の人間は地下にいるからな」
驚いた表情を見せる少女に、士道はどんどん語りかけていく。対話に必要なのは、とにかく言葉の積み重ねなのである。
「君が今まで出会ってきたのは、君を殺そうとする人達だけだったんだろう。でも、それは人間のうちのほんの一部だ。俺のように、君に敵意を持っていない人間だってたくさんいるんだよ」
「……本当か？」
「本当だ」
「お前は、何者だ」
「俺は五河士道。ここ、来禅高校の教師だ。この2年４組の担任でもある」
「らいぜんこうこう……きょうし……？」
「興味ありそうな顔してるな。教えてやろうか？」
「むっ……ふ、ふん。別にお前のことなど知りたくもないぞ。興味なんて湧いてない」
士道が笑いかけると、彼女はぷいっと横を向いてしまう。
「本当に知りたくないのか？」

「本当だ」

「本当の本当に？」

「本当の本当だ。あまりしつこいと斬るぞ……って、お前、なぜそんな泣きそうな顔をしているのだ」

「……俺って教師だからさ、いろいろ教えたがりなんだよ。だから、そう突っぱねられるとへこむというか」

「なんだそれは……し、仕方ない。それなら、お前のために話を聞いてやろう」

＊

「士道くん、うまく会話を運べているようですね」

「ええ。最初はどうなることかと思ったけど、開き直ったみたいね」

少し緊張の解けた様子の神無月の言葉に、琴里は小さくうなずく。彼女の口には、いつも通り好物のチュッパチャプスがくわえられていた。

「さっきから何度か選択肢が出てるけど、止める前に勝手に話進めちゃうくらいだし」

〈フラクシナス〉艦橋のスクリーンには、士道が接している精霊の少女の姿が大きく映し出されている。画面端には好感度等のパラメータも表示されていた。

会話の重要な場面に差しかかると、ウインドウが出てきて３択の選択肢が現れるようになっており、クルー全員で選んだ結果を士道に伝えることになっていたのだが……。
「ここは少し、士道に任せてみましょうか。言葉に詰まるまではね」
にやりと笑みを浮かべながら、琴里は精霊と対話する兄に期待を寄せた。

＊

「つまり、シドーは大勢の人間にものを教えているのか」
「そう。それが教師の役目だ」
「それはなかなか偉い立場なのではないか？」
「その通り。俺は偉いんだぞ」
「……とてもそうは見えないが」
「君、初対面なのにはっきり言うね……」
会話を重ねていくうちに、少女は士道のことを名前で呼ぶようになっていた。少しは心を許してくれているのだろうか、と士道は希望半分な推測をする。
「あ、そういえば」
「ぬ、どうした」

「名前、まだ聞いてなかったと思ってさ。教えてくれないか」
自分が名乗るだけで、向こうの自己紹介を受けていなかったことに今さらながら気づく。
……しかし、尋ねられた彼女はなぜか物憂げな顔を見せた。
「名、か。そのようなもの、私にはない」
「ないのか」
「そうだ」
名前というのは、本人の存在を示す大事なものだ……と、士道は考えている。それ以外にも、ないといろいろ不便だったりする。
「お前がつけるか？」
「えっ」
「必要な物なら、シドーがつけろ。私の名を」
「……それは、すっげー大事な役だな」
「ん、そうなのか？」
「ああ。名前っていうのは、そういうもんだ」
さてどうしたものかと首をひねる士道。
人に名前をつけたこともないのに、いきなり精霊の名付け親になることを求められて

しまった。

＊

少女の発言を受けて、〈フラクシナス〉のクルー達はおのおの彼女にふさわしい名前を考えることを命じられていた。
「もうちょっとマシな案は出ないのかしら……」
提示された名前の数々を眺めて、琴里はやれやれとため息をついた。
別れた女の名前だったりいわゆるキラキラネームだったり、碌なものがない。
『麗鐘（くららべる）』なんて、士道に言わせたら次の瞬間には彼の首と胴体がつながっていない可能性まである。
「ここは私が考えて……」
と、そこで琴里は中央スクリーンへ視線を戻す。待たせていることで精霊が不機嫌になっていないかチェックするためだ。
『たとえば、この香という字はいい匂いがするって意味なんだけど、もうちょっと広げて声や姿、雰囲気がいいというニュアンスにもなりえるんだ』
『奥が深いのだな、言葉というものは……見た目が気に入ったから、これを私の名に入れ

られないか』

『よし、じゃぁ一文字決まりだな』

待たせるどころか、勝手に命名作業が始まっていた。

士道が黒板に様々な漢字を書き、それぞれの意味を説明している。

「……そういえば、シンは国語の教師だったね」

艦橋下段でスクリーンを眺めていた令音が、感心したような口ぶりで言う。

「もう一部決まっちゃったみたいだし、いいかしら」

漢字に関する知識は豊富なようだし、ここのメンバーが考えるよりはいいのかもしれない。そう思い、琴里は彼らのやり取りを見守ることにした。

＊

「うーん、そうだな……じゃあ、十香、なんてどうかな」

ある程度煮詰まってきたところで、士道は名前候補のひとつを示してみた。

「トーカ？　この十の字と、香の字をくっつけたのか？」

「よくわかったな、正解だ。君が気に入った漢字の中で、組み合わせても問題なさそうなのを選んでみた」

「ふむ、なるほど。それで、どういう意味になるのだ」
興味津々、といった様子で尋ねてくる姿を見ていると、彼女が人間でないことを忘れてしまいそうになる。
「さっき教えた通り、十の字はただ数字の１０を表すだけじゃなくて、全部がよくまとまっているという意味がある。十分とか十全とか、その辺の言葉が例だな」
「香の字は、確か匂いや姿がいい、という意味だったな」
「そう、つまり、それを合体させると」
黒板に大きく『十香』の文字を書いて、士道はその部分を軽く叩いた。
「完璧な魅力ある美人、ということになる！」
「……な、なんだか偉そうな名だな」
困惑したような顔を見せる彼女だが、本気で嫌がっている風には感じられない。
「シドー。その、私にはその名に恥じぬ魅力があるのか。人間の感情は、よくわからん」
「魅力ありありだって。１０人に聞いたら１０人とも美人と答えるくらいにはな」
整った顔立ち。見るものを妙に惹きつける瞳の色。
そして何より、胸部に実ったたわわな果実が——
「……卑猥な視線を感じる」
「き、きき気のせいだ」

危うく注視しすぎるところだったと反省する士道。こんなところで機嫌を損ねていては今までのことが台無しになりかねない。
「シドー。一度十香と呼んでみろ」
「……十香。どうだ、響きは」
「うむ、いい感じだ」
そう言うと、彼女は初めて士道に笑顔を見せたのだった。
「私の名は、十香に決まりだ。シドー」
「ああ」
そのうれしそうな表情に、嘘偽りはないだろう。
今ならもっと、いろいろな話ができそうだ。
「十香。ちょっと聞きたいことが——」
話しかけようとした矢先、耳をつんざくような爆音とともに校舎が激しく揺れた。バランスを崩した士道は、そのまま床に倒れこんでしまう。
『そのまま伏せておきなさい。撃たれたくなかったらね』
体を起こそうとしたのを琴里に止められた次の瞬間、今度はおびただしい数の銃撃が教室の窓ガラスを突き抜けてきた。
「な、なんだこれ……!」

『ＡＳＴの攻撃よ。精霊が怒って出てくるのを待っているのか、それとも校舎を破壊して逃げ場をなくすつもりなのか』

いつまでも出てこない精霊にしびれを切らした、ということらしい。

十香の様子を見た士道は、彼女の顔がひどく悲しげに歪んでいることに気づいた。

「十香」

いったん４組の教室への銃撃が止んだのを確認してから、士道は立ち上がって彼女のもとへ歩いていく。

「逃げた方がいい。ここに留まっていては、シドーも撃たれてしまう」

最初に聞こえた爆音の存在から、ＡＳＴは銃だけでなく爆弾の類も使用していると考えられる。

そうなると、校舎が崩れるまであまり時間は残されていない。

「そうだな。でも」

猶予がわずかしかないのなら、次の機会のことを考えるべきだ。

「その前に、指切りしよう」

「指切り？　なんだそれは」

「約束をするってことだよ。また会おうって約束をな」

士道の言葉に、十香の瞳が揺れる。驚いているのが、彼にもよくわかった。

『会う約束をするなら、どこか大きな建物の中に入ってくれるよう頼んだ方がいいわね。今回みたいに、ＡＳＴが手を出すまでにある程度の時間が生まれるはずよ』

　琴里のアドバイスを耳に入れつつ、士道は続けて十香に語りかける。

「今度こっちに来た時は、すぐ大きな建物の中に入ってくれると助かる。そしたらまた、今日みたいに十香と話せるから」

「……また、私に会いに来るのか？」

「だって、まだ全然話し足りないからな。十香だって、いろいろ聞きたいことが残ってるはずだ」

「…………」

「だから、約束しよう。なっ」

　笑顔で右手を差し出す士道。対する十香は、しばし黙り込んだ後、こくりとうなずいた。

「いいだろう。約束だ」

「よし、じゃあ指切りだ」

「シドーの指を切ればいいのか？」

「違う違う違う！　怖いから変な光は出すな！」

　十香の指先に淡い光が灯りかけたので、全力で制止する。

「指切りっていうのはな、こうして小指を立てて」
「こ、こうか」
「そう。で、そのままお互いの指を絡めて」
指切りの形を教える士道と、真似する十香。やがてきちんと準備ができあがる。
「うん。じゃあ……指切りげんまん、嘘ついたら針千本のーます！」
「は、針を千本？　すごく痛そうだぞ」
「痛い思いをしたくなかったら、ちゃんと約束守ってくれよ？」
手を離して、もう一度十香に笑いかける。すると彼女も、同じように笑い返してくれた。
「シドーも、約束を破るな」
「わかってる。じゃあ、またな」
「ああ。またな」
再会を前提とした別れのあいさつを交わし、士道は教室を出た。

＊

「お疲れ様。どう？　初仕事の感想は」

〈フラクシナス〉に回収してもらった士道は、その足で艦橋に向かって琴里と会ってい
た。
「……正直、予想以上にうまくいったと思う」
「そうね。私達から見ても上出来だったわ。ほとんどこっちの出る幕なかったし」
　艦長席に座る琴里は、その言葉通りに上機嫌に見える。
　士道の方も、緊張から解かれたことで表情が緩んでいた。
「精霊っていっても、普通の子とあんまり変わらないんだな。なんていうか、途中から普
通にうちの生徒と話してるみたいだった」
　直接会って対話を行ったことで、士道の中の精霊に対するイメージは大きく変わって
いた。
　その身に宿す力はともかくとして、彼女の精神は人間のものと大差ないのではない
か、と。
「あの子が……十香が、好きこのんで人間を襲うとは考えられない。だから、彼女が命を
狙われ続けてる今の状況は、気持ちのいいもんじゃないな」
「……つまり、次も会う気満々なわけね」
「ああ。というか、約束してたの聞いただろう」
「破ったら殺されるわよ、士道」

意地の悪い笑みを浮かべる琴里に、士道ははっきりとうなずいた。

「そうならないように、頑張るよ。十香に、人間の中で生きていくことを選んでほしいからな」

人間の世界

「ふわぁ……」
　大きなあくびをしながら、士道は歩き慣れた街の歩道の上で立ち止まる。
〈ラタトスク〉の一員としての初仕事を終えた昨日は、深夜にわたるまで映像を見ながらの反省会を一同で行っていたため、若干寝不足気味である。
「今日授業がないのは正直助かったな」
　十香との対話は、士道の体力を想像以上に削っていた。この状態で授業を行っていたら、集中力を保てなかったかもしれない。
　今日は平日なので、本来なら学校があるはずだった。が、来禅高校の校舎は昨日の戦闘の影響で無残にも破壊されてしまっており、早朝に休校情報が生徒と教職員一同に送られていたのである。
　というわけで、士道はリフレッシュがてら本屋の前まで来ている。服装もジーンズにパーカーという比較的ラフなもので、完全な休日スタイルだ。
　国語教師として普段から文字に親しんでおくのは義務みたいなものであるし、ついでに妹には見せられないようなムフフな雑誌を吟味するのもありだと考えた次第である。

「こっそり持ち帰らないとな」
めざとい琴里の目をかいくぐる方法を思い描きながら、自動ドアをくぐって中に入る。
「おお、シドー！　やっと来たか」
「……………」
入口付近に立っている人物を見た瞬間、士道は思わずまばたきを繰り返してしまった。
続いて目蓋をこすってみるも、やはり見える景色に違いはない。
「待ちくたびれたぞ。もう少しで針千本を調達しにかかるところだった」
「十香……？　なんで、ここに」
「シドーが言ったのではないか。建物の中に入れと」
昨日出会って言葉を交わした精霊・十香は、確かにそこに存在していた。むすっとした顔で、士道のもとへ歩み寄ってくる。
空間震警報は出ていない。ゆえに、誰ひとりとして避難している人間はいない。開店からそう時間の経っていない本屋の中にも、少なくはあるが人がいる。
つまり、精霊の出現時に発生するはずの空間震が起きていない。〈ラタトスク〉もＡＳＴも、彼女が今ここにいることを把握していないことになる。

「どうした。黙り込んで」
「ああ、いやなんでもない。そうだな、俺が言ったんだもんな。遅れてすまなかった」
「わかればいい」
　満足げにうなずく十香。そんな彼女を、横を通り過ぎる客が不思議そうに眺めていた。
　そこでようやく、士道は彼女の格好が目立ちすぎることに思い至った。
「とりあえず、場所変えてもいいか。外に出よう」
「ん？　外に出てもかまわないのか」
「ああ。今日は大丈夫だ」
　十香を連れて、本屋から人気のない路地まで移動する。
「昨日は、あの後どうなったんだ」
「いつもと同じだ。適当にあいつらをあしらっているうちに、私の身が消えて終わった」
「身が消える？　それは、君の意思と関係なくってことか」
「そうだ」
　琴里から精霊が異世界の存在であることは聞かされていた士道だが、姿を消すのが自己の意思でないというのは初耳だった。
「この世界ではない空間にいる間、私は休眠状態に入る。そして意思と関係なくこちら

の世界に現れ、意思と関係なく消える」
　想定していなかった内容の発言に、士道の思考は若干混乱してしまう。
　十香の言葉が本当なら、彼女が空間震を引き起こすことには故意も過失も一切ない。にもかかわらず命を狙われるのは、やはり認められるような事態ではない。もちろん、ＡＳＴ側の事情が理解できないわけではないのだが。
「……今日は、人間の世界について教えようと思う。いろいろ楽しみながらな」
「人間の世界、か」
「気づいてたと思うけど、人の数が多いだろう？　今日はみんな地下に行っていないんだ」
「なんと、そうなのか。はっ、まさか人間総出で私を始末しようと!?」
「そんな物騒な話じゃないって。昨日も言ったろ？　君を襲おうとする人間はほんの一部だって」
「ぬ……そういえばそうだった」
　ぽりぽりと頬をかく十香。この様子だと、先ほどの本屋でおとなしく待ってくれていたのは運がよかったのかもしれないと士道は思う。
「じゃあ、早速街に出ようと思うんだが……その前に、十香の服装をなんとかしないとな」

「服装？　このままでは駄目なのか」
「目立ちすぎるんだよ。さっきもジロジロ見られてただろう？」
「あれは私の格好のせいだったのか。では、どんな服ならよいのだ」
　そうだな、と腕を組む士道。
　ちょうどその時、歩道を通る来禅高校の制服姿の女子が視界に入って来た。休校情報をうっかり聞き逃して登校してしまい、帰るついでに街をうろついているといったところだろうか。
「ああいう服ならいいのか」
「だな。でも追いはぎするわけにはいかないし、ここは俺の財布のひもを解き放つことにしよう」
　近くのデパートにでも寄って、手早く女性物の服を買ってくればいい。別に制服である必要はないのだから――
「おい、シドー。これでかまわないか」
「へ？」
　声をかけられたので横を向いて……士道はそこで絶句した。
　いつの間にか、十香の服装が学生服に変わっていたのである。
「さっきの女から奪おうとも思ったが、お前が追いはぎは駄目だと言うから自前で用意

したぞ」
「自前って、どうやって」
「霊装を解除して、先ほど見た服を再現してみただけだ。そう難しいことではない」
「す、すごいな……」
さすが精霊、と素直に感心する士道。
「しかし、少し胸がきついな……」
「………」
激しく自己主張する双子山から目を離し、ぶんぶんと首を振る。
沸き立つ邪念を抑え込み、彼は十香に優しく笑いかけた。
「行こうか」
彼女の歩幅に合わせることを意識して、ゆっくりと歩き出す。
「うむ」
隣に女の子を連れて歩くのは、何も今回が初めてではない。碌に成就したためしがなくとも、これまで重ねてきたデートの経験は確かに士道の中にあるのだ。
それを活かして、十香に満足してもらえるよう頑張るしかない。
「っと、そうだ」
歩きながら携帯電話を取り出し、メール送信画面を開く士道。十香と一緒にいること

を、琴里に知らせておく必要がある。
十香の目の前で通話を始めると怪しまれる可能性があるので、メールで妥協することにしたのだ。
内容は、現在十香と行動していることと、これから商店街に向かうこと。
「送信完了」
「先ほどから何をしているのだ」
「ああ、ゲームだよ。やってみるか？」
「ゲェム？　なんだそれは」
十香に画面をのぞきこまれる前にゲームアプリを起動し、うまくごまかすことに成功。
「これはテトリスっていうんだけどな。やり方は——」

＊

同時刻。
食料の買い出しに出かけていた鳶一折紙は、今現在自らの視界に映るものに対して驚愕を禁じ得なかった。

街路を歩く男性についてはよく知っている。折紙のクラスの担任教師で、彼女にとって大切な人である五河士道。
そして、彼の隣を歩く女性についても、折紙はよく知っていた。
「なぜ、精霊が」
普通に考えればありえない。
空間震もなしに精霊が現れ、あまつさえ人間と仲良く歩いているなど。
だが、これまで何度も〈プリンセス〉と刃を交えてきた折紙が、敵の顔を見間違うはずもなかった。
「……………」
早急に確かめる必要がある。
あの少女が〈プリンセス〉本人なのか、それとも他人の空似にすぎないのか。
もし本物なら、その時は——

＊

商店街に到着した士道達は、十香が興味を示した店を中心に様々なところをまわり始めた。

「おいしいか？　きなこパン」
「うまい、うまいぞシドー！　このきなことい う物、恐ろしいほどの美味だ……！」
「そうか、それはよかった」
　精霊は食事をするのかどうか、何気に気になっていた士道だが、十香が自らパン屋から漂うパンの香りに誘われたことでその疑問も解決した。おいしそうにきなこパンを頬張っている姿を見ていると、味覚も人間と大差ないと感じられる。
「む、あっちからもいい匂いがするぞ。気になるな」
「……というか、むしろ並みの人間より食欲旺盛だな。これは」
　見た目にそぐわず大食いだ、という感想を抱きながらも、足取り軽く向かいのカフェに進んでいく十香を微笑ましく思う士道。
「何をしているシドー。早く来い！」
「仰せのままに、お姫様」
　一度言ってみたかったキザなセリフを口にしつつ、彼女のあとを追って店内に入った。
　２人用の席に案内され、それぞれメニューを見て注文を決める。
「頼んだものが来るまでちょっと待たなきゃいけないんだけど、大丈夫か？」
「問題ない。……そうだシドー、時間が余るならテトリスがやりたいぞ」

「いいけど、うまくできないからってさっきみたいに握りつぶそうとするのはやめてくれよ」
「あ、あれは少し熱中しすぎただけだ。そんなくだらない理由で士道の私物を壊したりはしない」
「なら、いいんだけどな」
それから食事が運ばれてくるまで十香のテトリスを応援し、注文したものが来てからはおしゃべりしながら料理を味わった。
「そろそろ出るか」
伝票を持って立ち上がり、士道は会計を済ませようとレジへ向かう。十香が非常によく食べるため、給料日前の財布にはちょっとばかし厳しいダメージが与えられてしまった。が、必要経費だと割り切るしかない。
「……はい、ありがとうございます」
ついでに今は、財布の中身よりも目の前の店員にやたら見覚えがあることの方が気になっていた。
「えっと」
目にできた大きな隈とこの豊満な胸は間違いなく令音である。なぜこんなところに、と一瞬焦る士道だが、ひょっとしてメールを受け取った琴里がサポートのためによこし

たのではないかという考えにたどり着いた。
「…………」
その予想は正しかったようで、受け取ったレシートには自然なデートを続けるようにとのお達しが。
「これ、デートなのか」
今さらながらそんな疑問を抱く士道。そんな彼に、店員に扮した令音は商店街の福引き券を渡してきた。
「十香。次に行くところが決まったぞ」
「おお、どこだ?」
「福引きだ。来ればどんなものかわかるよ」
令音に小さく礼をしてから、士道は十香を連れてカフェを出た。
「ん?」
「お?」
「あれ?」
外に出た途端、見慣れた3人組と出くわした。
亜衣、麻衣、美衣のかしましトリオ（士道命名）だ。
「五河先生……隣の子、うちの制服着てるけど」

「まさか、ついに教え子に手を出した!?」
「マジ引くわー」
士道の横に立つ十香を見て、とんでもない勘違いをする彼女達。
「馬鹿、違うぞ。この子とはそういう関係じゃないし、教え子でもないし」
「うちの生徒じゃないのに制服着せてるの？」
「コスプレプレイかコラ」
「もう引くってレベルじゃないんだけど」
「いや、だからそうじゃなくて……ああもう、説明するのが面倒くさい！」
逃げるが勝ちと判断した士道は、十香の手を取って走り出す。
「し、シドー!?　いきなりどうしたのだ」
「いいから、ちょっとだけ付き合ってくれ！」
福引きの行われている場所目指して、１分ほどダッシュし続けた。
後ろを振り向いて、士道は亜衣達の姿が見えないことを確認する。さすがに追いかけてくることはなかったようだ。
「ごめんな十香。もう走らなくていいぞ」
「まったく、何があったというのだ。さっきの者は敵か？」
「いや、敵じゃないんだけどさ」

士道としては、苦笑いを浮かべることしかできない。十香はそんな彼の様子を訝しげに眺めていたが、やがて別の方向へ視線を移した。
「シドー、あれはなんだ？　何やら人間が並んでいるようだが」
「ああ、あれが福引きだよ。やってみようか」
「よし、では行くぞ」
元気よく一歩を踏み出す十香だったが、そこで士道と手をつないだままであることに気づいたようだ。彼の体重分だけ、思ったように動けなかったからだろう。
「悪い。俺が手を引っ張ったんだよな」
一言謝ってから、すぐに手を離そうとする士道。
……ところが、なぜか十香は彼の手をぎゅっと握りしめてきた。
「十香？」
「こ、このままでいい。暖かくて、なかなか悪くない」
照れているのか、そっぽを向いてそう答える十香。
士道もそこで、改めて彼女の手の感触を確かめる。自分のものよりずっと小さく、ふにっとした柔らかさを持っていて、まさに女の子の手という風に感じられた。
「じゃあ、このままで」
手をつないだまま、福引きの列の最後尾に並ぶ。スタッフの人も並んでいる客も、全

員〈フラクシナス〉のクルーとして士道が知っている人物だった。
「ああいう風に回せばいいのだな？」
「そうそう。あんまり力を入れすぎずに、ゆっくり回すんだ」
十香に説明している間に、士道達の番がやってきた。
「では——いくぞ！」
「だから力入れすぎるなって」
何度も注意した結果、十香はちゃんとゆっくりとした速度でガラポンを回し始めた。
そして、気になる結果は。
「大当たり！　1等のドリームランド完全無料ペアチケットです！」
スタッフの人（川越）が大声で叫びながら鐘を鳴らす。十香が出した玉は赤色で、本来はハズレのはずだが……おそらく、彼女が何色の玉を出しても1等にするつもりだったのだろうと士道は予想する。
「おお！　大当たりだぞシドー！」
「ああ、よかったな」
「裏に地図を書いていますので、ぜひ訪れてみてください」
受け取ったチケットの裏には、確かにドリームランドの場所を示した地図が描かれていた。

「行くぞ、シドー」
「お、おう」
　福引き所から離れる十香を追いながらも、士道はドリームランドという名称に引っ掛かりを覚えていた。
　遊園地のような名前だが、そのような施設がこの街に存在しているかは記憶していない。
「ドリームランド……確か、もっと違うジャンルで聞いた名前だ」
　記憶を掘り起こそうとこめかみに手を当てる士道。
　……そう。あれは数ヶ月前、歳の近い男性教師陣で飲みに行った時のこと。宴もたけなわといったところで、女性関連の話になって。
「……あ、思い出した」
「ぬ？　どうかしたか」
「十香。ドリームランドは今日休みなんだ。だからまた今度にしよう」
「そうなのか？　なら、仕方ないな……」
　モテることで有名の柊教諭いわく『ドリームランドはサービスが充実しているから気分よくやれる』とのこと。
　つまり、ドリームランドとは男女が２人でラブラブに愛し合うホテルである。悲しい

ことに士道は行ったことがない。

「危なかった」

危うくこの純真無垢な少女をオトナな空間に連れて行くところだった。早めに進路変更できたことに、士道はホッと一息をつく。

「マイエンジェルよ。なぜ君はそんな場所を知っているんだ……」

作戦の立案者であろう妹の顔を浮かべ、心の中で涙を流す。春休みまでのピュアな彼女はどこへ行ってしまったのだろうか。そう思わずにはいられない士道であった。

しかし、心では泣いていても明るく振る舞うのが大人の男の仕事である。

「ドリームランドの代わりに、いろんなところに連れて行くから」

「本当か？」

「当たり前だ。まだまだ時間はたっぷりあるからな」

「よし、では改めて出発だ！」

笑顔で宣言をする十香の姿は、文句なしに可愛いものだった。

＊

それからも、〈ラタトスク〉プロデュースのデートプランに乗っかって、士道と十香は

濃密な時間を過ごした。

「ここからなら、街全体が見渡せる」

「おお、すごいな」

　時刻はちょうど午後6時。夕焼けに染まった高台の公園で、彼らは先ほどまで歩き回っていた街の景色を眺めていた。

「あそこがきなこパンの店だな！」

「よくわかるな。確かに場所はあの辺だけど、俺は全然見えないぞ」

「自慢ではないが、私は目がいいのだ」

　今日1日、十香には見るものすべてが新鮮に感じられたことだろう。

「どうだ？　人間の世界を見た感想は」

「……すごく、楽しかった。皆親切にしてくれて、時間を忘れるほどに夢中になった」

「そうか。そう言ってくれると、俺も案内したかいがあるってもんだ」

　屈託のない笑みを浮かべる彼女を見て、士道は満足げにうなずく。人が生きる世界を気に入ってもらえたことが、素直にうれしかった。

「……だからこそ」

　だが、そこで十香の表情に影が差す。必死に何かをこらえるような、そんな顔だ。

「だからこそ、私は許されないのだろうな」

士道の隣を離れて、彼女は彼に背を向ける。空間震とやらのこと、私を襲う……ＡＳＴというやつらのこと」
「先ほど、シドーが教えてくれただろう。空間震とやらのこと、私を襲う……ＡＳＴというやつらのこと」
「ああ」
「私が現界するたびに、この景色を壊すことになる。人間達は地下に逃げなければならなくなる。そんな危険な存在――」
「十香。君は許されるよ」
士道の言葉に、十香の肩がびくりと震える。
彼女には、伝えなければならないことがたくさんあるのだ。
あっちを向いている以上こちらの顔は見えないだろうが、それでも士道は笑顔を作った。
「なぜなら君は美人で、そのうえ巨乳だからだ。胸が大きい女性はそれだけで許される」
「なっ……なんだそれはっ！　わ、私は真面目な話をしているのだぞっ」
あまりに予想外の答えだったからか、焦燥した様子の十香は士道の方を振り向いた。
軽いセクハラ発言を受けて、頬が薄くピンクに染まっている。
「まあ、今のは言いすぎにしてもだ。十香は素直で、さっきみたいに他人を気遣えるいい子だ。そんな優しい子、先生としては放っておけないんだよ」

「……そう言ってくれるのはうれしい。しかし」
「十香。もし、人間として生きていける方法があるって言ったら、どうする？」
十香の目が大きく見開かれる。驚いているのがよくわかった。
「そんな方法、あるはずがない」
「あるんだよ。精霊としての力は失うことになるけど、俺ならそれができる」
「……まさか、本当なのか」
「こんな嘘ついてどうするんだ。俺は本気だ」
もう一度、士道は眼前の少女に笑いかけた。
信じられないといった表情をしていた彼女だったが、次第にその瞳に希望の色が灯っていく。
「私は、ここにいていいのか。また、今日のような楽しい日を過ごせるのか」
「もちろんだ。ＡＳＴに命を狙われない、そんな日々がきっとやってくる。そうなったら、俺の学校に転校してくるのもいいかもしれないな」
「私が、シドーの生徒になるのか」
「個性的な子が多いから、きっと楽しいと思う」
「そうだな……それは、本当に楽しそうだ」
白い歯を見せる十香を見て、士道は改めて思う。

彼女には、戦いよりも平穏な日常が似合うに違いない、と。

「シドー」

両手を胸の前で組み、十香は彼の名を呼んだ。瞳は潤んでいるが、決して表情は暗くない。

「私は、生きて――」

彼女が一歩踏み出そうとした、その瞬間。

士道の目の前を、弾丸のような何かが横切った。

「……………え？」

それは、どちらがあげた声だったのだろう。

そんな判断もつかないほど、士道の頭の中は空っぽになっていた。

「……………ぁ」

十香が視線を下に向ける。

彼女の体には、どういうわけか大きな穴が開いていた。

「と、おか」

辺りの地面には、無造作に飛び散った赤い液体。

目の前で起きている事象を理解することもできず、一歩も動くことさえできず。

士道はただ、崩れ落ちる少女の体を見ていることしかできなかった。

「十香」

数秒経って、ようやく脳がまともに働き始める。

「十香っ‼」

周囲から突き刺さるような視線を感じつつも、かまわず十香のもとへ駆け寄ろうとする。

「……シ、ドー」

その瞬間、うつぶせに倒れていた彼女の指先がぴくりと動いた。

それを見て、士道は彼女がまだ死んでいないことに安堵を覚えた。今すぐ〈フラクシナス〉へ戻って、手当てをしてもらえばなんとかなるかもしれない。

「にげろ……シドー」

だが、希望を見出し近づこうとする士道を、十香のかすれた声が押しとどめた。

まるで何かに怯えているかのような、切羽詰まった懇願だった。

「はやく……制御、できな」

——刹那。

士道は、自らの足が地面を離れていることに気づいた。

「は……？」

爆風が、突然吹き荒れていた。士道の体は、それに耐えられず浮かび上がったのだ。

「ああああああっ!!」

突風の中心に、いつの間にか立ち上がった十香の姿があった。

霊装と呼ばれる紫の鎧を顕現させ、喉が潰れてしまいそうな叫びをあげている。

一瞬だけ見えた彼女の瞳は……光を失っていた。

「十香!」

名前を呼ぶも、彼の言葉は彼女には届かない。

今まで経験したことのない圧力の前に、士道の体は成すすべもなく吹き飛ばされた。

手を伸ばすための力

「冗談でしょう……？」
　信じられないといった様子で口を開いたのは、折紙の上司でありＡＳＴの隊長を務める女性、日下部燎子一尉だった。
　折紙達は、空間震を起こさずに現れた〈プリンセス〉を発見し、討伐することを決定。霊装を纏っていない隙を突き、折紙が対精霊ライフル〈Ｃ（クライ）・Ｃ（クライ）・Ｃ（クライ）〉による狙撃を行うことになったのが、数分前の出来事。
　そして、折紙の放った弾丸は間違いなく精霊の胸を貫いた。
　即死とまではいかずとも、大きなダメージを与えられるはずだったのだ。
「なんなのよ、この馬鹿げた霊力は！」
　風穴を開ける一撃が、精霊の本気を引き出してしまったのか。
　立ち上がった〈プリンセス〉は、周囲一帯に暴風を巻き起こし始めた。ＡＳＴの隊員達による銃撃が行われているが、それらは霊装に届きすらしていない。
「………」
　随意領域により強化された視力で、折紙は冷静に敵の様子を観察する。

ライフル弾に貫かれたはずの穴は、すでに跡形もなく消え去っていた。驚くべき治癒力と言わざるをえない。
現在の〈プリンセス〉が狙う対象は……不明。彼女の虚ろな目は、焦点が定まっていないように見える。
特に狙いを定めることもなく、ここにいる全員を始末するつもりなのか。
「……あ」
と、そこで折紙の口から小さく息が漏れた。
理由は、視界の端で青年が動く姿を捉えたため。
先ほどまで〈プリンセス〉の近くにいた彼——五河士道は、風に吹き飛ばされて地面に倒れたままだった。しかし今、彼はゆっくりとその身を起こし、立ち上がろうとしている。
「よかった」
意識があって動けるのなら、最悪の可能性は考えなくて済む。折紙にとって、士道は特別な人間であり、決して失いたくない存在なのだ。
……〈プリンセス〉の注意はどこにも向かっていない。誰がどう動いても、意に介さずその場に留まり続けている。
ならば、ここで折紙が士道を確保するために移動しても狙われる可能性は低いはず

だ。
　下手に標的にされて彼に危険が及ぶのを危惧していた折紙だが、これで動かない理由はなくなった。
「五河先生……」
　彼をこの状況に巻き込んでしまったのは、〈プリンセス〉に不用意な一撃を与えた折紙自身の責任だ。
　自分の失敗の尻拭いは自分でしなければならないと強く思い、彼女は暴風の中を飛ぼうと腰を上げた。
　しかし。
「…………っ」
　その光景に、思わず息をのんだ。
　立ち上がった士道が、あろうことか暴風の中心源――〈プリンセス〉に向かって歩き出したのだ。
「何やってるのよ、彼は」
　驚愕を顔に表す燎子。折紙もまったく同意見だった。
　……あまりに、危険すぎる。
「ちょっと、折紙!?」

一瞬の硬直の後、折紙は真っ直ぐ士道のもとへ飛び立った。

＊

「ぐっ……！」
意識が戻った瞬間、士道は自分の体が仰向けになっていることに気づいた。
風に飛ばされて地面に叩きつけられた衝撃で、気を失ってしまっていたらしい。
「そうだ、十香……うっ！」
起き上がろうとするが、支えにしようとした右腕に力が入らない。骨折かどうかはわからないが、怪我をしていることには違いなかった。
仕方がないので左腕だけで上半身を起こそうと考えた、その時だった。
「あ……」
右腕に小さな炎が燃え上がったかと思うと、さっきまで感じていた痛みがきれいさっぱり消えたのである。
まるで、その炎が体の傷を癒したかのように。
「話で聞くのと実際に体験するのとじゃ、結構違うよな」
琴里が士道を精霊との交渉役に選んだ理由。そのうちのひとつが、この治癒力だと聞

いている。彼女によれば、たとえ腹に大穴が開いても余裕で復元できるとのこと。
「そこまでいくと、まるでゾンビだな」
自分の体が異常なことにはいまだに抵抗があるものの、それを気にしている場合ではない。
体を起こすと、１０メートルほど先に十香が立っているのが見えた。相変わらず風が吹き荒れており、士道のいる場所ですら結構な強さだ。
「十香……」
彼女が撃たれたところまでは把握している。あの後、いったい何が起こったのか。
士道が必死に頭を働かせていると、ズボンの右ポケットに入っている携帯電話が震え始めた。
表示されている名前は、五河琴里。
「もしもし」
『意識が戻ったようね。傷は治ってる？』
回線越しに聞こえる妹の声は、若干の焦燥をはらんでいるように感じられた。
「多分な。それより、今どういう状況なのか説明してくれ」
『胸を撃たれた十香は、生存本能が働いたのか霊力が暴走。傷はもう塞がってるみたいだけど、あの暴風は収まる気配がないわね。多分彼女、意識飛んでるわ』

「このままだとどうなるんだ」
『霊力の勢いはどんどん増してる。放っておけば、どんどん被害の範囲が拡大して……最悪、住宅街まで及びかねない』
　住宅街まで被害が及ぶ。
　それはつまり、一般人まで巻き込んでしまうということに他ならない。
『とにかく、一度〈フラクシナス〉に戻って来なさい。作戦を立て直さないと』
「……いや、少し待ってくれ」
『はあ？』
「俺なら、十香の霊力を封印できるんだよな」
『ええ、それはそうだけど……でも、碌に近づけない今の状況じゃ』
「試してみないとわからないだろ。その間に、そっちは代替案を考えといてほしい」
『ちょっと、待ちなさい士道！　試すったって――』
　通話を切り、携帯をポケットに入れて立ち上がる。
　琴里の言いたいことはわかる。今しがたあっけなく暴風に吹き飛ばされた士道が、一度試したところで十香のもとまでたどり着けるわけがない。下手に体を傷つけるだけだ、と。
「ふー」

深呼吸をして、体に力を入れる準備をする。
たとえ限りなく無駄に終わる確率の高い行為だとしても、やらずに諦めることは士道の思考が許さなかった。
時間が経てば経つほど、何も知らない一般人に危害が加わる可能性が増してくる。彼らに怪我をさせるわけにはいかないし、後で十香が正気に戻った時、自分が街や人々を傷つけたと知ればきっと悲しむだろう。自責の念に駆られ、再び心を閉ざしてしまうかもしれない。
士道にとって、それは絶対に許容できないことだった。
「よし！」
だから、前に進む。
自身を鼓舞する意図もこめて、大声で叫ぶ。
「待ってろよ、十香……！」
一歩足を前に出すごとに、加速度的に風が強まっていく。風圧に負けないよう、しっかり地面を踏みしめる。
左足を出す。踏ん張る。右足を出す。また踏ん張る。
「くっ……」
３メートル進んだあたりから、一気に風の勢いが増したように感じられた。

時々、刃物のような鋭さを持った空気の塊が飛んできて、容赦なく士道の肌や肉を切り裂く。その都度、傷を塞ぐように炎が燃え上がった。
当然痛みは感じるが、すぐに癒えるため強引に歩き続けることができている。
……だが、いくら回復力が高くとも、もともとの体の頑丈さは一般男性と変わりない。足を進めるうちに、どうしても風に逆らう力が足りなくなってくる。
「がっ……!」
なんとか左足を前に出そうとしたその時、軸となっていた右脚に空気の刃が突き刺さった。
踏ん張るための力が伝わらなくなり、あっさりと士道の体は宙に浮かんでしまう。
まずい、と思うもすでに遅い。先ほどと同じように、いとも簡単に後方に吹き飛ばされ――
「……?」
体を襲った衝撃は、想像以上に小さかった。一瞬困惑した士道だが、後ろを振り向いて事情を理解する。
「と、鳶一?」
「大丈夫?」
吹き飛ぶ士道を空中で受け止めてくれたのは、ＣＲ―ユニットと呼ばれる装備を身に

纏った折紙だった。
「ここは危険。安全な場所まで連れて行く」
「ま、待ってくれ。俺はまだ、やらなきゃいけないことがあるんだ」
　飛び立とうとしていた折紙の瞳が、再び士道を捉える。いつもの通り無表情だったが、若干顔の筋肉が硬くなっているようにも見えた。
「それは、なに」
「あいつのところに、行かなくちゃならない。今の状況を打開するために」
「危険すぎる。到底了承はできない」
「わかってる。けど、それでも俺は諦めたくない」
　自身の感情をぶつけるように、真っ直ぐ折紙を見据える士道。
「鳶一。お前は、今のあいつのそばまで近づくことができるか」
「……近づくだけなら難しくはない。その状態でまともに戦闘ができるかと問われれば、おそらく不可能」
「そうか。なら十分だ」
　士道が精霊との対話に踏み切ったのは、折紙を危険な目に遭わせたくないと思ったからだった。まだ少女の年齢である彼女に、命のやり取りなんてしてほしくなかったのだ。

だが、今は彼女の力が必要だ。精霊を倒すためではなく、守るために。

己の力が足りないがために、教え子に頼らざるを得ないことを悔やみながらも、士道はしっかりとした口調で折紙に語りかけた。

「俺を、あいつの……十香のところまで連れて行ってほしい。お願いだ」

「先ほども言った通り、危険すぎる。あなたの体がもたない」

「それについては心配いらないさ。ほら、俺の右脚見てみろ」

言われた通りに視線を移した折紙は、士道の右脚に燻る炎を見た。

裂かれた傷は塞がり、何事もなかったかのように元に戻る。

「……これは」

揺れる瞳で士道の顔をうかがう折紙。

あなたは何者？　何を知っているの？　そんな風に尋ねているように感じられた。

「俺は行かなきゃならない。俺のためにも、あいつのためにも、そして鳶一のためにも」

「………」

黙り込む彼女を見て、やはり一から事情を説明しなければ納得してもらえないかと考える士道。抽象的な言葉だけでは――

「わかった」

「えっ」

「私が断れば、あなたは単独で精霊のもとへ向かうはず。それなら、私がついていた方がまだいいと判断した」

淡々と話す折紙。だが、彼女が士道の頼みを聞き入れてくれたことには違いない。

「ただし、後で話は聞かせてもらう」

「……ああ、ありがとうな」

「わかっているなら、それでかまわない」

小さくうなずき、折紙は士道を抱きかかえる腕に力をこめる。

心強い仲間を手に入れ、士道は再び荒れ狂う風の中へ身を投じた。

「くっ……きっつー」

先ほどよりも風圧が増している。琴里の言っていた通り、放出される霊力の勢いが激しくなっているのだろう。

軽い言葉遣いで誤魔化そうとしても、やはり体のあちこちを襲う痛みからは逃れられない。

「あと5メートルほど」

十香に近づくにつれ風も強くなる。しかし、折紙は一定の速度を保ったまま飛び続けた。

ゆっくりとではあるが、確実に中心までの距離は詰まってきている。

「残り3メートル」
一段と勢いをつけた暴風が、容赦なく襲いかかる。士道の服はいつの間にか血まみれになっていたが、気にすることではない。
折紙も覚悟を決めたのか、士道がどれだけ傷を負っても止まることはなかった。
「………！」
そして、ついに十香に手が届く位置までやってきた。
「十香！」
喉の奥から声を絞り出し、少女の名前を呼ぶ。
同時に、士道の両手は彼女の肩をがっちりつかんでいた。
「……シ、ドー？」
虚空を見つめていた瞳に、光が灯る。
「ああそうだ、士道だ！」
風は止まないが、十香の視線は確かに士道に向けられている。
まだ間に合う。後はただ、童話にあるようなおまじないをやればいいだけだ。
「ファーストキスの相手が、こんなおっさんでごめんな」
迷いなく、自らの唇と彼女の唇を重ねあう。柔らかい、とろけるような感触が伝わってきた。状況が状況だけに、ゆっくり味わうなんて余裕は当然ない。

「ああ……」
　十香の唇を通して、体中に温かい何かが流れこんでくるのを士道は感じる。それと同時に、彼女が纏っていた霊装が粒子となって消え去った。
　その際発生した光に面食らったのか、それとも風の勢いに負けたのか。折紙の手が、士道から離れてしまう。
「シドー……」
　一糸纏わぬ姿になった十香は、ぼーっとした様子で士道の名を呼んだ。どうやら、まだ意識がはっきりとしていないらしい。
　だが、彼女を取り巻いていた暴風は、次第に弱まり消滅していった。
「うまくいった、のか」
　安堵を覚えた途端、士道の体から一気に力が抜ける。緊張の糸が切れてしまったらしい。
　そして、彼がつかんでいる十香の体にも、さして力は入っていなかったようで。
「おわっ」
　２人一緒に地面に倒れこんでしまう。全裸の少女（巨乳）と絡み合う形になってしまい、士道は邪な感情を振り払うのに一生懸命だった。
　そうこうしているうちに、彼は妙な浮遊感を覚える。これは、〈フラクシナス〉の空間

転移装置を使う時のものだ。

転移する直前に士道が見たのは、十香と抱き合う彼を無表情で眺める折紙の姿だった。

まずは一歩から

「……ふむ。メディカルチェックの結果、異常はなし。ご苦労様、シン。もう自由にしてかまわない」
「そうですか。じゃあこれから令音さんとお茶でも」
「……すまないが、私はこれから用があるんだ」
「しゅん」
〈フラクシナス〉に回収された士道は、そこで十香と別れ、体に異常がないかを入念に調べられた。十香の方も、別の部屋で霊力の状態などをチェックされるとのこと。
　その検査が今しがた終わり、士道は気持ちよく伸びの姿勢をとっている。
「それにしても、軍服を着る機会なんて一生ないと思ってましたよ」
「……私は似合っていると思うよ」
「ありがとうございます」
　体の傷はすでに癒えているものの、衣服は上下ともにとても着られるレベルではなくなっていた。あちこち切り裂かれてしまっては仕方ない。
　ただ士道としては、おじゃんになったのが私服でよかったと考えている。これが、就

職祝いに両親がプレゼントしてくれた高価なスーツだったとしたら……想像するだけで寒気が走った。
そういうわけで、彼は〈フラクシナス〉にあった予備の軍服に袖を通している。サイズもちょうどよく、なかなか着心地がいい。
「十香の方は、まだ検査の途中ですか」
「……ああ、そうだね。彼女に関しては、より入念に調べておく必要がある。霊力が封印され、人間の中で生活していけるかどうかをね」
「終わったら教えてくれませんか。十香と、早く話したいので」
「……わかった。では、艦内で待っているかね？」
令音の問いに、士道は首を縦に振った。
十香と会えるまでの間は、休憩室にいるクルーの人達と話をしていれば退屈しないだろう。

＊

1時間ほど経って、士道は令音の案内である部屋を訪れていた。
「シドー！」

「十香、体は大丈夫か」
「ああ、問題ないぞ！」
　病衣を着て白いベッドの上に座っていた十香は、士道が部屋に入って来た途端に元気よく立ち上がった。
「……彼女の中にあった霊力のほとんどは消え、今はもうほとんど人間と変わらない状態だ」
「そうですか。本当によかった」
　令音の言葉を聞いて、士道はほっと胸をなでおろす。
　十香の霊力の封印は、無事成功したのだ。
「シドー。私は本当に、この世界で生きていてもいいのか？」
「ああ、当然だ。今の令音さんの言葉、聞いたろ？　十香はもう、人間だ」
「そうか、そうか……うれしいな、それは。うん、うれしい」
　満面の笑みを浮かべ、十香は何度も同じ言葉を繰り返す。そんな彼女の様子を穏やかな顔で見つめてから、令音は部屋を出て行った。きっとまだ、仕事が残っているのだろう。
「また、一緒に遊んでくれるか？」
「もちろん。まだまわってない場所、この街にはたくさんあるからな」

「学校に来いと言っていたのは、本気なのか？」
「本気だよ。十香が望みさえすれば、近いうちに俺の生徒になれる」
士道だって、なんの根拠もなくあんなことを言ったわけではない。
先日、霊力を封じた精霊の暮らしはどうなるのかということを琴里に尋ねた際、こんな会話があったのだ。
『まずは戸籍を作って、衣食住を揃えてあげるわ』
『……すげえ軽く言ってるけど、それ可能なのか』
『楽勝よ。〈ラタトスク〉を舐めないことね。多少のインチキなら朝飯前だから』
『マジか』
『なんなら〈プリンセス〉を士道の学校に通わせることもできるわよ。あの子、見た目は高校生くらいでしょう』
『へえ』
つまるところ、〈ラタトスク〉の権力バンザイという話である。
「おお、ぜひ行きたいぞ！」
「わかった、俺から話しておくよ。……それでさ、十香」
こほんと咳払いをひとつ挟んで、士道は居住まいを正した。
「ぬ、どうした？」

「その、ごめんな？　あの時、いきなりキスなんてして」
　緊急事態だったとはいえ、断りもなく女の子の唇を奪ったのはよくない。素直に謝っておかなければならないだろう。
「キス、というと……お前の妹が教えてくれた、唇を重ねあう行為のことだな」
「妹？」
「先ほど部屋に来て、話してくれたのだ。私が撃たれた後、何があったのか」
　今まで元気いっぱいだった彼女の声が、急に尻すぼみになる。笑顔は消えて、少し顔を下に向けていた。
「あの時、私はほとんど意識を失っていた。自分が何をやっているのかもわからないまま、ただ立ち尽くしていた。……そんな時、シドーの声が聞こえてきた」
「必死で声張り上げたかいがあったってもんだ」
「正直、その後のこともよく覚えていない。ただ……そのキスとやらの感触だけは、不思議とはっきり残っている。とても、温かかった」
「……そ、そっか」
　あまり胸が熱くなるようなことを言わないでほしいと、士道は心の中で訴える。
　キスの瞬間を思い出したことで危うく胸以外の部分も熱くなるところだったが、聖職者の意地でなんとか押さえつけた。

「まあ、何はともあれ無事に済んでよかった。一般人に被害はなかったみたいだし、終わりよければすべてよしってやつだ」
「しかし、私はシドーを傷つけてしまったらしいではないか。きっと痛かったはずだ」
「大したことないって」
「いや、それでは私の気が済まん」
ぶんぶんと首を横に振った十香は、しばし口をぱくぱくさせた後、意を決して言葉を絞り出した。
「し、シドーは胸が好きなのだろう？」
「大好きですね」
「一片の迷いもなく言いきったな……」
食い気味に返事をしたら若干引かれてしまった。が、本能で答えてしまったので仕方がないと割り切る士道。
「その、だな。こんなことで、許されるとは思っていないのだが……いいぞ」
「いいって、何が」
「だから、私の胸を触ってもいいと言っているのだ」
「……な、なんだって？」
いきなりの爆弾発言に、思わず十香の言葉を聞き返してしまう。

「せめてものお詫びだ。こんなものでいいのなら、いくらでも触らせてやる。揉むのもありだ」
「いや、いくらでもって……恥ずかしいだろ？」
「た、確かにそれは事実だ。だが、我慢する」
　顔を真っ赤にして消え入るような声でつぶやく十香。それでも、ずいっと上半身をこちらに突き出してきた。
「ま、待て待て。俺はいったん触ったら歯止めが効かなくなるぞ？　力入れてモミモミしたり、めっちゃ粘っこく揉んだりしちゃうぞ？」
「か、かまわないと言っているだろうっ」
「…………」
　士道は奇妙だと思った。
　なんと、自分の両手が勝手に十香の胸部へ伸びていくではないか！
「…………」
　ごくり、と唾を飲みこんだ。
　そして、いよいよ禁断の果実へ触れるか触れないかのところまでやってくる。
　あと少し、あと少しだけ手を前に動かせば……
「このエロアホ兄がっ!!」

「ざふとっ!?」
「し、シドー!?」
　直後、士道の体は部屋に乱入してきた琴里の飛び蹴りにより吹き飛ばされていた。
「ふん、ざふとだって。義勇軍かっての」
「な、何をする妹よ」
「それはこっちのセリフよおっぱい星人。外で様子をうかがってたらとんでもない場面に遭遇したわ」
　冷たい視線で士道を睨みつける琴里。
「だ、だって十香が触ってもいいと」
「あんたは罪悪感に駆られて仕方なーく体を差し出した女の子の胸を平然と揉むっていうの?」
「……た、確かに」
　十香のあまりに魅力的な提案に、冷静な判断力を失ってしまっていた。
　おっぱいは人を狂わせる。その事実を痛感しつつ、士道は彼女に頭を下げた。
「ごめん十香。やっぱりそれは駄目だ」
「むう……だが、それでは」
「気持ちだけ、ありがたく受け取っておくよ。それで十分うれしいから」

「十香。女の子はね、そう易々と男に肌を許しちゃいけないのよ。士道に申し訳ないって気持ちがあるなら、他のことで罪滅ぼししなさい」
それでも少し納得のいかない様子であった十香だが、最後には士道と琴里の言葉を受け入れてくれた。
「それはそうと、あなた達もう寝た方がいいわよ。日付け変わってるし」
「え、マジで？」
「嘘ついてどうするのよ」
朝に十香と出会ったところから始まった激動の1日は、士道の知らないうちに終わりを迎えていたようだ。
「眠るのか？」
「そうだな。あんまり夜更かしすると体に悪いし」
今が深夜であることを意識すると、急に眠気が襲ってきた。布団に倒れこんだらすぐに寝てしまいそうなくらいである。
「また、会えるのだな？」
「当たり前だ。これからはいつだって会えるさ」
不安げな表情を見せる十香に、士道は優しく微笑む。
彼女はもう、ひとりで戦い続ける孤独な存在ではないのだ。

「そうか……じゃあ、また明日だ」
「ああ、おやすみ」
「霊力のない体にはまだ慣れないかもしれないけど、ゆっくり休みなさい」
就寝前のあいさつを交わして、士道は琴里とともに部屋を出た。
「琴里。十香のやつ、学校行きたいってさ」
「そう。なら早速、転入の手続きに取りかからないとね。今日はもう寝るけど」
「……すごいな、お前。いつの間にか、大きくなっちまって」
「すごいかどうかは知らないけど、士道より社会での立場は上ね」
偉そうに胸を張る琴里の頭に、無造作に手を置く。
「な、なによ」
「困ったことがあったらいつでも言えよ。お兄ちゃんが力になってやる」
「ふ、ふんっ。士道の力なんてあてになんないわよ」
「それでも、ないよりはマシだろう」
軽く妹の頭を撫でながら、士道は悪戯っぽく笑った。
「そうだ。十香の状態も安定してるみたいだし、明日みんなで祝勝会をやる、なんてどうだ？」
「あら、士道にしては悪くない提案ね」

精霊と対話し、霊力を封印するという挑戦に初めて成功したのだ。クルーの人達も達成感を味わっているのではないだろうか。
「全員が〈フラクシナス〉を離れるわけにはいかないから、ここでやりましょうか」
「お、いいなそれ」
祝勝会に関して元気に話し合いながら、士道と琴里は家路についたのだった。
「あ、言い忘れてたけど、命令無視の罰として帰ったら説教だから」
「う……すみませんでした」

＊

週が明けて、月曜日がやって来た。
先日破壊された来禅高校の校舎も無事元通りになり、今日から授業が再開される。
「鳶一」
校舎へ足を運ぶ生徒の中に見慣れた姿を見つけた士道は、彼女に歩み寄って声をかけた。
「おはよう」
「おはようございます。……よかった」

「え？」
「元気そうでなにより」
眉ひとつ動かさずに折紙が語っているのは、おそらく先週末に士道が無茶をやって傷だらけになったことについてだろう。
「あの時は助かったよ。留守電入れてたの、聞いてくれたか？」
「聞いた。でも、こうして自分の目であなたが無事なのを確認して、改めてほっとしている」
土曜日の午後のこと。折紙とほとんど話せないまま〈フラクシナス〉に戻ってしまったため、士道は自分の体に問題がないことを伝えようと電話をかけた。が、どうやら彼女は不在だったようなので留守電だけ残しておいたのだ。その後もう一度だけかけてみたのだが、その時も電話はつながらなかった。
「週末は家を空けていた。電話に出られなくてごめんなさい」
「いや、いいんだ」
こちらが無事であることさえ伝えられればよかったのだから、なんの問題もない。
「……それでだな。あの時、後で話を聞かせるって約束しただろ？」
「覚えている」
「結構長い話になるんだが、いつがいい？」

「いつでもかまわない。でも、できるだけ早くにしてほしい」
そうか、とうなずく士道。
折紙とはじっくり話しておきたいので、ゆっくり時間がとれる時を選んだ方がいい。
「なら、明日の放課後でいいか？　今日はちょっと忙しいんだ」
「わかった」
こくりとうなずく折紙。素直に受け入れてくれたようだ。
その後、士道は彼女と一緒に校舎に入り、職員室手前の廊下まで並んで歩いた。
「そうだ、鳶一」
「なに」
「今日、うちのクラスに転校生が来ることになってるんだが……あんまり驚かないでほしい」
「……？」
首をかしげる折紙を残して、士道は職員室に入っていった。

＊

「夜刀神十香だ。よろしく頼む」

朝のホームルームで、士道は鳶一折紙が目を丸くするという貴重な姿を捉えることができた。

「好きなものはきなこパン、嫌いなものは……っと、ここでは言わない方がいいのだったな」

士道が教えたやり方で自己紹介をする彼女は、ちょっと前まで精霊だった女の子。その美しい容貌に、生徒の大部分が見惚れている。

ちなみに、夜刀神という名字は令音が考案したものである。なかなか他に見ない名字だが、不思議と十香によく似合っているように士道には感じられた。

「せんせー！　その子ってこの前先生とデートしてたよね？」

「どういう関係なのか説明を求める！」

「返答によっては……」

十香の顔をばっちり覚えていた亜衣、麻衣、美衣の３人組が立ち上がった。彼女達の発言に、黙っていた他の生徒達もざわめき始める。

「シドー！　シドーの席はどこなのだ？」

「俺は先生だから席はないぞ」

「なんだ、そうなのか。私はシドーの隣の席がよかったのに」

十香の言葉によって、さらにざわめきが大きくなる。『怪しい……』『美少女が来たと

思ったらすでに担任が手籠めにしていた』などなど、事実なら士道が首にされかねない不穏なつぶやきが聞こえてきた。
「ほら、落ち着けみんな。彼女は俺の親戚で、昔から付き合いがあるだけだ。な？」
「ぬ？　……あ、ああ、そうだったな！」
事前に伝えておいた『設定』を思い出したのか、うんうんと何度も首を縦に振る十香。
下手な誤解を生まないためにも、こういう話にしておいた方がいい。琴里と話し合った結果、士道が出した答えがそれだった。
「じゃあ、夜刀神はあそこの席に座ってくれ」
「うむ、わかった」
大きくうなずいてから、元気よく歩いていく十香。生徒達の視線を見る限り、彼女と士道の関係についての疑いはだいたい晴れた……ように見える。
「ぬ」
上機嫌で席に向かっていた十香の足がぴたりと止まる。それは、彼女に与えられた席の隣に、よく見知った顔がいたから。
「シドーから聞いてはいたが……本当に貴様がいるとはな」
「……五河先生の言っていたことが、よくわかった」
睨み合う２人――十香と折紙。少し前まで文字通りの殺し合いを演じていたので無

理もないのだが、空いている席がそこしかなかったので、士道としては仕方がないという思いだった。

「ふん」

鼻息荒く椅子に座りこむ十香。さすがにこの場で戦い始めることはなかったようで、士道はほっと胸をなでおろした。

「ホームルームはこれで終わりだ。そのまま授業入るぞー」

4組の本日最初の授業は、士道が担当する現国だった。

「夜刀神はまだ教科書が届いてないから……」

一瞬折紙の顔が視界に入ったが、間違っても彼女に頼むわけにはいかないだろう。

「川端。すまないけど、夜刀神に教科書見せてやってくれ」

「はーい。よろしくね、夜刀神さん」

「うむ、よろしく頼む」

もうひとりのお隣さんである女子を指名して、十香と机をくっつけてもらった。

「よし、じゃあまずは前回やったことの復習だ」

いまだに鋭い視線をぶつけ合っている十香と折紙。

問題はまだまだ山積みだが、今はとりあえず、あの2人が同じ教室で勉強しているという状況を素直に喜ぼう。

そんなことを考えながら、士道は手元の教科書を開くのだった。

四糸乃パペット＆折紙アヴェンジャー

鳶一折紙

「琴里のやつ、まだ帰ってないのか」
火曜日の朝。週末から家に戻っていない妹の姿は、今日もなかった。
中学校にはきちんと通っているらしいのだが、十香関連の後始末が多くて〈フラクシナス〉からなかなか離れられないとのこと。
まだ１３歳なのに、司令としての仕事を十分にこなしていると部下の信頼も厚い。
「あれ……ひょっとして俺、何ひとつとして妹に勝ってる部分がない？」
可愛いし、賢いし、そのうえ何やらすごい仕事も任されている。
下手にこのことについて意識すると、兄としての尊厳が崩れかねないほどである。
「さーて、朝ご飯朝ご飯」
頭を切り替えて朝食の用意をし、食卓につく。
「せっかくひとりなんだし、優雅に音楽でも聞こうかな」
手を合わせる前にそんなことを思いついた士道は、近くの棚に置いてあるオーディオプレーヤーにＣＤをセットし、再生ボタンを押した。

「いただきます」
　流れ出すのは、士道の好きな曲の中でも最もお気に入りの歌。彼がプライベートで音楽を聴く時は、半分以上がこの一曲である。
　当初は毎朝流していたのだが、あんまりいつも同じ曲ばかりなものだから琴里に文句を言われてしまった。以来、彼女のいる場所で流す機会は減っている。
「ふんふんふーん」
　何度聞いてもいい歌である。思わず鼻歌を口ずさんでしまうほどだ。
　士道的にはこれほど心が洗われる歌はないという評価なのだが、いかんせんあまりメジャーな曲でないのが残念でならない。
「……ふう」
　コーヒーを一口すすり、今日の予定について確認する。
　授業があるのはいつも通りだが、放課後に鳶一折紙宅にお邪魔することになっているのだ。
　用件はもちろん、先日の精霊絡みの一件について。
　折紙の目の前で十香の暴走を止めたりした以上、彼女も士道がただの一般人だとは考えていないだろう。
「ちゃんと、話さないとな」

もともと、士道は折紙が精霊と戦うのを止めたくて〈ラタトスク〉の一員になったのだ。今日の会話次第では、その目標達成にぐんと近づける可能性もある。
頭の中で彼女に話す事柄をまとめながら、残りわずかのコーヒーを飲み干した。

＊

「おお、シドー！　今日もいい天気だな」
朝のホームルーム前。予鈴より少し早く４組の教室に入ると、十香が輝くばかりの笑顔で士道のもとへ駆け寄ってきた。
「こら、昨日言っただろう。学校ではちゃんと五河先生と呼びなさい」
「む、そういえばそうだったな。すまん」
昨晩、士道は〈フラクシナス〉に用意された十香の部屋を訪れ、学校生活に関する諸注意などを教えた。彼女にいろんなルールを伝える時間が必要だったために、折紙との約束を今日にずらしたのである。
「しかし、名字で呼ぶのはしっくりとこないな」
「そこは慣れていくしかないな。ここでは俺とお前は先生と生徒なんだから、ある程度線引きはしておかないと」

「そういうものなのか？」
「友達感覚でいすぎると駄目になっちゃうからな」
　かといって、高圧的に接すればもちろん生徒に嫌われてしまうわけで。そのあたりをしっかり見極められるのがいい教師なのだろうと士道は考える。
「ならば、私も気をつけることにする。改めておはようだ、五河先生」
「ああ、おはよう夜刀神」
　精霊の力を失った十香は、しっかり人間の生活に慣れようと頑張っている。それは琴里達〈ラタトスク〉のメンバーにとってもうれしいことだろうし、士道にとっても同じだった。
「十香ちゃん十香ちゃん！」
「ぬ、どうやら呼ばれているようだ。ではなシ、じゃなくて五河先生」
　なんとか忘れず言い直すと、十香は声をかけてきたクラスメイトのところへ向かっていった。早速下の名前で呼ばれているところを見る限り、クラスで孤立してしまいそうな気配もない。
　この学校には個性派が多いので、多少彼女が常人離れしていても問題なく受け入れてくれるだろう。
「一安心だな」

　十香の送り迎えを令音に任せている以上、学校の中での彼女の様子くらいはしっかり見ておかなければならない。そう考えている士道としては、今の状況はとても喜ばしい。
「可愛いよなぁ、夜刀神さん」
「殿町か。おはよう」
「おはようっす」
　十香がいなくなってすぐ、今度は背後から男子生徒が話しかけてきた。
「先生、本当に夜刀神さんとはただの親戚なんだよな？　手を出したりはしてないんだよな？」
「するわけないだろ。なんでそう思う」
「巨乳だから」
　かなり説得力のある理由を提示されてしまった。
「……確かに胸は大きいけど、ちょっと年齢が離れすぎてるからな。俺はもうちょっとおとなびた人が好みなんだ」
「ほうほう。というと、やっぱり村雨先生あたりか」
「いいところを突いてくるな」
　それからホームルーム開始までの間、士道は男同士の熱いトークに興じた。

＊

　そして迎えた放課後。
「ふう」
「あ、五河先生お帰りですか？　今日は早いですねぇ」
「ちょっとこの後用事があるんで、急いで仕事片付けました」
　職員室にて作業を終え、ノートパソコンを閉じた士道は、隣の席の珠恵と話しながら帰り支度を整える。
「では、お先に失礼します」
「お疲れさまでしたぁ」
　あいさつをして職員室を出た彼は、校舎を後にして予定通り折紙の住むマンションに向かう。
　途中和菓子屋に寄って、当店おすすめと書かれた商品をいくつか買っておいた。家庭訪問でもないのに生徒の家に行く以上、何か持っていくのがマナーかと考えたためだ。
「ここか……」
　しばらく歩いた後、士道は住所通りの場所にたどり着いていた。

「結構いいところに住んでるんだな」
両親はすでに亡くなっており、現在折紙はひとり暮らしをしていると聞いている。親戚から生活費を多めに送ってもらっているのか……それとも、ＡＳＴから手当をもらっているのか。あるいはその両方か。
どのみち、今考えることではなさそうだ。
「よし」
呼吸を整えてエントランスに入り、パネルに折紙の部屋番号を入力する。
『はい』
「遅れてごめんな。五河だ」
『入って』
オートロックが解除されたので、エレベーターに乗り込み６階まで移動する。
そのまま部屋の前までやって来た士道は、扉の横に設置されたインターホンを鳴らした。
「どうぞ」
すぐ近くで待機していたのか、間髪入れずに扉が開かれた。
「お邪魔します」
軽く頭を下げながら、玄関に足を踏み入れ――

「待っていた」
「おう、ちょっと仕事が残っててぶふぉうっ⁉」
目に映った光景に、士道は意味不明の叫びをあげていた。
「お、お前、それ」
「？」
無表情で首をかしげる折紙は、可愛らしいピンクのエプロンを身につけていた。
……それだけだった。
それしか身に纏うものがなかった。
いわゆる、裸エプロンと呼ばれる格好をしていたのだ。
他の住人に見られないようすぐさま扉を閉め、士道は困惑気味に折紙に尋ねる。
なにゆえ、そのような扇情的なスタイルで担任教師を出迎える必要があるのか。
「なんつー格好してるんだ⁉」
「私には胸がない」
「はい？」
「でも、おとなびた格好をすることはできる」
「……すまん。俺の理解力が足りないのか、鳶一の発言が一切脈絡のないものに思えてしまう」

そもそも裸エプロンとはおとなびた服装と言えるのだろうか。何か根本的なところで間違っている気がするのだが、それをうまく説明できるだけの冷静さは今の士道にはなかった。

「気に入らなかった?」

「いや、そういう問題じゃなくてだな。……とにかく、今すぐ普通の服に着替えてきなさい」

「なぜ」

「女の子がそんなエッチな格好するなってことだよ！　これじゃまともに顔も見れないぞ」

事実、目のやり場に非常に困る。確かに折紙の胸はそこまで大きい方ではないが、スレンダーな彼女の体型によく合ったものは持っているのだ。

細く引き締まった手足に、きめ細やかな白い素肌。それを直視できるだけの強靭な心を、士道は持ち合わせていなかった。

「それは困る。着替えてくるから、中で待っていて」

いつものポーカーフェイスを保ったまま、すたすたと部屋に消えていく折紙。残された士道は、彼女が去る前に指さしていた方向に進んでいき、リビングで帰りを待つことになった。

「いきなりとんでもないもの見せられたな……」

危うく朝に考えた話の内容が吹き飛ぶところだったと嘆く士道。

脳裏に焼き付いてしまった折紙の裸エプロン姿は、早く忘れることにしよう。そう言い聞かせながらも、なかなか映像が頭から消えてくれないのだった。

彼女の理由

リビングで待つこと10分。先ほどの出来事で変に汗をかいてしまったので、士道はスーツの上着を脱いでしまっていた。
そして、今度はきちんとした服装で出てきた折紙が、紅茶を用意して彼の前に現れる。
「どうぞ」
「ありがとう。いただくよ」
テーブルの上に置かれたティーカップから、いい香りが漂ってくる。早速一口いただいたところ、程よい渋味が口の中に広がった。
「おいしいな、これ」
「気に入ってもらえてよかった」
そう言って、折紙も自分のティーカップに口をつける。
「あなたの話を聞く前に、謝らなければならないことがある」
「謝る?」
カップをソーサーの上に静かに置くと、折紙は少しだけうつむいて口を開いた。
「先日の一件、精霊を狙撃したのは私」

もちろんそれは、十香が撃たれたあの時のことを言っているのだろう。

「あれが原因で精霊が暴走し、結果的にあなたを危険な目に遭わせてしまった。ごめんなさい」

「……いや、もう終わったことだ。鳶一も、それが仕事だったんだろう？」

仮に謝るとしても、それは士道に対してではなく、撃たれた十香に対して行われるべきだ。

「ありがとう」

ぺこりと頭を下げる折紙。心なしか、ほっとしているようだった。

「さて、じゃあ今度は俺が話す番だな」

彼女が顔を上げるのを待って、士道はその言葉を口にする。自身が緊張しているのを自覚しつつ、向かい合う少女を見据えた。

「それで、図々しいお願いなんだが……今から俺が言うことは、秘密にしていてほしいんだ」

「………」

「約束してもらえるかしてもらえないかで、話せる範囲がかなり変わってくる」

士道の知っていることを折紙に伝えるのは、当然ながら大きなリスクを伴う。彼女は対精霊部隊・ＡＳＴの隊員であり、そこから情報が漏れるおそれがあるからだ。

今日折紙と会うことを、士道は琴里に話していない。そもそも彼女は、士道が折紙に話を聞かせる約束をしたことすら把握していないのだ。
そんな妹に迷惑をかけるような真似は、彼としてもしたくない。だからこそ、折紙には口を堅く閉じてもらう必要があるのだが……
「わかった。誰に何を言われようと、秘密にすることを約束する」
「ほ、本当か」
「本当」
「そうか。サンキューな」
当然、折紙の言葉が嘘で、ＡＳＴにすべてを話してしまう可能性もある。しかし彼女の強い意思を感じさせる瞳を見て、信じられると士道は判断した。
そもそも、教師が教え子を信用できなくてどうする、という問題でもある。
「まず、俺がどういう立場の人間かについてだが」
それから、士道は様々なことを話して聞かせた。
自分が精霊を守ろうとする組織の一員であること。とんでもない治癒能力を備えていること。キスによって精霊の霊力を封じることができるということ。
そして。
「俺は、鳶一に戦ってほしくない。精霊相手に命がけで挑んで、傷ついてほしくないいん

だ」
　彼の行動の原点となった感情を、ついに折紙本人に伝えた。
「先生として、大事な教え子を危険な目に遭わせたくない」
「………」
　一通りすべてを語り終え、士道は渇いたのどを紅茶で潤す。
　そんな彼を、折紙は変わらず無表情で見つめていた。
「ひとつ聞きたい。精霊の力を封じて、あなたの体に異常は見受けられないの」
「ああ、大丈夫だ。検査の結果も問題ないって」
「そう」
「ひょっとして、心配してくれてるのか？」
　硬い空気を変えようと、おどけて軽い調子で尋ねてみたところ。
　予想以上に素早く、強い口調の答えが返ってきた。
「当たり前」
「お、おう」
　思わず面食らってしまい、士道は言葉に詰まってしまう。
　当然、次の言葉を発したのは折紙の方だった。
「にわかには信じがたい話。人間が霊力に関してそこまでの干渉が行えるなんて」

やはり簡単には信じてもらえないか、と肩を落とす士道。
ただ、彼女の言葉にはまだ続きがあった。
「けれど、あなたの言葉は信じたい。それに、現に〈プリンセス〉が霊力を失っていると
いう事実もある」
「じゃあ」
「今は、信じる」
淡々と語る折紙とは対照的に、士道は喜びを隠そうともしなかった。小さくガッツ
ポーズまで作る始末である。
「うれしいよ、こんな突拍子もない話を信じてくれて」
「でも」
感謝の言葉を遮るように、彼女はぴしゃりと言い放った。
「その霊力の封印は、確実なものだと言えるの？　二度と、精霊が力を取り戻すことはな
いと断定できるの」
「それは……」
誤魔化すという選択肢はある。
これが大人同士の会話であるのなら、それもいい。すべてを馬鹿正直に話す必要はな
い。

だが、彼女は大人か？
「絶対、とは言えない」
これは交渉でも取引でもなく、対話なのだ。素直に事実を述べるべきだろう。
「精霊の感情が大きく乱れると、一時的に霊力が逆流してしまうらしい」
「つまり、危険は残るということ」
「……そうだな。ゼロとは言えない」
ここから先、十香の感情が乱れて一瞬力を取り戻してしまう可能性はある。そうなれば、どのみち折紙には事実を知られることになるのだ。今この場で危険はないと言ってしまえば、その時になって不信感を抱かせてしまうことになる。
「いつ害をなすかわからない存在を放置しておくわけにはいかない。それに、積極的に人間を襲おうとする精霊も決していないとはいえない。だから、私はＡＳＴをやめることはできない」
戦いをやめてほしいという士道の願いに対する答えは、否定。
一切迷いのない返答は、彼の気概を削ぐには十分だった。
「ちょっと、お手洗い借りてもいいか」
「ここを出て突きあたりを右にある」
いったん時間を置きたかったのと、単純にわずかな尿意を催したこともあり、士道は

立ち上がってトイレに向かった。
「ふー……」
そもそも、彼女はどういった経緯でＡＳＴに入ったのだろうか。
まだ１５歳の少女が立ち入る場所としては、あまりにも不釣り合いだ。もっとも、それは士道の妹である琴里にも当てはまるのだが。
「もう少し、粘ってみるか」
士道の思いに変化はない。やはり折紙に命がけの戦いに身を投じてほしくはない。まして、相手が十香のような純粋な精霊だったら、なおさらだ。対立する必要なんてないのだから。
「よし」
用を足して気合いを入れ直した士道は、再び折紙のいるリビングへ戻った。
「すまん、待たせ……て……」
戻った瞬間、士道の上着に顔をうずめている折紙の姿が目に入った。
「………」
こちらの存在に気づいた途端、彼女は人間業とは思えない軽やかな動きでもといた場所に戻り、紅茶を一口すする。
「あ、あの、鳶一？」

「おかえりなさい」
「いやその、今のは」
「おかえりなさい」
……どうやら、なかったことにするつもりらしい。
「おかえりなさい」
「……ただいま」
正直かなりショックだったので、士道も見なかったことにしようと決断した。
「さっきの話」
「ん？」
「別に、あなたの考えを否定しているわけではない。そこはわかってほしい」
混乱気味だった思考を切り替え、折紙の言葉にしっかり耳を傾ける。
「精霊と対話しようとするあなたの姿勢も、ひとつの解であることに違いはない。ただ、私も私の考えで、戦うことを選んでいる。それだけ」
「どうしても、駄目か？」
「………」
無言になる折紙に、士道は必死に言葉を投げかける。
「霊力を封印した精霊のアフターケアは、俺達がちゃんとやってみせる。暴走しないよ

うに、しっかり見ていくつもりだ。それに、もし人間に悪意を持っている精霊が現れたとしても——」

自然と語調が強まる中、士道がさらに畳み掛けようとした時だった。

「私の両親は、精霊に殺された」

氷のように冷たく鋭い声が、部屋中を支配した。

「え……？」

「5年前、街が突然炎に包まれた。精霊の力によるものだった」

感情を押し殺すように、ゆっくりと言葉を続けていく折紙。

彼女の目は、すでに士道を見ていなかった。

「私が家に戻った時、まだ両親は無事だった。すぐに駆け寄ろうとした」

「鳶一」

「目の前で、何かが光った。私は思わず目蓋を閉じて、次に開けた時には、そこには誰もいなくて、跡形もなく消えていて、私は」

「鳶一っ！」

身を乗り出し、折紙の肩をつかむ。彼女の体は、痛ましく小刻みに震えていた。

「あ……」

我に返ったのか、気の抜けた声を出す。

「……ごめんなさい」
「いや……」
　謝る折紙の肩から手を離し、士道は彼女にかけるべき言葉を探す。
　だが、何も思いつかない。
「許すわけにはいかない」
　今度は、強い意思のこもった声だった。
「私からすべてを奪った存在を、私は許さない。二度と、私のような人間を生み出さないためにも……私は、精霊と戦う。そのために、今まで生きてきた」
「鳶一……」
　自分がいかに甘い考えを持っていたか、士道は痛感していた。
　きっと彼女は、これまで精霊を倒すことだけを目標に生きてきたのだろう。先ほどの一連の反応で、それがはっきりと理解できた。
　そんな彼女に、戦いをやめさせるということは。
　すなわち、彼女の生きる目的を奪うことと同義である。
「でも、心配しないでほしい。今の段階では、夜刀神十香に手を出すつもりはない」
　平静を取り戻した様子の折紙は、無表情で士道にこう告げた。
「現在の彼女に霊力がないのは事実。彼女に関しては、今はあなたに一任する」

「それは……ありがたい話だけど」

「感謝している。私にこれだけの情報を開示してくれたことを、うれしく思う。約束した通り、私は今日聞いたことを上に報告するつもりはない」

そう言って、折紙は本当に少しだけ唇の端をつり上げた。

「ああ、ありがとう」

とりあえず、霊力を封じた精霊に戦いをしかけるつもりはないようだ。

それがわかっただけでもよかったと、士道は素直にそう思う。

「じゃあ、俺はそろそろ帰るよ」

今日のところは、これ以上話すことはないだろう。

そう考え、士道がおもむろに腰を上げると。

「待って」

「ん？」

「もう少し、話しておきたいことがある」

どうやら、折紙の方はまだ用事が残っているらしい。

士道がもう一度テーブルの前に座り直すと、真っ直ぐこちらを見つめてきた。

「先ほどあなたは言っていた。精霊の霊力を封じるためには、あなたがキスすることが必要だと」

「うん、そうだな」
「それは、キスでなければ駄目？」
「え？　まあ、そうらしいけど」
「どうしても？」
　なんだかものすごく食い下がってくる様子の彼女に、士道も押され気味になってしまう。
「は、はい」
「………そう」
　注視しなければわからないレベルだが、折紙の表情が険しくなった。程度はわからないが、不機嫌になっているのは間違いない。
「もうひとつ聞きたい」
「なんでしょう」
「夜刀神十香のことを、恋愛対象として見ている？」
「ばっ、そんなわけないだろ！　転入してきたばかりとはいえ、あいつは俺の生徒だぞ」
「でも、彼女はあなた好みのスタイル」
「それとこれとはだな……」
　どうにも話の方向性が見えないことに戸惑う士道。いったい彼女は何が言いたいの

だろうか。

「…………」

「…………」

そうこうしているうちにお互い黙り込んでしまい、妙な空気が場を支配する。

「あ、あの」

「あなたはＡＳＴに注目されている」

「へ？」

士道がなんとか口を開こうとしたところで、折紙が聞き捨てならない言葉を発した。

「先週の金曜日。最後に夜刀神十香とともに姿を消したのは、どうやって」

「あれは……転移装置ってやつで移動したんだよ」

考えてみれば、士道と十香はＡＳＴ隊員である折紙の目の前で突然消えたのだった。何かしら怪しまれても仕方がない。

「ＡＳＴは、あれを精霊の消失（ロスト）に一般人が巻き込まれたと推測している。また、その一般人が五河士道という名前の高校教師であることも調べがついている」

「それで……？」

「あの日、精霊と行動をともにしていたこと。忽然と姿を消し、週明けには何事もなかったかのように出勤していたこと。加えて、〈プリンセス〉があなたのクラスに転入してき

たこと。これらの要素によって、ひとつの決定が下された」
　折紙のポーカーフェイスからは、次に出てくる言葉を予想することは到底できない。士道はただ、息をのんで見守るのみである。
「その決定っていうのは」
「五河士道という人物を見極めるために……私が監視役に選ばれた」
「監視役？」
「文字通り、あなたのことを監視して上に報告書を提出するのが仕事」
　どうやら、すぐに士道自身になんらかの処分が下されるというわけではないらしい。
「もちろん、あなたの秘密は守る。けれど、仕事をしている姿は見せる必要がある」
「それは確かに」
「だから、今日からあなたのことを監視する」
　なぜかズイッと顔を近づけ、折紙は宣言するように士道にそう告げた。
「わ、わかった。仕事なら、仕方ないよな」
「理解が早くて助かる」
「ちなみに、監視っていうのはどれくらいのレベルで行うんだ？」
　もともと形だけの監視になるだろうし、そこまで厳しいものにはならないだろう。そう思いつつ、士道は尋ねたのだが。

「……監視は、監視」

なにやら意味深な答えを返されて、背中に嫌な汗をかいてしまった。

嵐の前の静かな時

「悪かったな、わざわざ家にまでお邪魔しちゃって」
「気にする必要はない。有意義な時間を過ごすことができた」
　折紙の家を出るころには、時刻はすでに午後7時をまわっていた。夕陽もすっかり落ちてしまっていて、外に出た士道は若干の肌寒さを感じる。
「また明日、学校でな」
　玄関まで出てきた折紙にあいさつをして、背を向ける。
「先生」
「ん、どうした」
「あなたは、今の生活が楽しい？」
　背後からかけられた言葉は、なんとも突拍子もない内容のものに思えた。
「そうだな……」
　もう一度振り返り、士道は数秒の思考の後に口を開く。
「楽しいかな。お金に余裕がないわけじゃないし、教師って仕事にはやりがいを感じてる。周囲の人間にも恵まれてるしな」

「そう」
向こうから尋ねてきたわりには、折紙の反応は淡白なものだった。これが彼女の普通だと言われれば、それまでなのだが。
「さようなら。また明日」
「ああ、さよなら」
互いに小さく頭を下げて、今度こそ士道は鳶一宅を後にした。

*

士道が帰宅すると、家には誰もいなかった。琴里はいまだに帰ってきていないらしい。
仕方がないのでひとりで夕食を食べている間に、彼の頭にある考えが浮かんだ。
「向こうが帰ってこないんなら、こっちが様子を見に行けばいいのか」
というわけで琴里に連絡し、現在、転移装置で〈フラクシナス〉に拾ってもらったところである。
最初はいちいちそんなくだらない用事で来るなと一蹴されてしまったのだが、十香の様子も見ておきたいからと食い下がるとしぶしぶ了承してくれた。

なんだかこれだと十香をダシに使った風に聞こえるが、〈フラクシナス〉で彼女がどんな様子で暮らしているのかを把握しておきたかったのも事実だ。
「十香、遊びに来たぞ」
「おお、シドーではないか！」
士道が部屋を訪ねると、机で何かしていた十香が目を輝かせながら駆け寄ってきた。
「では、私はこれで」
「ありがとうございます」
ここまで案内してくれたクルーの椎崎に礼を言うと、彼女は微笑みながら艦橋の方へ戻っていった。
「今日は何か用事か？」
「いや、特には何も。十香が元気でやってるか、様子を見に来ただけだよ」
「そうか。私は見ての通り元気だぞ」
「みたいだな」
部屋にはお菓子の空袋などが多少置きっぱなしになっているものの、散らかりすぎというわけではない。本人も楽しそうなので、特にここでの生活に問題はなさそうだ。
そんなことを考えていると、机の上に置かれていたものにふと目が留まった。
「あれ、ひょっとして勉強してたのか」

士道が見つけたのは、現国や数学などのプリントの数々。近づいて拾い上げると、つたない文字だが何かしらの努力の跡が確認できた。

「一応、やろうとはしてみたのだ。でも全然わからん。イライラするから落書きをしてやった」

「落書き？　……ああ、これか」

現国のプリントに男性の顔写真が載っていたのだが、口元が中世ヨーロッパの貴族みたいになっていた。どうやら十香はひげを描くのがうまいらしい。

「まだ教科書が届いてないからな……」

明後日あたりに渡せる予定だが、それまでは自主的な勉強を行うのもなかなか難しいだろう。

「シドー。勉強というのは、難しいものだな。とても私にはできる気がしない」

「はじめは誰だってそうさ。十香は学校に通い始めたばかりなんだから、これから頑張ればいい」

ちょっぴり落ち込んでいる様子の十香を励まし、士道は机に置かれたシャーペンを手に取った。

「俺が教えるから、今日は一緒に勉強頑張ってみるか？」

「シドーが？　解けるのか、このわけのわからない数字の羅列が」

「おいおい、俺を誰だと思ってるんだ。お前達のクラスの担任教師だぞ」
　専門外の科目であろうと、高2序盤に出るような宿題なら十分解けるのである。
「おお、そういえばそうだったな」
「そういえばそうだったたって……もしかして、俺ってあんまり先生らしくない？」
「私にとって、シドーはシドーだからな」
「ぬう」
　先生として接した時間がまだ少ない以上、仕方がないかと考える士道。これから教師らしいところを見せていけばいい。
「それで、どうする？」
「シドーが教えてくれるならやるぞ、私は」
「よし、じゃあ早速始めるか」
　どの教科から手をつけようかと吟味する。士道の担当科目は現国なので、一番教えやすいのがそれなのは事実だが……勉強しておかないと加速度的に授業についていけなくなる数学から始めた方がよさそうだ。
「よろしく頼む。シドー……いや、五河先生と呼んだ方がいいのか」
「はは、ここは学校じゃないから好きな呼び方でいいぞ」
「そうか、ならシドーだ。うむ、やはりシドーはシドーと呼ぶのが一番だな！」

そう言ってはにかんだ十香は、椅子に座って宿題達と向き合った。
士道は部屋にあったもうひとつの椅子を取ってくると、彼女の隣に腰を下ろす。
「数学のプリントを出してくれ」
「これだな」
いきなり問題を解くのは難しいので、一から学習の要点を教えていく。
うんうんうなりながらも、十香はなんとか理解しようと頑張ってくれた。もともと、頭は悪くないのだろうというのが士道の予想である。
「こ、こうか」
「そうそう。これでこの式の答えが出たから、次は――」
士道が指針を示し、その後十香が真剣な目つきで計算を続ける。
その最中、士道はふと、先ほど折紙に言われた言葉を思い出した。
「なあ、十香」
「ん？　どうかしたか」
「今、楽しいか？」
何気なく、軽い調子で尋ねてみる。
急な話題に驚いた様子の十香だったが、やがて満面の笑みでこう答えた。
「ああ、楽しいぞ！」

「そうか。だとしたら、俺もうれしい」
彼女に人間として生きる選択肢を提示した、自分の行動は間違っていなかった。
それがわかって、士道も彼女に笑い返した。

＊

1時間ほど十香に勉強を教えた後、士道は〈フラクシナス〉の艦長室を訪ねていた。
「お邪魔しまーす」
「お帰りください」
「いくらなんでも拒絶が速すぎないか？」
入るなり椅子に座っていた琴里から鋭い視線をぶつけられ、思わずたじろいでしまう。
「お邪魔しますとか言ってるんだから自分が邪魔だって自覚はあるんでしょう？　だったら何も言わず退室するのが礼儀ってものじゃない」
「残念ながら兄という存在は妹に無礼でも許されるのだ」
「じゃあ今だけ士道を私の兄から解雇するわ」
「呪われていて外せないぞ」

「どんだけ怖い装備なのよ!?」
　琴里の体のサイズに似合わない大きな机の上には、書類らしきものが何枚も積み重なっていた。
「そうカリカリしなくても大丈夫だ。顔を見に来ただけだから、すぐに帰るって」
「まったく……十香に会うって言ってたけど、機嫌損ねたりしてないでしょうね」
「ちょっと勉強を教えただけだし、心配ないと思うぞ」
「勉強ねえ。先生らしいことしちゃって」
　ひじをついたまま、琴里は士道との会話に応じる。作業の息抜きにはなると判断したのかもしれない。
「十香の様子はどんな感じだ？　俺は学校でしか見てないんだが」
「おおむね良好よ。１日２回の検査を若干嫌がっている節はあるけど、基本的に精神は安定しているわ」
「ならよかった」
「そのうち、地上に住まわせてあげることもできるでしょうね」
　そう言って、琴里は頬を緩めた。彼女達〈ラタトスク〉が目指してきたものが実現しつつあることに、喜びを感じているのだろう。
「いいな、それ。家は用意できてるのか？」

「ま、おいおいね。作ろうと思えばすぐ作れるし」
「はは……相変わらずとんでもないな、〈ラタトスク〉は」
「行動の重大性を考えれば当然よ」
「……そうだな」
存在するだけで天災を巻き起こしてしまう精霊に対して、対話による平和的解決を目指す。そんな大それた計画の中心に自分がいることを、改めて自覚する士道。
「さて、俺はお邪魔みたいだからそろそろ帰るよ」
「もう会いに来るんじゃないわよ」
しっし、と手を払われながら、士道は扉に向かって歩いていく。
そして、出口のすぐ近くに来たところで立ち止まった。
「琴里」
「なによ」
「大丈夫か？」
「……大丈夫よ」
真面目な顔で士道が尋ねると、少し驚きながらも琴里はうなずいた。
「そうか。じゃ、おやすみ」
「おやすみなさい」

艦長室を出て、転移装置のある方向へ通路を歩いていく。
「もう来るな、ね」
黒リボンバージョンの琴里は、本当に意地っ張りだと再認識する。
「大方、疲れてる顔を見せたくないんだろうなぁ」
平静を装っていたが、先ほどの琴里が疲労を隠しているのは丸わかりだった。なぜわかるのかと問われれば、お兄ちゃんだからだと答えるほかないだろう。長年妹を見続けていれば、細かな仕草からいろんなことが読み取れるのだ。それは、最近存在を知ったばかりの黒琴里に関しても変わらない。
そんな彼女の意思を尊重して、士道は今回は素直に帰ることにした。本人が大丈夫だと言った以上、それを信じることにしたのである。
今の彼にできることと言えば、自宅を綺麗にしておくことくらいだろう。

＊

風呂に入って明日の準備を終えた士道は、布団の中で今日の出来事を振り返っていた。
「両親を精霊に殺された、か」

憎しみのこもった声が、耳に強く残っている。
復讐を胸に抱き続ける少女。彼女の家の内装に、およそ生活感というものが感じられなかったことも、士道の不安をより一層強めていた。
シンプルな家具が置かれただけの、個人の趣味が存在しない空間。鳶一折紙は、そこで何を考えているのか。
「訓練とかも、多いだろうしな」
彼女は部活にも入っていない。ずっと戦闘やそのための準備に明け暮れるばかりで、女の子らしい遊びだって満足にできていないのではないだろうか。
「ああ、くそっ」
復讐を願う気持ちは、理解できないわけではない。でも士道は、彼女に傷ついてほしくない。
ただ、折紙に精霊との戦いをやめさせたとして、生きる最大の目的を失った彼女はどうなるのか。
その答えに近いものを、士道は一度見ている。
何をするでもなく現界と消失を繰り返し、ＡＳＴに命を狙われるだけだった精霊・十香の姿を、彼は知っているのだ。
『ああ、楽しいぞ!』

今の十香は、本当に幸せそうだ。それは彼女に、生きる目的ができたから。新しいことを経験し、それを精一杯楽しむこと。十香にとって、大切なことだと士道は思う。
……ならば、折紙についても同じだ。
彼女から大事なものを奪うのであれば、それに代わるものを与えなければならない。
当然、困難だということはわかりきっているが。
「諦めたくはないしな」
一度始めた以上、完全に手詰まりになるまではあがいてみたい。
そんな決意を胸に、士道は深い眠りに落ちていった。

悩み、迷い、歩みが遅くなろうとも、状況は絶えず変化していく。
新たな精霊との出会いは、すぐそこまで近づいていた。

緊急事態?

「ここか……」
ゴールデンウィークが明け、５月も半ばに入ろうとしていた日のことだった。
昼休み、士道達の暮らす地域に空間震警報が発令され、住民達はいっせいにシェルターに避難。
その流れに逆らい〈フラクシナス〉に回収してもらった士道は、今回現れた精霊〈ハーミット〉との対話に臨むこととなった。
「もうすぐ、ここに精霊がやってくるんだな？」
『真っ直ぐそこに向かって来てるわ。ほぼ間違いないでしょうね』
現在、士道は〈フラクシナス〉の転移装置によって街のデパートの内部に移動していた。ここまでの〈ハーミット〉の行動パターンから次の動きを予測して、琴里が彼を先回りさせている形である。
「ふうー……」
無駄な力を抜きつつ、士道は先ほどの出来事を思い出す。
学校を出る前に、彼はクラスメイト達と一緒にシェルターに向かっていた十香と出く

わした。
人波をかきわけて近づいてきた彼女は、心配そうな瞳でこちらを見上げていた。
『行くのか?』
十香には、この警報が何を意味するものなのかを伝えている。
だから、今から士道がどこへ向かうのか、わかっているのだろう。
『ああ。十香は、友達と一緒にシェルターで待っていてくれ』
この半月ほどで、彼女はクラスメイトの多くと仲良くなった。ひとえに彼女の魅力ある容姿と、その純粋さによるものだろう。唯一、折紙とだけはいまだにまったくそりが合わないようだが。
『うむ、わかった。……私のような者を、助けてやってくれ』
別れ際、十香にもらった言葉をしっかり胸に刻みこむ。
彼女のためにも、折紙のためにも、琴里達〈ラタトスク〉のみんなのためにも。
そして、これから会う精霊のためにも、士道は頑張らなければならない。
『なに、緊張してるの?』
「そりゃ、まあな。見た目は小さな女の子でも、相手は精霊だし。てか、精霊じゃなくてもちっちゃい子と話すのは緊張するし」
『犯罪臭がするから?』

「そうそうお巡りさんが怖くて……なわけないだろ。話題を合わせづらいだけだっての」

先ほど映像で見た〈ハーミット〉は、琴里と同い年くらいの外見の少女だった。十香とは違い、士道のストライクゾーンからは外れている。シスコンであってもロリコンではない。

『っと、くだらない話をしてる場合じゃないわ。士道、来るわよ』

からかうような口調だった琴里の声が、一転して引き締まる。どうやら、精霊がすぐそこまで近づいているらしい。

ぐるりと周囲を見渡す士道。見える範囲には、まだいないようだが——

『君も、よしのんをいじめにきたのかなぁ……』

「うおっ⁉」

頭上からの声にビクリと震え、士道は顔を上げる。

いつの間にか、青い髪の少女が上下さかさまに宙に浮いていた。

通常ならあり得ない光景だが、精霊ならその程度簡単に可能なのだろう。

「待ってくれ、俺は別に戦いに来たわけじゃないんだ」

『うん？　そうなん？　そういえば、いつもの人達がつけてるメカっぽいものもないねー』

彼女の左手にはウサギのパペットがはめられており、言葉に合わせてぱくぱくと口が動いている。反対に、少女の本来の口は一切動いていなかった。
腹話術か何かだろうか──一瞬そちらに思考が向かいかける士道だが、今は会話を続けることが優先だと思い直す。
「そう、今の俺は丸腰だ。なんならここで全裸になってもいいぞ」
『士道。あなたその言い回し気に入ったの？　実は露出願望があるわけ？』
琴里の冷ややかなツッコミをスルーし、少女の瞳を見つめる。サファイアのような綺麗な色合いで、吸い込まれそうな感覚を覚えた。
『あっはっは！　可愛いレディの前で堂々と裸になるんだー。ちょっと興味あるけど、今はいいかな』
「そうか。とりあえず、俺に敵意がないってことはわかってもらえたかな」
『うんうん、ばっちり。なーんか他の人と雰囲気違うし、おにーさんはよしのんをいじめにきたわけじゃないっと。んでんで、実際何しにきたわけ？』
「何しに来たかっていうと、まあお話しだな。あんまり人間とそういうことする機会ないだろうし、どうだ？」
十香と比べて態度が柔らかいため、士道の方も積極的に攻めることを選ぶ。
しかし、さっきから彼女の口は一切動いていない。あまりに上手なものなので、本当

にパペットが意思を持ってしゃべっているのではないかと錯覚を覚えるほどである。
『おお、いいねー。どーもみんな喧嘩好きみたいで、よしのんと話したいなんて人いなかったからね。あははっ!』
「人間全員が、君を襲おうとするわけじゃない。それは知っておいてほしい」
『あー、それはちゃんとわかってるって。今まで見てきたわけだし』
「え?」
　予想外の反応に、士道は思わず聞き返してしまった。
　見てきた……それはつまり。
『出てくるときに街を壊しちゃった時は、逃げ回るだけになっちゃうけど。そうじゃない時はあちこち散歩して、いろんな人を見かけるからねー』
『十香の時と同じ、空間震なしでの現界……しかもこの様子だと、結構な回数経験しているみたいね』
　つまり彼女は、十香よりも人間について詳しいということだろうか。
　そういえば、先ほどから『よしのん』という単語を口にしているが……。
「なあ。そのよしのんってのは、君の名前か?」
『いえーす。可愛いっしょ?』
「うん。いい名前だ」

『あぁんっ。おにーさんってばお世辞が上手なんだから！　ところで、そういうおにーさんの名前は？』

「俺は五河士道。五河が名字で、士道が名前だ」

『おっけー、士道くんだね。よろしくっ』

「おう、よろしく」

よしのんの態度は、陽気でかなりフレンドリーだ。十香の時と比べると、相当話しやすいと士道は感じていた。

『名前をきちんと持っている上に、随分親しみやすそうな精霊ね。これは一発で最後まで行けるかも』

琴里の声に若干の期待が混じる。士道としても、早くよしのんと仲良くなれるのならそれに越したことはない。

「よしのん。よかったら、ちょっとその辺散歩しないか？」

『いいよー、よしのんもここに何があるのか気になってたんだよね』

退屈させないようにと提案したところ、思った以上の好反応が返ってきた。パペットを器用に動かし、ウサギが全身で喜びを表現している。

「よし。じゃあ出発だよしのん」

『おー！　……あ、ひょっとして今の、よしとよしのんをかけたダジャレ？　あっはっは

！』
「いや、違いますけど……」
『さっむい親父ギャグねえ。艦橋が凍りついたわよ』
「違うって言ってるだろ！」
　最後の琴里への反論は小声で行い、士道はよしのんを連れてフロア内を歩き始めた。

＊

『士道くん士道くん！　あれはなに？』
「あれは洗濯機と言ってだな、服とかを洗うのに使うんだ。中がぐるぐる回るんだぞ」
『へー、面白そうだね。今動かせる？』
「今は無理だな。電源がつながってない」
　しばらくデパート内をぶらぶらした士道とよしのんは、現在家電コーナーに足を踏み入れている。
　行く先々でいろいろな商品に目を奪われるよしのんに、士道が解説を加えるというパターンが何度も続いていた。
『いい感じね。十香の時といい、士道には精霊と話す才能があるのかも』

インカムから聞こえる琴里の言葉が示すように、ここまでのよしのんとの対話は良好な展開できている。もっとも、それはよしのんがもともと気さくな性格だったから、というのが大きな要因だと士道は感じていた。

『服といえばだけど、士道くんなかなかイカす服装だよね』

「お、そうか？　ありがとう、このスーツは俺も好きでさ。よしのんのファッションも可愛いぞ」

『でしょ？　特にこの眼帯が気に入ってるんだよねー。士道くんはわかってる』

褒められてうれしいのか、パペットの両手が頬に添えられる。士道としては、パペットの方ではなくよしのん本人の服装を指したつもりだったのだが、喜んでくれたので結果オーライである。

『そういえば、士道くんには彼女いるの？』

「残念ながらいないよ」

『じゃあ彼氏は？』

「……なあ、ここでいるって答えたらどうなるんだ」

『あっはっはっ！　……別にどうもしないよ？』

『士道、〈ハーミット〉の好感度が下がったわよ』

さすが〈ラタトスク〉の誇るシステム、些細な変化も見逃さないらしい。

「なんで一歩下がったのかすごく気になるけど、いないからな。俺は普通に女の人が好きなんだ」
妙な誤解をされないようにはっきり答えておく。インカムの向こう側からほっとしたようなため息が聞こえてきたので、どうやら好感度はもとに戻ったようだ。
『女の子が好きだけど付き合ってる子はいないいんだ?』
「そうなんだよ。今まで何度も頑張ってみたんだけど、うまくいかなくて……」
『へえ、不思議だねー。よしのんが見る限り、士道くん結構モテそうだけど』
「えっ!　マジで!!」
『あー、多分そうやってがっつきすぎるのがよくないんだね。よしのんバッチリ指摘しちゃう』
「ぐぬぬ」
鋭くもありがたいアドバイスをいただいた士道は、今度からこれを踏まえてアタックしてみようと心の中で決めた。
『士道。精霊の好感度がかなりいいところまで上がってるわ。そろそろキスする方向に話を持っていけないかしら』
そんな折、琴里の口から次の指令が飛び出した。もうそんなに仲良くなっていたのかと、士道は目の前でぴょんぴょんと跳ねまわっている少女の姿を見つめる。相変わらず

口を開いているのはパペットの方だけで、本人の顔は無表情のままである。
「よしのん」
電子レンジを眺めている彼女に声をかけ、次に言うべき言葉を吟味する。前回の十香の時は、緊急事態につき強引に唇を奪ったので、精霊に対するキスの交渉は今回が初めてになるのだ。
『ん？　なーにー、士道くん……っとと！』
くるりとこちらを振り向いたよしのんだったが、その際足を滑らせたのか、体勢を崩してばたんとうつむきに倒れてしまった。
その拍子に、彼女の左手からパペットが抜け落ちる。
「だ、大丈夫か？」
「……！」
士道の声に、ビクンとよしのんの体が跳ねる。その様子に、彼は明らかな違和感を覚える。
「……！　あ、ぅ……」
ついさっきまで無表情だった彼女の顔は、完全に憔悴しきっていた。何かに怯えるように全身を震わせながら、立ち上がって近くに落ちているパペットを拾い上げる。
すると……

『いやー、お見苦しいところを見せちゃったね。転んじゃうなんてよしのんみすていくっ！』
パペットを手にはめた途端、一転して様子が元に戻った。顔は再び感情のないものになり、パペットだけが元気に手や口を動かしている。
「あ、ああ……うん。気にすることないよ」
『一瞬だけ精神状態がかなり乱れたわね……なんだったのかしら』
もしかすると、パペット越しでないと会話できない恥ずかしがり屋なのかもしれない。そんな予測を立てつつ、士道はとりあえず話を続けることにした。
「それでなんだけど、よしのん。ちょっとお願いが――」
『あー、ごめん士道くん。今日はもう時間みたい』
「時間……？」
パペットが両手を合わせて頭を下げたのとほぼ同時に、よしのんの体に変化が訪れた。
まるで空間に溶けていくかのように、徐々に全身の色が薄くなっていく。
『間が悪いわね。ここで消失(ロスト)なんて』
琴里の控えめな舌打ちがインカム越しに聞こえてくる。
現界して一定時間経った精霊は、本人の意思と関係なく異世界に帰っていく。この現

象を、消失と呼ぶらしい。
『また会ったら、今日みたいに楽しいおしゃべりしよーね！』
「わかった。約束だ」
最後に士道に言葉を投げかけて、よしのんはこの世界から完全に消え去った。
『まあ、上出来ね。次会ったら、その時は霊力を封印できるでしょう』
「ああ、そうだといいな」
目標達成とはいかないが、新たな精霊と親睦を深めることができた。
その事実に安堵しつつ、士道は〈フラクシナス〉へと戻るのであった。

*

翌日。
今日は土曜日なので、授業は休みである。だが、士道は教師として用事があるので、午後から学校に出向く予定になっていた。
そのため、午前中に買い物を済ませておこうと考え、彼は現在商店街にいる。朝から雨が降っていたので、右手で黒い傘をさしていた。
「よしのん、か」

昨日出会った、小さな女の子の精霊を思い出す。
陽気で話しやすい少女だったのだが、どこか妙な部分があったのも確かだ。果たして、無事霊力を封印できるのだろうか。
……そしてもうひとつ、気がかりなのが折紙のことだった。
空間震が発生した以上、彼女は昨日も戦場にいたはずだ。胸に秘めた強い意思をもって、精霊と対峙していたのだろう。
「なんとかしなきゃな……」
『なにをー？』
「そりゃあ……あ？」
独り言に割りこんできた声には、十分すぎるほど聞き覚えがあった。
慌てて後ろを振り向いた士道は、自身の予想が間違っていなかったことを確信する。
「よしのん！」
『やっほー！　また会えたね、士道くん』
声に合わせて、パペットの口が開いたり閉じたりを繰り返す。
士道が望んでいた再会は、想像よりも早くやって来たらしい。
「ここで何してたんだ？」
『別に？　ただ散歩してただけなんだねこれが』

空間震警報は鳴っていない。昨日とは違い、今回は周囲に被害を与えることなく現れたようだ。
「とりあえず、一緒に歩こうか」
『おお、士道くんってば積極的。いいよー、いろいろ案内してちょうだいねっ』
「よし。……あ、というか体濡れてるじゃないか。ほら、この傘大きいから入っていいぞ」
よしのんに近づき、傘の中に入れてやる。
『わお、雨が当たらなくなった！　ありがとう士道くん！』
「どういたしまして」
はしゃぐ彼女の横で、士道はどこか落ち着いて話せる場所はないかと周囲を見渡す。
雨が降っているので、どこか屋内がいいのだが。
「おっ」
そう時間をかけることなく、こじゃれたカフェが近くにあるのを発見した。確か以前に、生徒の間でケーキがおいしいと評判になっていた記憶が残っている。
「よしのん、あの店に行かないか？　おいしいケーキが食べられるんだが」
『うん、行こう行こう！』
よしのんの了承をもらい、２人並んで目的のカフェの前まで歩く。

そして、傘をたたんで中に入ろうとしたその時。
「……五河先生？」
扉が開いて店から出てきたのは、士道のよく知る人物。
彼女の姿を認識した瞬間、彼は自分が致命的なミスを犯したことに気づいた。
「と、鳶一……」
「ちょうどよかった。先日の和菓子のお礼に、今からあなたの家に行こうと――」
ケーキか何かが入っていると思われる紙袋を掲げた折紙は、士道の隣に立つ少女に視線をやり……驚愕に、目を見開いた。
そう。普段なら、街で折紙と会うことにはなんの問題もない。
ただ、今はタイミングとしては最悪と言うほかなかった。
『あれー？　君、ひょっとしていつもよしのんをいじめてる子？』
「〈ハーミット〉……！」
ひょうきんな態度を崩さないよしのん。
険しい顔つきになる折紙。
出会ってはいけない２人が、出会ってしまった瞬間だった。

ＡＳＴ×精霊×ラタトスク

「来て」
　短い一言には、有無を言わさぬ迫力が備わっていた。
　折紙の言葉に素直に従い、士道は彼女のあとを歩いていく。よしのんも、抵抗することなく彼の隣に並んでいた。
「入って」
　しばらく歩いて、たどり着いたのはとあるマンションの一室。先日も訪れた、折紙の家だった。
『お邪魔するよーん』
　士道が折紙の挙動を緊張した面持ちで見守る傍ら、よしのんは清々しいほどいつも通りだった。場の緊迫した雰囲気などまったくおかまいなしである。
「状況の説明を求める」
　リビングに３人して座ったところで、折紙が鋭い目つきで尋ねてきた。当たり前だが、彼女の警戒の視線はよしのんに向けられている。
「順を追って説明していくぞ」

『士道くんはよしのんとデートしてたんだよねー』
「おいっ」
　できるだけ彼女を刺激しないように言葉を吟味していこうとした矢先、なんとも身も蓋もないセリフがよしのんの口から飛び出してしまう。
「デート？」
　ピクリと動く折紙の眉。
『ひょっとして君、士道くんの彼女さんかな？　だったらごめんねー。よしのんがあまりに魅力的すぎるせいで、士道くん鞍替えしちゃったのかも。昨日も楽しくお話してくれたし』
「それはない。彼の好みは大人の色気。あなたには備わっていない。私を見捨てるようなこともしない」
　なぜか会話の流れが修羅場っぽい雰囲気になっていく。これではまるで士道が二股をかけているようである。
「鞍替えとかなんの話してるんだ。そもそも、俺と鳶一はそんな関係じゃないって」
『なーんだ、そうなの』
「ごめんなさい。うっかり2年後の未来を想定して話してしまっていた」
「いやちょっと待て。2年後だと俺とお前は付き合ってるのか」

鳶一折紙という少女は若干不思議系なところがあり、時々話の内容についていけなくなってしまう。
「よしのん。ちょっとだけ静かにしておいてくれるか」
やんわり釘を刺してから、士道はここまでの経緯を丁寧に語り始める。
昨日の空間震が起きた際、よしのんと会って会話したこと。そして今日、彼女が空間震を起こさず現界し、士道と偶然鉢合わせになったこと。ゆっくり話し合おうとカフェに向かおうとした矢先、折紙と出くわしたこと。
「この子も十香と同じだ。むやみに人間を傷つけたりはしない。そうだよな、よしのん」
『ま、そだね。よしのんはいろんな人と楽しくおしゃべりしたいし！　……街を壊しちゃうのは申し訳ないと思ってるんだけど、よしのん自身もどうしようもないんだよね』
最後の方は、よしのんにしては珍しく元気のない声だった。というより、彼女のこういった話し方を、士道は初めて聞いた気がする。
「つまり、まだ霊力は封印できていない？」
「……そうだな」
「そう」
小さくうなずいた折紙は、品定めするかのような目つきでよしのんを見つめる。

「一般人が街にいる状況では、私もうかつに精霊に手出しはできない」
　折紙の家に来る途中、琴里には現状を記したメールを送っておいた。士道が家を出た時にはまだ眠っていたが、さすがに１１時ともなれば目を覚ましている頃だろう。
　念のためにポケットに入れていたインカムも、今はきちんと耳にはめている。
「でもＡＳＴに連絡して、強引に空間震警報を出して住民を避難させることは可能」
「っ、それは……！」
　まずい事態になったら連絡する。琴里にはそう伝えているが——
「ただ、話し合いが終わっていないのならそれまで待つ。早く霊力を封印するといい」
「……いいのか？」
「かまわない。ただし監視はさせてもらう」
　どうやら、まだ助けを求める段階には来ていないようだ。
「ありがとう。鳶一」
「礼を言われるようなことではない」
　ふっと表情を緩めると、彼女はおもむろに立ち上がった。
「お茶を淹れてくる」
　台所に消える折紙の背中を見送ると、よしのんがパペットで士道の背中をポンポンと叩いてきた。

『なかなかレベルの高いクールビューティーだねえ。付き合ってないって言ってたけど、士道くんとはどういう関係なのかなあ？』
「教え子だよ。俺が学校の先生で、彼女が生徒」
『へー』
どうやらよしのんは、学校が何かを知っているらしい。精霊ごとに持っている情報量に差があるということを、士道はここでも実感した。
「よしのん。ちょっとお願いがあるんだけど、いいか」
『ん？　なんだい』
相変わらず口を開くのはパペットだけで、よしのんの顔はぴくりとも反応しない。あまりに腹話術が徹底していることが気にかかるのは事実だが、今はもっと優先すべきことがある。
「もし、精霊の力と引き換えに人間の世界で生きていけるとしたら、どうする？」
『ほぇ？』
「こっちの世界とあっちの世界を行き来することもなくなる。街を壊すこともなくなる。いじめられることもなくなる。その代わり、霊力を全部失うってことだ」
「……………」
よしのんの目をまっすぐ見つめて、士道ははっきりと言葉を紡いでいく。

いつの間にか紅茶を用意して戻ってきていた折紙も、黙ってそれを聞いていた。
『つまり、人間のみんなと一緒にいられるってこと？』
「そうだ。俺だけじゃなく、いろんな人と仲良くできる」
『……ぁっはっは！　いいねそれ、わくわくするなぁ』
カラカラと笑い声をあげるよしのん。士道が言った光景を想像しているのだろうか。
「俺なら、それができる。よしのんさえよければ、すぐにでもそうしたいと思っている。どうかな」
『もちろんオッケー！　で、よしのんはどうすればいいの？』
「霊力を封じるためには……キスが必要なんだ。冗談みたいな話だけど、信じてくれるか」
文言だけ見ると、無垢な少女を騙していやらしい行為を要求する男のようだ。しかし断じて邪な感情はないので、何も気にする必要はないと士道は自らに言い聞かせる。
『キス？　なにそれ』
「えっとだな、それは」
「唇と唇を重ねあう行為。本来は恋愛感情を示すものだけれど、今回はそうではないので勘違いしないように」
よしのんの疑問に答えたのは、士道ではなく折紙だった。無表情のままだったが、そ

の声には妙に感情がこもっている。
『ふーん、それくらいなら全然できそうだねえ。じゃあ士道くん、さっさとやっちゃおうか！』
「お、おう。本当にいいのか？」
『へーきへーき。士道くんのこと、嫌いじゃないからさ』
　そう言って、よしのんはパペットの口を閉じた。もう話すつもりはないらしい。
「よし、それなら」
　意を決して、顔を近づけようとする士道。
「………………」
　だが、そんな彼をじーーーっと眺める折紙の視線が気になって、なかなか行動に移せない。
「あ、あのさ鳶一。よかったら、ちょっとだけ席を外してもらえると助かるんだけど」
「それはできない。私には〈ハーミット〉を監視する義務がある」
「いや、でもさっきはお茶を淹れに行ってたような」
「重要な行為をする際には、一時も目を離してはならない。そして、あなた達のキスを見て悔しさを胸に刻みこむ」
「く、悔しさ……？」

よくわからないが、この場を離れるつもりはないらしい。
折紙の説得を諦めた士道は、覚悟を決めてよしのんと向き合った。
「いくぞ」
ゆっくりと顔を近づける。
整った彼女の顔の、まつ毛の一本一本が見えるくらいになったところで目を閉じ、士道は彼女の唇にそっと触れた。
「……………」
柔らかな感触が、自らの唇を通して伝わってくる。女の子特有の甘い匂いが、士道の鼻孔をくすぐった。
「………？」
だが、それだけだった。
十香の時に感じた、温かい何かが流れこんでくるような感覚は、一切ない。
そのことに士道が違和感を覚えていると、肩を何かに叩かれた。
『ちょっと士道くーん。キスをする相手って、よしのんじゃなくて四糸乃のことだったの？』
「えっ……？」
『確かに精霊の力の大本は四糸乃にあるんだけどさー、それならそうと先に説明してほ

しかったよね。肩すかし食らった気分だから、よしのんともキスしてもらおうかな』
そう言うやいなや、今度はパペットの口が士道の唇に軽く触れた。当たり前だが、霊力が封印された感触はない。
『これがキスかー。うん、満足満足』
「え、えっと、よしのん？　今、よしのがどうって」
よしのんの言動に困惑する士道は、彼女の言葉の中にあった知らない単語について尋ねた。
『うん？　四糸乃がどうかした？』
やはり聞き間違いではなく、彼女は『四糸乃』と『よしのん』という2つの言葉を使い分けている。
落ち着いてこれまでの発言を振り返り、士道はおそるおそるパペットに視線を向けた。
「君が、よしのん」
『なーに士道くん？　今さら当たり前のこと確認するなんてさ』
続いて彼は、フードを被った感情のない少女に目を移した。
「君が、四糸乃？」
『そうだよー。四糸乃とよしのんはいつも一緒なんだー』

「……………」

　どういうことだ、と頭を抱えたくなる。

　あのウサギは、どこからどう見てもただのパペットだ。声だって、口は動いてなくても少女の方から出ているのは明白である。

　今までずっと、ただ腹話術を使っているだけだと士道は考えていた。

　だが、よしのんのセリフがあまりに真に迫りすぎている。これではまるで――

「〈ハーミット〉」

　その時だった。

　今まで事態を静観していた折紙が、立ち上がってよしのん……と、四糸乃のそばまで移動し、両膝をつく。

『鳶一折紙ちゃんだっけ？　〈ハーミット〉じゃなくて、よしのんにはよしのんっていう可愛い名前が』

「借りる」

　なんの前触れもなく、折紙はひょいっとパペットを少女の手から抜き取った。

「っ!?」

　よしのんの言葉は途中で止まり、無表情だった彼女の様子が一気に乱れる。

「……か、かえして……かえして、くださいっ」

あっという間に目尻に涙が溜まり、必死の形相でパペットを取り戻そうとする。
「返す」
そんな彼女の姿を見て、折紙は素早くパペットを元の位置に戻した。
少女の体がぴくんと跳ねて、途端に感情が消え去る。
『もー、ひどいよ折紙ちゃん！　可愛いレディーの体をぞんざいに扱うなんて、いくら温厚なよしのんでも怒っちゃうよ？』
ぷんすかと両手をバタバタさせるパペットを尻目に、折紙は士道の方に向き直る。
「これでひとつの仮説が立った」
「仮説？」
聞き返す士道に対し、彼女は淡々と言葉を続けた。
「〈ハーミット〉は、多重人格」
「……………！」
それは、士道が考えていた答えのひとつでもあった。
パペットが『よしのん』と名乗り、まるで意思を持っているかのように振る舞う。
そのパペットが体から離れると、『四糸乃』が異常なほどに取り乱す。
まるで、四糸乃とよしのんの2人の心が存在しているみたいだと、彼は感じていたのだ。

「五河先生。霊力の封印には成功した？」
「……いや、多分できてない」
「以前あなたは言っていた。キスをする際に、精霊がある程度こちらに心を開いていなければ、力を封じることはできないと」
　よしのんの態度を見る限り、十分士道に心を開いてくれていたはずだ。昨日の段階で、琴里もキスまで行けるかもしれないと言っていた。
　なのに、実際はキスをしても何も起こらなかった。
　それが意味することは。
「あなたが仲良くなったのは、作られた人形の人格。彼女の本来の人格は、心を開いていない」

＊

　折紙の家を出たところで、インカムから聞きなれた声が響いてきた。
『やっとつながった……！　士道、今の状況は？　大丈夫なんでしょうね？』
「琴里。ああ、大丈夫だ。さっきまで鳶一の家にいたんだが、今は外にいる」
『そう……さっきまでジャミングを受けてて、通信ができなかったのよ』

「ジャミング？」
『鳶一折紙の家にいたのよね？　ＡＳＴの隊員は危機管理が徹底してるのね』
感心したように語る琴里。士道はそれを聞きながら、前を歩く2人の少女を眺める。
雨は相変わらず降り続いており、折紙もよしのんもそれぞれ傘をさしていた。よしのんが持つ傘は、折紙の家に残っていたのを借りたものである。
『それで？　今何してるの』
「3人でオーシャンパークに行く途中」
『……はあ？』
士道の発言が理解できなかったのか、琴里が困惑した声をあげる。
『オーシャンパークって、遊園地の名前よね。3人って、士道とよしのんと鳶一折紙で？』
「おう」
そこまで言って、士道は正確には3人ではなくて3人と1羽であることに気づいた。
『何がどうなってそういう状況になったのか、手短に説明してもらいたいものね』
「まあ、いろいろあってな。事情は説明するから、もう少し俺に任せてくれないか」
『士道くーん！　さっきから何をぶつぶつ言ってるの？』
こちらを振り向いたよしのんが、士道のもとに近づいてきた。

『……こっちも大至急カメラを送るから、よしのんと話してあげなさい』
「わかった。サンキューな」
　いったん琴里との会話を打ちきり、よしのんに視線を合わせる士道。
「なんでもないよ。遊園地はもうすぐだから、楽しみにしておいてくれ」
『遊ぶための場所だなんて、まさによしのん好みと言うしかないんだよねー』
　天気は悪いものの、オーシャンパークは屋内施設も充実している。半日遊ぶには十分なはずだ。
「仕事は、しょうがないけど明日にまわすか」
　午後から高校に向かう予定だったが、致し方ない。
　絶対に今日仕上げなければならないわけではないし、誰かと一緒に行う作業なわけでもない。
　休んでも問題ないと、そう士道は判断した。

＊

『おおーー!!　すごいねこりゃーー!』
　入場門をくぐるや否や、よしのんが両手を高く上げて興奮を表現していた。四糸乃の

方は、やはりなんのリアクションも見せてはいない。
「鳶一は、ここに来たことあるのか？」
「ない。遊園地自体、小さい頃に何度か行っただけだから」
「そうか。じゃあ、今日は鳶一も案内してやらないとな」
士道は家族と一緒に遊びに来たことがあるので、だいたいの施設は把握している。
『ねぇねぇ、最初はどこに行くの？　よしのんはあっちのお城みたいなところを希望するんだけど！』
遊園地を前にしてはしゃぐよしのん。こんな姿を見てしまうと、どうしても言いづらくなってしまうが……仕方がないと、士道は口を開いた。
「よしのん。本当に悪いんだけど、しばらく四糸乃と離れて俺と一緒にいないか？」
『……えぇ？』
予想外の提案だったのだろう、よしのんは口をあんぐりと開けたまま固まってしまう。
だが、士道はそのためにオーシャンパークにやって来たのだ。
『四糸乃は恥ずかしがり屋さんだから、よしのんがついていないと駄目なんだよー』
「それはわかってる。でも、俺はよしのんだけじゃなくて四糸乃とも仲良くしたいんだ」
折紙が見守る横で、士道は優しくよしのんに語りかける。

四糸乃が他人とのコミュニケーションを苦手にしているであろうことは、彼女の人格が顔をのぞかせた時の反応を見てなんとなく予測がついていた。

他人と接する怖さが、遊園地の楽しさで少しでも紛れれば……そう考えて、士道はこの場所を選んだのである。

『士道くん……』

「どうしても無理になったら、すぐによしのんを四糸乃のそばに連れて行く。それは約束するから」

霊力を封印するためには、四糸乃に心を開いてもらう必要がある。そのためには、多少荒療治になるが彼女とよしのんを引き離すしかない。

こればかりは、真摯にこちらの気持ちを伝えるしかないと士道は考えていた。

「お願いだ。きっと、四糸乃とよしのんのためにもなることだから」

『……そこまで言うんなら、わかった。でも、四糸乃を泣かせたら許さないよ？』

「もちろんだ。ありがとう」

真面目な口調のよしのんの言葉にうなずき、礼を言う。

『まさか、二重人格の精霊とはね……』

インカムから聞こえる琴里の声からは、若干不安が感じとられた。士道がうまく対話できるか、心配なのだろう。

だが、やるしかない。一度大きく深呼吸してから、士道はよしのん――パペットを、四糸乃の手から取り外した。

「……………！　ひぅっ」

その瞬間、おびえた表情を浮かべるひとりの少女の人格が現れた。

士道の手にあるよしのんに一瞬手を伸ばしかけるが、彼女が自らの意思で離れたことを知っているのか、取り戻そうとはしなかった。

「落ち着いて、怖がらなくても大丈夫。誰も君をいじめたりしないから」

「うぅ……ひぐっ」

「俺は士道。五河士道だ。よろしく」

ゆっくりと、怖がらせないように語りかける士道。

しかし四糸乃は涙を浮かべ、明らかに冷静さを失っているままだった。

「………さい」

「え？」

「……聞かせて、ください。よしのんの、声……かえしてとは、言いませんから」

よしのんの声は、今まで四糸乃自身が出していたはず。なのに、彼女はその声を聞かせてほしいと言う。

やはり、四糸乃はよしのんという人格の存在を本気で信じているのだ。

「えーっと」
　とはいえ、それがわかったところでどうすればいいのか。
　困った士道は、いろいろ考えた末……よしのんを左手に装着した。
「は、ハァイ四糸乃！　よしのんだよー？」
　できるだけ高い声を意識して、よしのんを演じてみたところ。
「えぐっ、えぐっ……よしのんじゃない……！」
　しゃくりあげる声が余計にひどくなってしまった。
「だ、駄目か」
『当たり前でしょ馬鹿士道。あんなかけらも似てない野太い声でごまかせるわけないでしょうが』
　琴里にお叱りを受けてしまったが、だからといって他に妙案も浮かばなかったのだ。
　このままでは早々によしのんを返さなければならなくなるが――
「貸して」
　ひょいっとよしのんが取り上げられたかと思うと、次の瞬間には折紙の左手に収まっていた。
「と、鳶一？」
　無表情のまま、彼女は泣きじゃくる四糸乃の前で中腰になる。

視線を合わせると、ぐいっとよしのんを突き出した。
『ほらほら、そんなに泣いてちゃだめだよー？　よしのんはちゃーんと四糸乃のことを見守ってるからね。笑って笑って！』
「あ……よしのん……っ！」
「うまっ!?」
甲高い声は、まさしく本物のよしのんのそれにそっくりだった。しかも折紙の口がまったく動いていない。四糸乃に負けず劣らずの、完璧な腹話術だった。
「よ、よしのん、私……」
『士道くんはいい男だから、心配しなくても大丈夫！　楽しんでおいでよー』
「う、うん……！」
……しかし、滅多に感情を表に出さず、一部では『鳶一・コキュートス・折紙』とまで呼ばれている彼女があんな陽気なトークを展開していると思うと、猛烈な違和感が襲ってくる。
『やるじゃない、彼女。士道より役に立つわね』
「とりあえず、これで遊園地をまわれそうだな」
彼がほっと一息をついていると、折紙と四糸乃が並んで歩いてきた。
「ありがとう鳶一。助かった」

「この場で彼女の感情を乱して、下手に暴れられても困る。それだけ」
「それでもいいさ」
士道がお礼を言うと、折紙は少し考えるような素振りを見せてから、パペットをつけた左手を顔の前に掲げた。
『士道くん士道くん』
「ん？」
折紙、もといよしのんが士道を呼んだかと思うと、彼女はなぜか折紙の胸をぺたぺたと触り始めた。
『四糸乃よりも折紙ちゃんの方がおっぱい大きいよー』
「ばっ……よしのんで遊ぶな！」
カラカラと笑うよしのん。これ、本当に折紙が声をあてているのかと、思わず疑ってしまう士道であった。

四糸乃と折紙

『おおーっ！　外も綺麗だったけど中も豪華だねー！　四糸乃もそう思うっしょ？』
「う、うん……キラキラしてる」
　最初に訪れたのは、よしのんが行くことを希望していたお城の中だった。中世ヨーロッパの雰囲気を再現した真っ白な建物の内部は、これまたきらびやかに彩られている。
「この城は最近できたやつでさ、美術館にもなってるんだ」
　きょろきょろと周囲を眺めている四糸乃の隣に立ち、士道は軽く解説を加える。
「ひゃっ……！」
　声をかけられたことに驚いたのか、肩を震わせ距離をとられてしまった。
「ご、ごめん。びっくりさせちゃったか」
「い、いえ……その……」
　やはりと言うべきか、彼女は他人という存在が苦手らしい。今も士道とまともに視線を合わせられず、せわしなく視線をあちこちに動かしている。
　そんな少女が心を開いているのは、現状たったひとり。

『大丈夫？　四糸乃』
「う、うん……」
『士道くんは四糸乃をいじめたりしないから、もっと肩の力抜いておっけーなんだけどなー。悪い人じゃなさそうっていうのはわかるでしょ？』
「……それは、なんとなくだけど」
四糸乃の大事な友達、パペットのよしのん。普段は四糸乃にくっついている彼女は、折紙の左手に操られて躍動していた。
精霊と敵対しているＡＳＴの隊員が、その精霊相手にノリノリで腹話術を披露している姿は、よーく考えてみるとなかなか奇妙だと士道には感じられた。
折紙は見事なまでによしのんを演じきっている。普段の彼女を知る者なら、もれなく驚愕に口をぽかんとさせることだろう。それでいて本人は完璧な無表情を貫いているのがすごい。
『だったら、士道くんの話も聞いてあげたら？』
「わ、わかった……よしのんが、そう言うなら」
小さくうなずいた四糸乃は、とてとてと士道のもとに戻ってくる。その背後では、折紙が彼に視線を送っていた。
「あ、あのっ……！」

「うん。どうかしたの？」
「ご、ごめんなさい。も、もう一度、お話ししてもらえませんか……？」
　上目遣いで、おびえるような目つき。
けれど、なんとか士道と視線を合わせようと頑張っている。
その姿は、どうしようもなく健気だと彼には思えた。
「ああ、任せてくれ」
　折紙達ＡＳＴの意見も、その立場も理解できる。
それでも士道は、こんな女の子が容赦なく銃を向けられるのは嫌だと感じた。
正しいとか間違っているとかではなく、ただ嫌だった。
「ここは美術館っていって、いろんな絵が飾られているんだ」
「……………」
「四糸乃は、絵は好きかな？」
「えっと……あんまり、見たことないから……」
「はは、そうか。それなら、今からたっぷり見て行こう。よしのんと、あそこの綺麗なお姉さんと一緒に」
「は、はい……」
　彼女を怖がらせないように、ゆっくりと、優しく語りかける。しどろもどろになりな

がらも、四糸乃はちゃんと返事をしてくれた。
『決まりだねー。じゃあ行こうか、四糸乃』
「うん」
　よしのんがやって来て、四糸乃とともに歩き出す。
　少しずつでいい。最後には、この少女と楽しく笑いあいたい。そう思いながら、士道もあとに続こうとした。
「綺麗？」
「ん？」
　くるりと振り返った折紙に、平坦な調子で尋ねられる。なんのことかと士道が困惑していると、彼女はそれを察して言葉を補った。
「綺麗なお姉さん？」
「お、おう……俺に言われるの、嫌だったか」
「そんなことはない。うれしい」
　再び前方に視線を戻し、よしのんをはめた左手で四糸乃と手をつなぐ折紙。先ほどよりも足取りが軽やかなのは、士道の気のせいだろうか。
「ああしてるの見ると、姉妹みたいだな」
　でも、それは外見だけの話にすぎない。

四糸乃と仲良くしているのは、あくまで折紙が演じるよしのんであって、折紙本人ではない。そこは、履き違えてはならないところだろう。

それが現実。四糸乃という精霊と、鳶一折紙の間に存在する、明確な壁。

『士道くーん？　どうかした？　早くおいでよー』

「ごめんごめん、今行く」

だが、それはあくまで今の段階での話だ。

いつか、２人の間を遮るものを取り去りたい。そう願うだけなら、何も間違ってはいないのだ。

＊

『わーお、ここもすごそうだねー！』

脳内で架空の人格を作り上げ、それを忠実に演じる。折紙がこの作業を始めてから、1時間半が経とうとしていた。

「こ、ここはちょっと……怖そうだから、いや」

『よしのんは怖いの苦手だからねー。お化け屋敷は無理っぽいか』

事前に観察していた『よしのん』と呼ばれる人格を再現できるか気になるところだっ

たが、〈ハーミット〉の反応を見る限りは問題ないようだ。
「…………」
彼女は、折紙がいつも自分の命を狙っている集団のひとりだと、気づいているのだろうか。別人格の方は覚えていたようだが、普段心を閉ざしていた〈ハーミット〉本体は、事実を認識していないのかもしれない。
……まあ、それは折紙が気にすることではない。どの道、〈ハーミット〉が見ているのは折紙ではなくパペットなのだから。
「お化け屋敷が駄目なら、あっちに行ってみるか？　可愛いキャラクターが住んでいる家、みたいなやつがあるんだけど。どうかな、四糸乃」
「あ……は、はい。行きたい、です」
士道の方は、少しずつではあるが〈ハーミット〉との距離を確実に縮めていた。最初は声をかけるだけで怯えられていたのに、今はきちんと会話を成立させている。教師として、普段から子供の相手は慣れているのだろうか。
精霊を救いたいという宣言に見合うだけの行動はできていると、折紙はそう感じた。だからといって、彼女自身の考えが変わるわけではないが。
「よし。決まりだな」
ふと、士道が折紙に微笑みかけた。パペットではなく、しっかり折紙本人の顔に視線

を合わせている。
その笑みが何を意味しているのか、彼女にはわからない。
……まさか、彼女と折紙が打ち解けていることを喜んでいるわけではないだろう。
彼だって理解しているに違いない。折紙はただ、精霊の暴走を未然に防ぐために『よしのん』を演じているにすぎず、心を開いたわけではないのだと。
士道が自分の身を案じてくれているのは、素直にうれしいと思う。でも、こればかりは譲るわけにはいかない。
精霊と戦うことは、彼女の存在意義そのものと言えるからだ。
いくら見た目が小さな子供だといっても、〈ハーミット〉が攻撃対象であることに変わりは――
「よしのん……行こう？」
くいっと、パペットの手に当たる部分を引っ張られる。
〈ハーミット〉が、控えめな笑顔を浮かべていた。
「………！」
ただそれだけの行為が、どういうわけか折紙の思考を乱した。
過去の記憶を、刺激されたからだ。
――初めて両親と一緒に遊園地を訪れた日。今の〈ハーミット〉と同じように、折紙

も人ごみを怖がりながらもいろいろなものに興味が尽きなかった。
ウサギのパペットも、彼女が以前買ってもらったものによく似ていた。大火災の際に、家と一緒に燃えてしまったが。
「……よしのん？」
二度と戻らない過去。とめどなくあふれ出す思い出。
母の手を引き、次のアトラクションへ走っていって――
『……おっと、ごめんごめん。ちょっとぼーっとしちゃってたよ』
首を横に振って、なんとか冷静さを取り戻す。精霊の前で、これ以上取り乱すのは危険だと自らに言い聞かせた。
『よしのんはちゃーんと、そばにいるからね』
「……ありがとう、よしのん」
パペットの口をパクパク動かしつつ、折紙は〈ハーミット〉に語りかけた。
彼女に対する敵意、悪意、害意、それらすべてを隠しながら。
「おーい、何してるんだ？」
「少し考え事をしていただけ。気にしなくていい」
隠した感情の、さらに奥の奥。
何か異質な思いがうごめいていることに、折紙はあえて気づかないふりをした。

＊

「四糸乃。おいしいか？」
「はい……おいしい、です」
「そっか。ならよかった」
　午後3時をまわったところで、士道達は休憩がてらフードコートに足を運んだ。ついでに言うと、まだ昼食をとっていないことに気がついたという事情もある。
「鳶一も、うまいか」
「テーマパーク内の飲食店としては及第点」
「はは、結構辛口だな」
　きつねそばをすすっている折紙に尋ねたところ、そんな回答が返ってきた。四糸乃の方は、お子様ランチとバニラシェイクをおいしそうにいただいている。
「あなたはどう？」
「うまいぞ。やっぱり遊園地に来たらハンバーグ定食に限る」
「ハンバーグ、好き？」
「好きなのは確かなんだが、こういう場所で食うと5割増しでおいしく感じるんだよな。

俺もまだまだ童心を忘れてないってことかね」
　そう、とうなずく折紙。相変わらず自分から聞いたわりには反応が薄い。
　しかし、今日はそんな彼女の新たな一面を見ることができた。
「ありがとうな。ここまで付き合ってくれて、めちゃくちゃ助かってる」
　まさか、彼女がここまで陽気なキャラを演じられるとは。演じられるにしても、四糸乃のためにそれを行ってくれたことに、士道は素直に感謝していた。
「さっきも言った通り、私は私のために行動しているだけ」
「わかってるって。でも、お礼くらい言わせてくれてもいいだろ？」
　折紙がフォローしてくれなければ、今こうして士道と四糸乃が言葉を重ねている光景はなかった可能性が高い。
『彼女がいなければ早々によしのんを返却する羽目になってたでしょうね。芸達者みたいだし、なんとかうちに引き抜けないかしら』
　歯に衣着せぬ言動が売りの士道の妹君も、こんな感想を抱くくらいだ。
「なあ、鳶一」
「なに」
「たまには、こうやって遊ぶのもいいだろ？」
　軽い調子を装って、士道は折紙に言葉を投げかける。本当は、真剣な質問である。

「別に、今日と同じ面子じゃなくてもいい。クラスの連中とか、なんならＡＳＴの同僚もありだ」

オーシャンパークをまわっている間も、折紙自身は無表情のまま。はしゃいでいるのはよしのんだけだった。

それでも、時折わずかに眉とか口元あたりの顔のパーツが動いていたのを見る限り、少しは楽しんでくれていたと士道は推測する。伊達に1年、彼女を見てきてはいない。

「もうちょっと、他人と仲良くするのもいいと俺は思う。肩肘張りすぎるのも考えものだしな」

「……そう」

彼女には、戦い以外に何かを見つけてほしい。ずっと前から抱いている、士道の切なる願いだ。

「機会があれば、考えておく」

返ってきたのは、なんとも気のない言葉だった。『機会があれば』と『考えておく』は、どちらも断る時の常套句である。女性にアプローチをかけた時によく言われる内容なので、士道はそれを痛いほどわかっていた。

「おう」

それでも、士道は折紙に笑いかけた。

はっきりと否定されなかったということは、少しでも自分の思いが伝わっている証拠だと考えたためだ。希望的観測にすぎないものの、前向きになるのは大事なことである。
「あ、あの……」
ちゅーちゅーと可愛らしくシェイクを吸っていた四糸乃が、ためらいがちに士道に話しかけてきた。彼女から声をかけてくるのは、非常に珍しい。
「なんだ？」
「その……もう、時間みたいです。体が、向こうに引っ張られるような……」
消え入るような声だったが、内容は非常に重大なものだった。思わず士道は折紙と顔を見合わせてしまう。
『まだ好感度は足りてないわね……残念だけど、次の機会を待ちましょう』
琴里の言葉により、今すぐ急いでキスをするという選択肢も消えた。たった数時間では、やはり四糸乃の心を完全に開くことはできなかったようだ。
「じゃあ、よしのんを返さないとな」
士道がそう言った時には、折紙はすでにパペットを四糸乃の左手にはめてあげていた。
『やっほー！　ただいま四糸乃！』

「おかえり、よしのん」
はにかむ四糸乃を見て、今日の出来事は確実に事態の進展につながったと士道は感じる。よしのんをはめている時に彼女がしゃべったのは、これが初めてだからだ。
『士道くんも折紙ちゃんも、今日はありがとうねー。よしのんも四糸乃も大感謝だよ』
「どういたしまして」
しかし、消えるとなるとその瞬間を周りの客に見られるのはまずい。
人目のつかない場所に行くべきなのだが……
「鳶一。悪いんだが」
「わかった。来て、〈ハーミット〉」
『もー、だからよしのんにはよしのんっていうきゃわいい名前があるんだってばー』
皆まで言わずとも、士道の意図を理解してくれたらしい。立ち上がった折紙は、四糸乃とよしのんを連れて女子トイレの方に向かっていった。
「個室が空いてればいいけど……」
ドキドキしながら待つこと数分。
きびきびとした足取りで、折紙だけが席に戻ってきた。
「どうだった？」
「個室に入った後、〈ハーミット〉の消失を確認した。誰にも見られていないはず」

「なら安心だな」
　どうやら、無事に向こうの世界に帰れたようだ。
『士道、あなた何気に危ないことするわね。こっちで監視していたとはいえ、ＡＳＴの人間に精霊を任せるなんて』
　少々不満げな声がインカムから聞こえてくるが、士道としては今日の折紙は何もしないという確信があったのだ。
　……というのは後付けで、うっかり普通に預けてしまったというのが実情だが。
　言い訳させてもらうなら、うっかり預けてしまうほど、今の折紙からは精霊に対する敵意が感じられなかった。少なくとも士道には、そう思えた。
「まだ3時半か。途中で帰るのも入場料がもったいないし、もうちょっと遊んでいくか？」
「かまわない」
　少し遅めの昼食を終えた後、士道は折紙と一緒にオーシャンパークをあちこちまわった。
　その途中、時折彼女は、雨粒の落ちてこなくなった曇り空に視線を送っていた。
　彼女がどんな思いを抱いていたのか――この時の士道には、知る由もなかった。

それが彼女の選択

「………」
休日の昼下がり。
ソファに座っていた折紙は、いつの間にか自分がうたた寝をしていたことに気づいた。
ＡＳＴからの召集もかかっていないので、今日は1日中フリーである。そのため、少し気が抜けてしまっていたらしい。
軽く首を横に振り、意識をしっかり覚醒させる。
「最近、見ていなかったのに」
ほんの３０分ほどの睡眠だったが、折紙は確かに夢を見ていた。
内容は、彼女がまだ幼い頃の日々の光景。父がいて、母がいて、当たり前の幸せを当たり前に享受していた時の思い出。
５年以上前の出来事を夢に見たのは、本当に久しぶりのことだった。
なぜ、今になって？
原因を考えると、とある精霊の姿が脳裏に浮かぶ。

「〈ハーミット〉」

〈プリンセス〉より小柄な、青い髪の少女。だが、彼女も人類の脅威となる力を持っていることに違いはない。折紙にとっては、駆逐するべき存在。

……その、はずだ。

「………」

ちょうど1週間前、折紙は〈ハーミット〉と行動をともにした。精霊を救うべく動いている五河士道と3人で、成り行き上遊園地をまわることになったのである。

その時彼女に抱いた印象は、とにかく気弱で、けれど子供らしい純粋さを持った少女。あくまであの日に限れば、彼女に精霊らしさというものは感じられなかった。

そして何より、彼女は昔の自分自身と重なってしまう。

『この子も十香と同じだ。むやみに人間を傷つけたりはしない』

士道の言葉を思い出す。

『……ありがとう、よしのん』

〈ハーミット〉の言葉を思い出す。

「私は」

――その時、けたたましい警報の音が街中に鳴り響いた。

同時に、ＡＳＴの専用通信端末も音を立てながら震え始める。

……空間震警報。精霊が、現れるのだ。
まだ見ぬ新たな精霊か、それとも。
「私は、変わらない」
自らに言い聞かせるようにつぶやいた折紙は、端末を手に取りながら足早に屋外へ向かっていった。

＊

士道が空間震警報を耳にしたのは、自室で仕事用の資料を整理している最中だった。
同じく自宅にいた琴里とともに〈フラクシナス〉へ移動した彼は、艦橋で指示待ち状態に入っている。
せわしなく作業を行っているクルーの人達を見ていると、ただ突っ立っているだけの自分がいたたまれなくならなくもない。しかし、だからといって手伝えることがあるわけでもないのだ。
士道の役目は、精霊との直接交渉。出番が来るまでは、精神統一でもしているべきなのである。
「士道。〈ハーミット〉……四糸乃が現れたわ。今度こそ彼女をデレさせなさい」

　艦長席でモニターを見つめていた琴里に言われ、士道は改めて気を引き締める。四糸乃と会うのはこれで3度目、そろそろきっちりあの少女からの信用を勝ち取らなければならない。
「任せとけ。それで、俺はいつ出動なんだ?」
「焦らなくてもいいわ。彼女の行動パターンは把握済みだから、すぐに令音が次の目的地を割り出せる。屋内に行きそうになったところで、士道を投入する」
　前回の空間震の際にも、琴里は似たようなことを言っていた。その時は実際に四糸乃……ではなく、よしのんの先回りに成功していたので、自信のほどは確かなのだろう。
　なので、士道も命令を受けるまで素直にモニターを眺めていることにした。
「………」
　だが。
「……妙だ」
「令音、どうかしたの」
　艦橋下段でコンピュータを操作していた令音が、顎に手を当ててため息をつく。
「……〈ハーミット〉の行動パターンがいつもと違う。これでは予測が難しい」
「なんですって?　確かに、いつも以上にあちこち飛び回ってるようだけど……どうして今になって」

なにやら会話の雲行きが怪しいことに気づいた士道は、琴里のもとへ近づいて状況を尋ねた。
「先回り、できないのか？」
「残念ながらそうなるわね。屋内に入る気配もまったくないし、こうも動き回られちゃ強引に放り込むこともできないし」
「次にこっちに来た時は、建物の中に入ってほしいって頼んでおくべきだった。……俺のミスだ」
十香に頼んだ時と同じように、その言葉を告げるタイミングは確かにあった。他のことに気を取られて伝え忘れていたのを、今さらながら後悔する。
「過ぎたことを気にしても仕方ないわよ。士道、あなたは転移装置のもとへ向かいなさい。チャンスが来た時に、１秒でも早く動けるように」
「ああ、わかった」
琴里の指示にうなずき、士道は艦橋を出る。インカムはいつも通り耳にはめているので、離れていても意思疎通は可能だ。
「四糸乃……」
あれだけＡＳＴから攻撃を受けて、彼女はこれまでろくに反撃もしてこなかったらしい。

きっと、他者を傷つけることをよしとしないのだろう。四糸乃も、よしのんも。
そんな優しい子達を、辛い目に遭わせたくない。
だから士道は、今ここにいるのだろう。

＊

『四糸乃、こっちだよ！』
「う、ぅん」
よしのんの言葉を受けながら、四糸乃は雨の中を駆け続ける。
いつもなら、すべてをよしのんに任せて心を閉ざしていた彼女だが、今日に限っては確かに彼女の自我が存在していた。
『今日はちゃんと目的があるんだからね』
あちらの世界で眠っていた間。虚ろな意識の中で、四糸乃は遊園地での出来事を思い返していた。
五河士道さん。鳶一折紙さん。
２人は、四糸乃と一緒に楽しい時間を過ごしてくれた。
……彼らのことを考えると、不思議な気持ちになる。

その気持ちの正体を、どうしても知りたいと思った。
『もうすぐゴールだよー。ちょうどあの人達も撒けたみたいだし、頑張れ四糸乃！』
だから今、彼女は一生懸命走っている。よしのんの案内をもらって、目指すのは――
「やはりここに来た」
物陰から、突然人影が飛び出した。
その人物の顔を見て、四糸乃は呆気にとられてしまう。
「あ……」
『わお、折紙ちゃんじゃなーい。これまた随分とかっちょいい格好だね』
四糸乃やよしのんを攻撃してくる人達と同じ、大きな機械を身につけている。
銃のようなものを見るだけで、四糸乃の体は弱々しく震えてしまう。
「ど、どうして……ですか」
『そうだよー。この前はすっごく優しくしてくれたじゃん』
「状況が状況だったから、そうしただけにすぎない。私の本来の役割は、対精霊部隊の一員として戦うこと」
この瞬間まで、四糸乃は折紙があちら側の人間だということを知らなかった。よしのんは知っていても、ずっと戦場から目を背け続けていた四糸乃自身は、彼女を見た覚えがなかったのだ。

「今日のあなたの動きは、いつもと異なっていた。だから、ＡＳＴも見失いがちになってしまう」
淡々と語り続ける折紙からは、冷たい雰囲気しか感じられない。それは、空から落ちてくる雨粒とともに、四糸乃の体から熱を奪っていくように感じられた。
「けれど私は気づいた。細かな方向転換をしながらも、あなたがある一点……私の住むマンションを目指して進んでいたことに」
『だから、先回りして待ってたってこと？』
「そう」
折紙が右手を掲げる。そこから真っ直ぐに、光の刃がこちらに向かって伸びていた。
「精霊の力は、人間を脅かすもの。排除しなければならないもの」
なんの感情も見せずに、彼女は告げる。
「あ、あ……っ！」
対する四糸乃は、どうすればいいのかわからなかった。
優しいと思っていた人が、よくしてくれると思っていた人が、剣の切っ先を向けている。
その事実だけで、どうしようもなく動悸が激しくなってしまう。
体中から力が抜けて、視界がぐにゃりと曲がる感覚とともに、彼女は。

「……」

でも、理性を失う一歩手前で、あることに気づいた。
折紙の持つ刃は、確かにこちらを向いている。
けれどよく見ると、そこから伸びる線は四糸乃からは微妙にずれていた。
まるで何かを指し示すかのように、彼女は四糸乃の背後の街並みに切っ先を向けていたのである。
「あなたのいるべき場所は、ここではない」
「えっ……？」
「私の前にいても、あなたは救われない」

＊

ようやく彼女が屋内、映画館の中に入ったことを知らされた士道は、すぐに〈フラクシナス〉から地上へ転移した。
ＡＳＴに見つからないように建物内に足を踏み入れる。琴里の指示通りに３階に向かうと、ちょうど受付あたりのところに、フードを被った少女の姿を見つけた。
「四糸乃」

「あ……し、士道、さん」
『やっほー士道くん。おひさー、ってほどでもないかな』
　近寄って声をかけると、あちらも士道の名前を呼んでくれた。よしのんだけでなく、四糸乃もちゃんとここにいる。
「よかった……です。来て、くれて」
『折紙ちゃんの言う通りだったねー』
「鳶一の？」
　予想外の発言が出たので、士道が事情を尋ねると。
「あ、あの……私達、士道さんと、折紙さんに会いたいと思って……」
『最初は折紙ちゃんの家を目指してたんだけど、待ち伏せしてた本人に止められたんだよね』
「待ち伏せ……それで、どうなったんだ？」
『士道くんに会いたいのなら、大きな建物の中に入るといい。待ってれば必ず来てくれるって言われてさー。んでんで、その通りにしたらホントに士道くんが現れたってわけ！』
　興奮気味に両手をぱたぱたと動かすよしのん。四糸乃の方も、安心したような表情を浮かべている。

「鳶一が、そんなことを……」

　そうすると、今こうしてチャンスをつかむことができたのは、彼女のおかげということになる。

　ＡＳＴの隊員である彼女が、士道のために、精霊のために動いてくれたのだ。

　どんな意図があったのかはわからないが……今はただ、喜ぶべきだろう。

「士道、さん」

　四糸乃が口を開く。小さな声ではあるけれど、ちゃんと彼の耳には言葉が届く。

「私……わかりました」

　ところどころ詰まりそうになりながらも、よしのんの『がんばれ！』コールに支えられ、彼女はゆっくりと語り続ける。

「今日、私達に会いに来てくれて……危ないのに、来てくれて……だから」

　うつむいていた四糸乃が、顔を上げる。

「士道さんと、折紙さんのこと……信じられるって、わかりました」

「……ありがとう、四糸乃」

　その言葉が、何よりうれしい。敵意に曝され、ずっと心を閉ざしてきた少女が、恐怖を乗り越えて歩み寄ってくれたのだ。

『士道。今ならもう、好感度も十分よ』

インカムからの琴里の声を聞いて、士道は一度深呼吸をする。
「四糸乃。人間の世界で、生きてみたくはないか」
これが、最後の仕上げだ。

＊

「鳶一」
空間震から2日後の朝。
週明けの学校に出勤した士道は、教室にいた折紙を呼び出し、人気のない廊下まで連れてきた。
「四糸乃の力の封印、うまくいったよ」
「そう」
相変わらず、彼女の返事は淡白だ。何を考えているのか、非常に読み取りづらい。
「鳶一が、四糸乃に教えてくれたんだよな。屋内に入れって」
「一度建物の中に入れば、ＡＳＴは一定時間手を出さない。これまであなたは、その隙をついて精霊と接触しているようだったから」
「ありがとうな。本当に、助かった」

頭を下げて礼を言う。
四糸乃が人として生きて行けるようになったのは、間違いなく折紙のおかげだ。
一昨日のことだけではなく、そもそも彼女がオーシャンパークでフォローしてくれていなければ、あの少女の心を開くにはもっと時間がかかっただろうと士道は思う。
「………」
折紙は、そんな士道の姿をしばらく無言で見つめた後、静かに口を開いた。
「精霊の中には、人間を襲うことを躊躇わない者もいる。私の両親を殺した、あの精霊のように。だから、あなたの望みを聞くことはできない」
士道の望み。折紙に戦いをやめてほしいと頼んだことを指しているのだろう。
「仇を討つその日まで、私は止まるつもりはない」
声を張っているわけではないのに、恐ろしいほどに力強さを感じる言葉。
内に秘めた復讐心が、どれだけのものかを感じさせるものだった。
「……そうか」
四糸乃に関する問題は一段落ついたが、折紙については全然だ。
士道は、何をすべきなのか。
「でも」
と、そこで折紙の放つ緊張感が薄れた。心なしか、表情も柔らかくなっているような

気がする。
「もし、彼女……四糸乃のような精霊が現れた時には、あなたの力になりたい」
「え……？」
「それだけ」
くるりと背を向け、教室へ戻ろうと歩き出す折紙。
「……鳶一！」
その背中を呼び止め、一言だけ言いたいことを投げかけた。
「また、四糸乃に会ってやってくれ。きっと喜ぶから」
「………」
こくりと小さくうなずいて、彼女はそのまま去って行った。
「進んでる、よな」
根本は解決していないのかもしれない。
それでも、何も変わらないわけじゃない。
この変化が、きっとよいものであることを、士道は信じる。
「今日も頑張るか」
気合いを入れ直して、授業に臨むことにしよう。
この学校の生徒は元気いっぱいだから、そうでなければついていけない。

和解、そして芽生えるもの

兄妹２人で晩御飯の食卓を囲んでいる最中、士道は朝方折紙に言われたことを話した。
「そう……鳶一折紙がそんなことをね」
すなわち、彼女がこちらに協力する姿勢を見せてくれたという内容についてだ。
「彼女にも、いろんな事情があるんだろう。ただ、俺は信じたいと思うし、信じられるとも思う」
「ま、それは今後確かめさせてもらうわ。誰かさんが秘密をペラペラしゃべってくれたおかげで、マークせざるを得ないわけだし？」
「う……重ね重ね、申し訳ないです」
カレーを食べる動作を止め、士道は小さく頭を下げる。
彼は折紙に、自らの持つ能力、そして精霊を救うという目的を明かしている。琴里達としては伏せておきたかった秘密を、教え子を説得したいがために露わにしてしまったのである。
そのことを琴里に伝えたのは、１０日ほど前。折紙と四糸乃と一緒に遊園地に行った

日の夜のことだった。
　折紙が四糸乃に対して手を出さなかったこと、妙に協力的だったこと。そのあたりを問い詰められ、白状するしかなかった。
「いいわよ、もう。すでにこってり説教済みだし、現状士道にＡＳＴの干渉がないってことは、彼女が秘密を守っているであろう証拠だろうし」
「そこは心配いらないと思う。あいつはきっと、約束を守る子だ」
「……信用してるのね」
「大事な生徒だからな。嘘をつくようなタイプじゃないのは、この1年でよくわかってる」
　そうでなければ、リスクを冒すような真似はしない。〈ラタトスク〉という組織の名前や、その内情に関する話は避けているにしても、だ。
「士道がそう言うんなら、私もある程度は信じるわ。彼女優秀だから、うまく利用……もとい、協力できれば効率よさそうだし」
「黒い、黒いよ琴里ちゃん！」
　ニタア、と唇の端をつり上げる妹の姿に怯える士道。やはり黒リボンモードの彼女はいろいろと容赦がない。
　……真面目な話も終わったことだし、少しお願いをしてみるべきか。

「時に琴里よ。リボン取り替えてもいいか？」
「あん？　なんでよ」
「最近司令官モードばっかりだろ？　まあ神無月さんに諭されて以降、高圧的な妹というキャラにもいいところがたくさんあると気づかされたから不満はないんだが」
「神無月に制裁、と。それで？」
言葉の調子こそ静かなものの、その内容はなんとも過激である。
「たまには無邪気な琴里の姿を見たいなーと思いまして。久しぶりに兄妹水入らずでイチャコラしないか？」
「変態。カレーに七味ぶちまけるわよ」
馬鹿じゃないの、と呆れたようにため息をつかれてしまう。
「と、冷たいことを言いつつも、実際はお兄ちゃんに甘えたいんだよな」
「違うから。めちゃくちゃはっきり拒否してるでしょう」
「と、冷たいことを言いつつも、実際はお兄ちゃんに甘えたいんだよな」
「……え、なに？　もしかして無限ループなの。イエスって言わないとイベント進まないの」
「と、冷たいことを言いつつも、実際はお兄ちゃんに甘えたいんだよな」
「………」

「と、冷たいことを言いつつも」
「あーもうわかったわよ！　ご飯終わったらリボン替える！」
　ついに根負けした琴里が、ぐぬぬと唸りながらそう答える。
　対して士道は、勝利の味を噛みしめるガッツポーズ。
「やったぜ」
「ムカつくくらい爽やかな笑顔ね……」
「お兄ちゃんが妹のことを想って笑ってるだけだぞ」
「……シスコン」
　士道にとっては、罵倒ではなく褒め言葉である。
　ぷいっとそっぽを向く琴里だが、その頬は若干朱に染まっていた。間違いなく照れている。
　きっと彼女も、まんざらではないのだろう。そもそも琴里は元来甘えたがりであり、だからこそ士道も少々強引に話を通したのだ。妹が本気で嫌がることを強要したりはしない。
「マリカーでもやるか」
「いいわ。けちょんけちょんにしてあげる」
　こうして、２人きりの夜が過ぎていく。

士道が不思議な力を持っていようが、琴里が〈ラタトスク〉の司令で、ちょっぴり過激な一面を秘めていようが。

……この時間だけは、決して変わらない。

＊

翌朝。

「シドー、おはようだ！」

「おはよう、十香」

自宅の前で待つこと数分。隣の建物から出てきた十香が、元気に駆け寄ってきた。

経過観察の結果、無事彼女は地上で暮らすことを認められた。そこで五河家の隣に精霊用のマンションが建てられ、昨日からそこで生活することになったのである。

ものの数日でこれだけ大きな住宅が建設されたことについては、そろそろ慣れてきたので士道も突っ込まない。

「ちゃんと起きられたみたいだな」

「うむ。令音がいろいろしてくれたからな」

「そうか。して、令音さんは？」

「もう少ししてから出るそうだ。先に行ってくれと言っていた」
　制服をばっちり着こなした十香の姿は、どこからどうみても普通の人間そのものだ。
この1ヶ月弱で、クラスにもしっかり溶け込むことができている。
「よし、じゃあ行こうか。校門くぐったら、ちゃんと五河先生って呼ぶんだぞ」
「わかっている」
　ならばよし、と歩き出そうとする士道。
　ところが、十香の方はなかなか一歩を踏み出さない。
「シドー」
「どうかしたか？」
「ありがとう。私の願いを、叶えてくれたのだな」
　願い？　と、少しの間逡巡した後、士道は彼女の言わんとすることに思い至った。
　四糸乃と初めて出会ったあの日。シェルターに避難する途中、確かに士道は彼女にお願いをされていた。
「私のような精霊を、助けてやってほしい。士道はちゃんと、それを果たしてくれた。だから、ありがとうだ」
　そう言って、輝くばかりの笑顔を向ける十香。
「十香……」

　思わず見惚れてしまいそうになる士道。
　だが、それは長くは続かなかった。
「…………」
　笑っていた十香が、一転して険しい表情を見せる。視線は士道ではなく、彼の背後へ向けられていた。
　つられて彼が振り向くと、そこにいたのは。
「と、鳶一？」
「おはようございます」
　まったく気配を感じなかったが、いつの間にか折紙がすぐそばに立っていた。
　ぺこりと礼をする彼女に、士道は頭に浮かんだ疑問を投げかける。
「家、こっちじゃないだろ。なんでここに」
「監視役だから」
「え……でも、今まではそんなこと」
「監視役だから」
「あ、はい」
　無限ループ、流行っているのだろうか。
　自分が仕掛けるのは楽しいが、逆の立場になるとなんだか怖い。

なんて士道が思っているうちに、折紙はゆっくりと十香のもとへ歩み寄る。
「鳶一折紙。なんの用だ」
無表情の折紙に対し、十香は不機嫌そうな顔を見せる。それも仕方のないことで、学校でもこの2人は常にお互いを警戒し合っているのだ。
命のやり取りをした関係である以上、なかなか仲良くなれないのは当然なのかもしれない。
「あなたに、言わなければならないことがある」
「言わなければならないこと？　なんだそれは――」
……その瞬間、士道も十香も息をのんだ。
眼前の光景に、ただ驚くしかなかったのだ。
「ごめんなさい」
あの鳶一折紙が、夜刀神十香に頭を下げている。
これが意味することの重大さは、おそらくこの場にいる全員が理解しているはずだ。
「な、なんだいきなり!?」
「4月22日。あなたが、精霊の力を失った日」
顔を上げた折紙は、いつもの通りのポーカーフェイス。
だが、彼女の口から出てくる言葉には、なんとも言えない緊張感が漂っていた。

「……お前が、私を撃ったことか」
折紙の説明を受けて、十香も意図を理解したらしい。
「今さら謝られる筋合いはない。あれは」
「そうじゃない」
「ぬ？」
否定の言葉が飛んできたことに目を丸くする十香。士道も完全にそのことに関する謝罪だと思っていたので、面食らってしまった。
「私が謝りたいのは、別のこと」
淡々と、けれど不思議に響いてくる声。
「あなたと士道のデートを邪魔して、ごめんなさい」
「……………！」
毒気を抜かれたかのように、十香はぽかんと口を開けた。
士道の方は、ここでようやく折紙が本当に意図するところを察していた。
ＡＳＴは、人類を強大な力から守るために精霊と戦っている。彼女が十香を撃ったのは、ＡＳＴの隊員としてその責務を果たそうとしただけにすぎない。
そのことを、今の十香は十分理解している。おそらく折紙は、素直に謝っても受け入れてはもらえないかもしれないと予測したのだろう。

お前は自分のなすべきことをしようとしただけだ——そんな感じのことを言われてしまうと、そう考えたのだ。

だから、理由を用意した。謝罪を受け取ってもらえるような形を作り出し、背後に本当の感情を忍ばせた。

「……は、ははっ」

士道の推測が正しいかはわからない。十香が折紙の言葉をどう解釈したのかもわからない。

それでも、今現在十香が笑っているのは確かな事実だった。

「ふふっ、そういうことか……うむ。謝るのなら、許してやるぞ」

「ありがとう」

この瞬間が、彼女達にとって大きな一歩になる。

そう確信した士道は、穏やかな表情で２人を見守っていた。

『やっはー、士道くん』

「うおっ」

不意に背後から声をかけられ、びっくりしながら振り向く。

すると士道の鼻の先に、ででん、とウサギのパペットが突きつけられた。

「四糸乃！　と、それによしのんも」

『検査の合間に、ちょっとだけ外に出してもらえたんだー』
「お、おはよう……ございます」
可愛らしい白のワンピースを身に纏った四糸乃が、士道の目の前に立っている。
今の話を聞く限り、検査の経過は良好らしい。
「おお、四糸乃とよしのんではないか！」
『十香ちゃんもおはよー』
彼女の存在に、十香達も気づいたらしい。
「なんだ。もう仲良くなったのか？」
「何度か話す機会があってな」
うれしそうに語る十香。似たような境遇の子がそばにいることが、彼女の心にはプラスになるのかもしれない。
「………」
そしてもうひとり、四糸乃を見つめる少女がいる。
彼女の視線に気づいた四糸乃は、ゆっくりと足を進めて近づいて行った。
「あ、あの……折紙さん」
折紙の前で立ち止まった四糸乃は、自らの言葉をたどたどしく紡いでいく。よしのんではなく、彼女自身の思いを形にする。

「また、会えて……うれしい、です」
四糸乃の顔が、ほころんだ。
それはまるで、姉に向けるかのような安心しきった表情。士道にはそう感じられた。
「……四糸乃」
折紙が、少女の名を呼ぶ。初めて面と向かって、彼女の本当の名前を口にする。
そして、彼女の頭の上に優しく手を置いた。
「私も、うれしい」
その時。
士道は初めて、鳶一折紙の『顔がほころぶ』光景を目の当たりにした。

狂三ネゴシエーション
喧嘩するほどなんとやら

「ふんふふふーん」
「おにーちゃん、また同じ曲聴いてるのー？」
　出勤前のひと時。ソファに座り、士道がスマホ＋イヤホンで音楽を聴いていると、背後から琴里が声をかけてきた。
「よくわかったな」
「鼻歌のリズム、完璧に覚えちゃうくらい聞いたし」
　振り返ると、半分呆れたような表情で妹が立っている。
「ほんとに好きなんだね、その歌」
「おう。この人の歌全部に言えるけど、不思議と飽きが来ないんだよ」
「ふーん。ま、それはどうでもいいんだけどね」
　どうでもよかったらしい。
「今日の夜、十香の家でパーティーするのはちゃんと覚えてる？」
「もちろんだ。料理作るのは俺だしな」

数日前から、十香は五河家の隣に建てられたマンションで生活している。これは、精霊である彼女が立派に人として生きて行けるようになった証だ。

その記念として、引っ越し祝いを兼ねた小さなパーティーを開くことになったのである。一応の発案者は士道で、彼が思いつきでこぼした言葉を採用して話を広げたのが琴里だ。

「それなんだけど、四糸乃が鳶一さん呼びたいって言ってたよ？」

「鳶一を？」

「うん。だから今日聞いてみてくれる？　夕方来れるかって」

先日の一件以来、四糸乃は折紙に心を許しているようである。士道としても、彼女達が仲良くなることは大歓迎なので、ぜひパーティーに誘いたいところだ。

「よしわかった」

快諾するとともに、イヤホンを外した士道は鞄を持って立ち上がった。

ぼちぼち出勤の時間である。

＊

数日前、折紙は十香に謝罪をした。

対精霊部隊のＡＳＴの一員である彼女が、精霊だった少女に頭を下げたのだ。これは大きな一歩だと、士道は確信した。
確信したのだが、だからといって何かが劇的に変わるわけではない。
「というわけで、夜刀神の引っ越し祝いをすることになったんだが来ないか？」
「……夜刀神十香の？」
「そんな露骨に嫌そうな声出すなよ……」
一般人が聞いたらわからない程度の声色の変化ではあるが、自称鳶一検定３級の士道には彼女の感情がそれなりに読み取れるのである。
つまるところ、謝ったからといって別に折紙と十香が仲良くなったわけではない。命のやり取りをすることはないだろうが、以前と同じくいがみ合うこともしばしばであり、担任教師である士道の悩みの種のひとつになっている。
「お祝いには四糸乃も来るんだ。というか、あの子が鳶一を誘ったんだけど」
「いつどこに行けばいいの」
「変わり身早いな!?」
四糸乃の名前を出した途端、急に眼の色を変える折紙。ちょっと前までは考えられないような態度に少々面食らう士道だが、悪いことではないので特に問題はない。
「夕方の……そうだな、６時半くらいに俺の家に来てもらえればいいんだが」

「わかった」
どうやら用事もないらしく、すぐに了承の返事を得ることができた。四糸乃もきっと喜ぶに違いない。
できれば、十香ともそんな感じで仲良くしてほしい、というのは難しい願いなのだろうか。
彼女の気持ちをはっきりわかってあげるには、鳶一検定1級が必要になるのだろう。

＊

その日の夜。
十香の部屋で行われた引っ越し祝いパーティーは、つつがなく進行した。
当初は士道ひとりで作る予定だった料理も、早めにやって来た折紙が手伝ってくれたおかげでより豪華な出来に仕上がり、食欲が大変盛んな十香も大満足の様子だった。
士道の心配の種であった十香と折紙の絡みも、特にお互いいがみ合うこともなく。結論から言うと、なごやかな宴に違いないものだった。
……食事を終えた後、十香がある物を引っ張り出すまでは。
「じゃーん！　テレビゲームだ！」

「ウルトラマンの対戦ゲーム……十香、いつの間にこんなの持ってたんだ」
「ひとりでいる時にストレスを溜めないよう、こっちでゲームを用意しといたの」
「なるほど。でもなんでウルトラマン?」
「うちのクルーの趣味」
士道の疑問に答える琴里。どうやらラタトスクのメンバーの中に特撮好きがいるらしい。
兄妹で話している間に、ケーブルの接続などをささっと済ませた十香はビシッと人差し指を前に突き出していた。
「鳶一折紙!」
「なに」
「私と勝負だ!」
「……かまわない」
十香の誘いに乗り、手渡された2Pコントローラーを握る折紙。
「お、まずはそのふたりで対戦か。頑張れよー」
「え、えっと……どっちを応援すれば……」
十香のことも折紙のことも好きな四糸乃は、どちらにエールを送るべきか困っている様子。そんなことで真剣に悩めるところもまたいじらしいと士道は思う。

「しかし、命の奪い合いをしていたふたりが仲良くゲームか……うん、いいことだ」
うれしいことなので、素直にそんな感想を漏らすと、隣にいた琴里が腕を組みながら低い声でこう答えた。
「仲良くねえ……ま、そうなればいいけど？」

＊

３０分後。
「はっはっは！　これで私の１０連勝だな！」
「………」
「私のゾフィーにお前のエースは手も足もでない！　やったぞシドー！　鳶一折紙に勝った！」
「………」
「勉強ではだめだが、これなら鳶一折紙にも楽勝だな！」
「………」
勝ち誇り笑みを浮かべる十香。彼女としては大して煽るつもりはないのだろうが、そのはしゃぎようは完全に折紙を挑発するものであった。

「あ、あはは……。鳶一、あまり気を悪くしないでくれ。十香も悪気があるわけじゃ」
「わかっている」
わーいわーいと両手を挙げる十香と対照的に、折紙はどこまでも静かだった。正座してコントローラを膝に置いたまま、ただひたすらにリザルト画面を凝視している。
あまりに視点が動かないので、士道が気味悪さを感じるほどである。
「と、鳶一？」
「受けた屈辱は3倍、いや5倍、いや10倍にして返す。それが鳶一家のやり方」
「お、おう……ほ、ほどほどにな」
「心配しなくていい。あなたには迷惑はかけない」
燃えていた。
折紙の瞳は、ただ復讐の炎に燃えていた。
「あーあ。これは十香、あとで痛い目見るかもねー」
「お、折紙さん。がんばってください……」
『でもリベンジはやりすぎないようにねぇ』
「ありがとう。四糸乃はいい子」
そして四糸乃と話す時には優しい瞳に変化していた。同じ元精霊でも、十香と四糸乃に対する彼女の反応はまったく正反対だ。

＊

　そして、約1週間後。

「ウルトラギロチンサーキュラーギロチンバーチカルギロチンホリゾンタルギロチンギロチンショット」

「ぬわ、ぬお、ううっ！　やめろ、ゾフィーの身体がバラバラになってしまう！」

「勝負に情けは無用」

「それにしてもだな、お前はさっきから切断技ばかりではないかっ」

「エースはギロチンの専門家だから仕方ない」

「ゾフィーはウルトラ兄弟のお兄さんなんだぞ！　ナンバーワンなのだぞ！」

「もう長男の時代は終わり。いわゆる下剋上」

「ぬうううっ」

　再び十香の部屋を訪れた折紙は、完膚なきまでに十香の操作するウルトラマンを叩きのめしていた。一見無表情に見えるが、その口元は確かに愉悦に歪んでいる。

　そんなふたりの様子を後ろから眺めていた琴里は、チュッパチャプスを口にくわえたまままため息をつく。

「やっぱりこうなった。士道、これで十香の機嫌が悪くなったらちゃんとフォローしなさいよ」
「ああ」
「……なんでうれしそうなわけ?」
「理由はどうあれ、あの鳶一が自分の意思で十香の家に遊びに来たことに、ちょっと感動してる」
「あんな憎しみ丸出しな感じでも?」
「憎しみって言っても、以前のそれに比べれば可愛いもんだ。ゲームで勝ってニヤニヤできるくらいなら、喧嘩友達の範囲に収まるだろうしな」
「ふーん」
もう一回!　と叫ぶ十香とうなずく折紙。再び光の巨人同士の戦いが始まる中、琴里はコントローラをガチャガチャ鳴らす彼女達の背中を眺めていた。
「ていうか、あれでニヤニヤしてるの?　鳶一折紙」
「微かにな。よーく見ないとわからないレベルだけど」
「……ぜんっぜんわかんない」
顔をしかめる妹を見て、士道は笑う。折紙のポーカーフェイスを見破るには、付き合いの長さがなにより必要なのだ。

「わ、私はなんとなくわかるかも……」
「おう、やるなぁ四糸乃。鳶一のことが好きだからわかるのかもな」
「シドー、私の仇をとってくれ！　折紙を倒してくれー！」
　助けを求める十香の声。どうやらまた負けたらしい。
「しょうがないな。見ていろ、俺のゼットンが火を吹くぞ」
「五河先生が相手でも勝負は勝負。容赦はしない」
　その後も、なんだかんだで場はそこそこ盛り上がり。
「え、えっと……ここをこうして、スペシウム光線」
『四糸乃とよしのんの共同作業だよー』
「四糸乃は上達が速い。見込みがある」
「あ、ありがとうございます」
　パペットをつけたまま器用にコントローラを操作する四糸乃を折紙が褒めたり。
「確かに四糸乃はいい子だが……むう」
「なんだ、十香も優しくしてほしいのか？」
「だ、誰が鳶一折紙なんかに！」
「まあまあ。じゃあ俺が手取り胸取り教えてあげよう」
「シドーが教えてくれるのか？　それならいいが……む？　手取り胸取り？」

「バカ兄は変な造語を十香に教えないの」
琴里にツッコまれながらも、士道が十香にゲームのコツを伝授したり。
そんな、ありふれた日常の一コマを楽しんだ。

*

同時刻。
天宮市のとある裏路地で、ひとりの少女が夕焼け空を見上げていた。
「ああ、ああ。もうすぐ、ですわ」
軽やかなステップを踏むその姿は、彼女がすこぶる上機嫌であることを示している。
「五河士道さん。わたくしと出会えるその日を、楽しみにしていてくださいまし」
一度も会ったことのないはずの青年の名を親しげに呼びながら、彼女は優雅な……それでいて不気味な笑みを浮かべていた。

転校生、時崎狂三

「わたくし、精霊ですのよ」
　それが、今日初めて顔を合わせた転校生の、士道に向けた第一声だった。
「……精霊？」
「ええ。それより五河先生？　そろそろ朝のホームルームに行かなければならない時間ではありませんの？　わたくし、早くクラスのみんなにご挨拶がしたいですわ」
「あ、ああ……そうだな。案内するから、ついてきてくれ」
「はい」
　時崎狂三。今日から士道のクラスに新たに加わることになった転校生。
　白くきめ細やかな素肌に、美しい顔立ち。黒い髪を２つに結わえていて、長い前髪が左目を覆い隠している。
　その口調と言い、どこか深窓の令嬢を思い起こさせる少女だと士道は思った。
　ただ、そういったファーストコンタクトのイメージは、今しがたの彼女の言葉でほとんど吹き飛んでしまった。
「楽しみですわ。どんな方達と会えるのでしょう」

「うちのクラスは曲者揃いだけど、みんな根はいいやつだから安心してくれ」
「あら、あら。それは期待できそう」
廊下を歩きながら、彼女が口にした『精霊』という単語の意味を考える。
士道が何も知らない一般人であったなら、狂三が自らの美しさを精霊に例えただけなのではないかと結論付けて、それで終わりだったに違いない。
だが、彼は少し前から本物の精霊とかかわりを持っている。もし彼女も同類なのであれば……
「っと、もう教室か」
考え事をしながら会話しているうちに、気がつけば士道は教室の前に立っていた。
「どうしましたの、先生。中に入りませんの」
士道が扉を見つめていると、狂三が怪訝そうな顔つきでこちらを覗きこんでくる。
近くで彼女の瞳を見ると、まるで吸いこまれてしまいそうな錯覚を覚える。同時に、それは十香や四糸乃のそれと同じなのではないかと思考する。
「なあ、時崎」
「なんですの?」
「さっきの、精霊ってさ……その」
「ふふっ。その話は……そうですわね。放課後にまたしてくださいまし」

「……わかった」
とりあえず、今は来禅高校の教師としての役割を果たそう。そう考えた士道は、気を取り直して元気よく教室へと足を踏み入れるのだった。
「静かにー。今日はみんなに転校生を紹介するぞ」

＊

ホームルームから続けて1時限目の現代文の授業を終えた士道は、教室を出てから琴里に携帯で連絡をとった。用件はもちろん、時崎狂三という少女に関してである。
『わかった。とりあえずこっちで調べておくから、士道はできるだけその子から目を離さないように』
「と言われても、俺はこれから他のクラスで授業なんだが」
『あー、そっか。なら令音にも頼んでおくわ』
必要なだけの会話を終え、通話を切る。おそらく琴里はこれから学校を抜け出し、〈フラクシナス〉へと向かうのだろう。
「さて、俺も次の授業に――」
「五河先生」

「ぬおっ!?　な、なんだ、鳶一か」
携帯をしまい歩き出そうとしたところで、すぐそばに折紙が立っていることに気づく士道。
「もうすぐ休み時間も終わるぞ。早く教室に」
「朝からあなたの表情筋が平常時より5パーセント強張っている。何かあったの」
「……5パーって数字はどこから来たんだ」
「綿密なデータ処理によって算出された」
前々から感じていたことだが、彼女の言動は時々ぶっ飛んでいる。鳶一流ジョークなのか、はたまたすべて大真面目なのか、それは今の士道には判別のつかないことだった。
「何かあったの」
「それは……」
「精霊のこと?」
歯切れの悪い士道に対し、折紙は真っ直ぐに彼の瞳を見つめてくる。
そして彼女の言葉自体も、確信に近いところを突いていた。
「……鳶一。君は俺のことを信用してくれている……って、考えてもいいよな」
「当然。私はあなたを信頼している」
「そうか。だったら俺も、その信頼には応えておきたい」

　狂三に注意しておくなら、同じ教室の中に事情を知っている人間がひとりはいたほうがいいのも事実。そう結論付けた士道は、折紙に今朝の狂三との会話の内容を伝えた。
「時崎狂三が、精霊……」
「まだ確定したわけじゃない。今、こっちで調べてるところだ。結果が出たら鳶一にもすぐ教える」
「それまでは、動かないでほしいということ？」
「理解が早くて助かるよ。さすが優等生だな」
「そう」
「お、今表情筋が2パーセントくらい緩んだか？」
「二番煎じはあまり感心しない」
　手厳しい意見をもらってしまった。
「時崎狂三の様子は私が観察しておく」
「頼む」
「ちなみに、夜刀神十香はこのことを知っているの」
「いや、夜刀神には話してない」
「そう」
「なんでガッツポーズしてるんだ」

「秘密の共有は愛を育むというのが相場」
折紙のセリフとともに、２時限目開始を告げるチャイムが鳴り響く。彼女の発言の意図が気になる士道であったが、これ以上話を続けることはできない。
「じゃあ、何かわかったら伝えるから」
「わかった。私もそうする」
折紙と別れ、士道は次の授業が行われるクラスの教室へ急ぎ足で向かうのだった。
「やっぱり、鳶一って俺のこと……いや、今は時崎だ」

＊

折紙が教室に現れたのは、チャイムが鳴り終わって数分後だった。
「ぬ、ようやく戻って来たか折紙。チャイムが鳴った時には教室にいるのが人間のルールではないのか？」
「………」
「な、なんだじーっと見つめて」
「フッ」
「ああっ！　貴様いま私を鼻で笑ったな！　なんだその勝ち誇ったような態度はー！」

＊

その日の授業は、特に問題もなく消化され。
「じゃ、先生さよならー」
「気をつけて帰るんだぞ。あとあんまり寄り道するなよ」
「はーい」
「ほどほどに遊んで帰りまーす」
迎えた放課後。亜衣麻衣美衣のかしましトリオにあいさつした後、士道は席に座ったままの狂三のもとへ歩み寄る。
「あら。真っ先にわたくしを見つめて来てくださるなんて、情熱的なアプローチの前触れですの？」
「そうかもしれないな」
「かまいませんの？　教師と教え子の間での恋愛はご法度……それが人間の世界での決まり事では？」
「ばれなきゃセーフだ」
「ええ、ええ。なるほど……五河先生はワルですのね」

上品な笑みを浮かべる狂三の表情から、その奥に潜む感情を読み取ることはできなかった。それも当然であり、そもそも女心が簡単に見抜けるのなら士道は恋人作りに苦労していないのだ。
「少し場所を変えてもいいか。ゆっくり話がしたいんだ」
「いいですわよ。わたくしも、同じ気持ちですから」
琴里からの連絡で、彼女が本物の精霊であるという情報はすでに士道の耳に入っている。折紙にも伝達済みだ。
今しがたの発言もそうだが、狂三は自らが精霊であることを隠そうとしない……どころか、むしろ積極的にばらそうとしているようにさえ感じられる。
いったい、彼女の真意はどこにあるのか。今まで接してきた精霊が、言ってみれば純粋な少女ばかりだったので、士道は狂三との距離感を測りかねていた。
「この辺でいいか」
人気のない廊下まで移動してから、士道は耳にはめたインカムからの指示を待つ。インカムは〈フラクシナス〉で様子をうかがっている琴里の通信とつながっており、これにより彼女やクルー達と意思疎通を行うことができる。
『精霊関連のことを突っ込む前に、まずは軽いジャブで場を和ませたほうがいいかもし

れないわね』
　士道の役目は、精霊である狂三をデレさせて、キスをすること。それによって彼女の霊力を封印し、人間社会に溶け込ませることができる。
　人間関係の構築において、最初のやりとりで抱くイメージというものは非常に大事だ。ゆえに琴里は慎重な判断をしているのだろう。
「どうしましたの、五河先生」
「あ、ああ、うん。すまない。何を話したもんかと考えてさ」
「ふふ、なんでもいいんですのよ。わたくし、先生とお話しできるだけでうれしいですから。知りたいこと、なーんでも聞いてかまいませんわ」
「な、なんでも、か」
「ええ。な・ん・で・も、ですわ」
　ずい、と士道に一歩近づく狂三。不必要に腰をくねらせているように見えるのは、彼の気のせいなのかそうでないのか。
『士道。少し待ちなさい。選択肢よ』
　その時、インカムから琴里の声が聞こえてきた。

＊

〈フラクシナス〉には、精霊とのコミュニケーションを補佐するための機能として、ＡＩによる選択肢提示システムが用意されている。
士道が精霊と会話している間、適宜次の行動の選択肢が表示されるのだ。
「令音。確か昨日から、ＡＩに士道の思考データを混ぜたのよね」
「ああ。これまでシンは彼なりの話術で十香と四糸乃をデレさせることに成功している。その思考を取り入れて損はない……という君の判断で導入した」
「ぶっちゃけここまでほとんど選択肢役に立ってないし、テコ入れも必要よ」
さて、生まれ変わったＡＩによる選択肢はいかほどのものか。
モニターに大きく表示された文章は――

①おっぱいのサイズを教えてくれ
②おっぱいを触らせてくれ
③おっぱいおっぱいおっぱいおっぱいおっぱい

「あんのアホ兄ー!!」
「どうやらシンのデータを色濃く受け継ぎ過ぎたようだ」

＊

『おっぱい以外の話題にしなさいこのミドリムシ！』
「お、おう」
　なぜかおかんむりの様子の妹に困惑しつつ、士道は今一度狂三に向き合う。
　……ちなみに彼女の胸は、十香ほどではないが十分に豊満だった。
「お胸を触りたいんですの？」
「ＨＡＨＡＨＡ。教師がそんな欲望抱くわけないだろ」
「先ほどから手つきがせわしないですが」
「これはわきわき体操だ。こうすることで手の血行がよくなりなんやかんやで健康長寿につながるんだ」
「そうですの。でしたらわたくしも今度試してみますわ」
　士道の苦しい言い訳を信じているのかは不明だが、狂三は小さく笑うとそれ以上の追及はしてこなかった。
「五河先生は面白い方ですわね」
「そうか？」

「ええ。とてもユーモアがおありになりますわ。わたくし、仲良くするなら先生のような方が好みですの」

「それは光栄だなぁ」

狂三のような美少女に真正面から褒められると、恋愛に関して残念な男・五河士道はどうしてもドギマギしてしまう。それをごまかすために首に手をやって笑うと、彼女もそれに合わせるように柔和な笑顔を見せた。

「親愛の意をこめて、士道先生とお呼びしても？」

「士道先生、か。あんまり名前呼びは推奨していないんだが……」

「いいじゃありませんの。しっかり敬意をこめてお呼びしますわ」

「うーん、わかった。許可しよう」

にこり、と微笑む狂三。

美人に強く出られると、断れなくなるのが士道の性質だったりする。

『へえ、いい感じじゃない。これだけフレンドリーな精霊っていうのも珍しいわね』

「……どうだろうな」

『なによ。気になることでもあるの？』

しかし、年甲斐もなくドキドキしながらも、士道の心の一部は別の角度から目の前の生徒を分析していた。

「俺の経験が告げている。こういう初対面からあからさまに好意をぶつけてくる女は、たいがい信用できないと」
『なに？　昔、ぶりっ子に痛い目遭わされたことでもあったわけ』
「……………」
『あったのね』
やかましい。人は失敗を糧にして前に進むのだ！
そう心の中で琴里に反論して、士道はこほん、と咳払いをひとつ。
「時崎」
「狂三、でかまいませんわよ」
「……時崎。よかったら、この学校を案内しようか」
「あら。士道先生はなかなかデレてくれませんのね」
『デレる』という単語を口にした狂三。
……いったい、彼女はどこまで知っているのか。ただの偶然とは考えづらい。
悩んでいるのは士道だけではないらしく、インカムの向こうからも琴里のため息が聞こえてきた。

＊

「ぬう……五河先生と転校生はいったい何を話しているのだ」
「……」
士道と狂三のいる場所からいくらか距離をとった物陰から、十香と折紙は彼らの様子を観察していた。
とその時、折紙の携帯に着信があった。
「はい」
短く相槌を打ちながら、彼女は十香と狂三に視線を送る。
「ぬ？」
首をかしげる十香だが、人が電話している時は静かにしろと士道や令音から教えられているので黙ったままでいる。
「了解」
やがて通話を切った折紙は、くるりと踵を返すとその場を立ち去ろうとする。
「おい、どこへ行くのだ」
「用事ができたから、帰る」
「そ、そうか。用事か」
短い返答の後、再び歩き出す折紙。

その背中に向けて、十香はもう一度声をかける。

「鳶一折紙！」

「なに」

「今度、また私の家に来い。ゲームのリベンジをしてやる」

「……考えておく」

「うむ！　しっかり考えおけ！」

一度十香の顔に視線を向けた後、今度こそ折紙は去って行った。

人を殺す精霊

「に、兄様……っ！」
トラブルは、精霊絡み以外からもやってくる。
学校からの帰り道。道端で見知らぬ少女にいきなり抱きつかれたその瞬間、士道はそんなことを思った。

＊

「ここが兄様の家でいやがりますか。きれいに片付いててポイントたけーですっ」
ポニーテールを元気に揺らしながら五河家の内装を眺めているのは、突如現れ士道の妹を名乗った少女・崇宮真那。
普通、そんな子が現れたら疑うのが当然なのだが、小さい頃の記憶が曖昧なうえに実の親に捨てられている士道は、真那の言葉をすっぱり切り捨てることができなかったのである。
「顔つきもどことなく俺に似てるしな……」

「そりゃそーです。血をわけあった兄妹なんですから」
「……時に妹よ」
「なんでしょう？　答えられることならなんでも答えやがりますよ」
にこにこ笑顔の実妹らしき女の子に、士道は気になっていることを素直に口にする。
「そのおかしな敬語と呼べないしゃべり方はなんなんだ」
「え？　あー、これはですね。なんか癖で変な感じに」
「一応俺は現国の教師だ。矯正してやろう」
「兄様は教師なんですか？　さすが真那の兄様、立派でいやがります！」
「さすが俺の妹、ヨイショが上手いな！」
互いに笑いあった後、彼は妹に敬語のなんたるかを教え始めた。
そのやりとりを間近で見ていた琴里は、早くも意気投合しつつある二人を見てため息をひとつ。
「敬語うんぬん以前に、今までどこにいたのかとかいろいろ聞くべきことがあると思うんだけど……」
「シドー、私も言葉の勉強をしたいぞ！」
「わ、私も……」
『よしのんはオトナの言葉をお勉強したいなー』

一方、十香と四糸乃（とよしのん）は特に疑問を持つこともなくその場の空気に適応していた。

＊

「ま、また時間がある時に来ますっ！」
仲良く会話を重ねていた士道達だったが、真那の住んでいるところや現在の生活についての話になった途端、彼女は焦った様子で家を出ていってしまった。
「……どう思う？　士道」
「どうって、明らかに何か隠してるように見えたけど」
確か、真那は折紙といろいろあって知り合ったと言っていた。
加えて、住処や学校に関して口を濁すような態度。……つなげていくにつれ、士道の頭の中ではよくない想像が広がっていく。
「鳶一に聞くのが一番早いか」
「時崎狂三のこともあるのに、頭が痛いわね。どうせあの子のことも放っておけないんでしょ、シスコンだから」
士道に確認するように尋ねる琴里の口ぶりには、ほんの少しだけ不機嫌な成分が含ま

れていた。
「勘違いしているのかもしれないけど、俺は別に妹だったら誰にでも優しくするわけじゃないぞ」
「………」
「琴里がいい子で可愛いから優しくしたくなるんだ」
「……ふん。別にそんなこと聞いてないわよ」
「照れちゃってかわいいなあ」
　ゲシッ。
「痛い！」
「照れてない！　馬鹿なこと言ってないで、さっさとスーツ脱いできなさいよ」
「ああ、わかったよ」
　ぷんすか怒る琴里に笑いかけながら、士道はスーツのボタンを外し始める。
『見てごらんよしのん。あれがツンデレだよ』
「ツンデレ……」
「ツンデレとはなんだ？　うまいのか？」
　そしてそんな兄妹の様子を眺めながら、和気あいあいと語らう精霊たちの姿があった。

＊

翌朝。
士道が家を出ると、玄関の前でにらみ合う十香と折紙の姿があった。
「朝っぱらからにらめっこか？」
なんて軽口を叩いたら、二人の厳しい視線が同時に士道に向けられる。
大方、『なぜお前（あなた）がここに』という感じで互いが互いの存在を疎ましく思っているのだろう。最近少しずつ距離が縮まっているとはいえ、基本的に十香と折紙はそりが合わないのだ。
「シドー。学校にいくぞ」
「監視役の仕事をしにきた」
「わかったわかった。３人で仲良く行こう」
美人の女学生ふたりをはべらせて通勤する男性教師。傍から見ればかなり羨ましいのではないだろうか。
もっとも、この少女達はその気になればビルを半壊させるくらいはできてしまうので、あまり機嫌を損ねると大変なことになるのかもしれないが——というとりとめのな

い思考を中断し、士道は隣を歩く折紙に声をかける。
「鳶一。崇宮真那って子と知り合いなのか？」
無言でうなずく折紙。
「いつどんな風に知り合ったんだ」
「………………」
今度は頭を動かさず、ただ無言のまま。
その反応を見て、士道は十香に聞こえないくらいの声で次の質問を口にする。
「あの子も、ＡＳＴか」
「………………」
折紙は足を止めることなく歩き続け、ただ一言、
「私からは答えられない。本人に聞くべき」
とだけ返ってきた。
「……それもそうだな」
そう答える士道だったが、今の彼女の返答までに空いた間でだいたいの事情は察していた。
おそらく真那もＡＳＴ、あるいはそれに近い立場の組織に属している。
そうなれば、彼女も折紙と同じく、精霊との危険な戦いに身を投じている可能性がぐ

んと高まる。

「ぬ？　どうしたシドー、怖い顔をして」

「え？　ああいや、なんでもないよ。今日の授業ではどんな宿題だそうかなと考えていただけだ」

「宿題か。あまりたくさん出されると困ってしまうぞ」

「はは、そうだな。そこはちゃんと考えておく」

狂三のこと。そして真那のこと。

一度にふたつも厄介事が舞い込んでくると、さすがに士道の精神も参ってしまう。

あまり悩んでいることを外に出さないような表情を心がけていると、折紙が彼にそっと耳打ちをしてきた。

「五河先生」

「夜刀神十香と別れた後、少し時間を作ってほしい。話したいことがある」

＊

階段で十香と別れた後、３階の空き教室付近で折紙と再合流した士道。

「時崎狂三は死んだ」

「え……？」
一瞬、頭が真っ白になる。彼女の言葉の意味を理解するのに、少々の間が必要だった。
「な、なんで」
「識別名〈ナイトメア〉。彼女は空間震ではなく、自らの意思で1万人以上の人間を殺害してきた。まさに最悪の精霊」
「1万人、だと……？」
しかも『自らの意思で』と折紙は言った。それが本当なら、狂三は大量殺人犯なんて範疇に収まらないほどのことをしていることになる。
「だから早急に処理する必要があった。昨日の夕方、時崎――〈ナイトメア〉は殺された」
淡々と語る折紙の口調は、事後報告を行うどこかの企業の職員のようだった。あえて〈ナイトメア〉と言い直したところに、彼女の感情が混ざっているようにも思えた。
「……そうか」
とりあえず口を開いてみた士道だが、出てきたのはどうしようもない生返事だけ。起きた出来事に、理解が追いついていない状況だ。
士道はこれまで、精霊を救うために彼女達と仲良くなってきた。だが、それは彼女らが純粋で、さして罪のない少女達だったからだ。

だが狂三は――

「あら。お二人でなにを話していますの？」
突然背後から聞こえてきた声に、士道は思わず息をのんだ。
彼と向かい合っている折紙には士道に声をかけた人物の姿が見えているはずだが、彼女もわずかであるが目を見開いている。
なぜなら、今の声の主は。
「と、時崎？」
死んだと聞かされたはずの、精霊の少女だったからだ。
「こんな人気のない場所でふたりきり……もしかして逢瀬？　まあ、まあ。教師と生徒、禁断の関係ですわね」
「…………」
からかうような口調でにこりと微笑む狂三と対照的に、折紙は厳しい視線を彼女に送る。
一方の士道は……正直、もうわけがわからなかった。
折紙がこんな嘘をつくとは考えられない。そうすると彼女の勘違いということになるが……果たして、そんな単純なことで片づけていいのか。

「逢瀬なんかじゃないって。それより、もうすぐ朝のホームルームの時間だ。みんなで教室に行こう」
「ええ、わかりましたわ。今日も楽しいことがあるといいですわね」
「………」
　無言で狂三を睨む折紙と、その様子に気づいているのかいないのか、ニコニコ笑顔を崩さない狂三。
　二人と一緒に教室へ向かいながら、士道は休み時間に琴里と連絡をとることを決意していた。

　昼休み。
　令音が占拠している物理準備室に向かった士道は、そこで待っていた琴里にある映像を見せられた。
　それは昨日の夕暮れ時、住宅街の一角で、時崎狂三がＡＳＴに殺された際の一部始終。
　直接手を下したのは――昨日出会った、士道の実妹を名乗る少女だった。
「やっぱり、真那は……それに、鳶一の言ったことも正しかったのか」
「最初は士道の言葉に耳を疑ったわ。死んだはずの精霊が、何食わぬ顔で登校してき

たって言うんだもの」

好物のチュッパチャプスを口の中でコロコロさせながら、琴里は肩をすくめて苦笑を浮かべる。

「……シン。鳶一折紙は、狂三が1万人以上の人間を殺していると、そう言ったのかね」

「ええ。嘘をついている様子でもなかったし、そもそもあいつがそんな嘘をつく理由もないと思います」

ふむ、と思案にふける令音。

琴里はそんな彼女を視線の端に留めつつ、士道に向けて口を開く。

「彼女の言ったことが事実なら、時崎狂三はまさしく最悪の精霊ってことになるわね。十香や四糸乃と違って、悪意をもって力を振るっている」

「悪意……」

「高校に転入して特にボロを出すことなく生活できる時点で、彼女は人間の常識を知っている。知っているうえで殺人を犯す。厄介極まりないわ」

士道の考えも、琴里の分析とほぼ同じだった。狂三をデレさせて霊力を封印するなんて、本当にできるのかと不安が頭をもたげる。

加えて、真那が前線に立ち精霊と戦っていることも確定してしまった。これに関しても、どう動くべきか考えなければならない。

「琴里」
「なに」
「とりあえず、俺は時崎と話してみる。精霊の話とか、抜きにして」
「……それは、彼女をデレさせるためってことでいいのね」
「わからない。ただ、俺がこれからどう動くか決めるためにも、あの子と触れ合う必要がある。俺はまだ、時崎狂三のことを知らなさすぎる」
　このまま放っておけば、また狂三とＡＳＴの戦いが行われる。そうなれば、真那や……折紙が、武器を持って命を賭けることになる。
　黙って見過ごすという選択肢は、とれない。
「ひとつ聞かせて。もし次に真那と会ったら、士道はどうする？　鳶一折紙の時のように、自分の置かれている環境を正直に話すつもり？」
　部屋を出ようとした士道の背中に、琴里の問いかける声がぶつけられる。
　振り返ると、彼女は目を細めて鋭い視線を彼に送っていた。
「……いや。今は、話せない」
「それはなぜ？」
「俺が、真那を信用することができないからだ」
　折紙とは1年の付き合いがあった。だから彼女を信じて真実を打ち明けた。

だが真那とは、記憶に残っていない過去のふれあいを除けば、たった一度の出会いしかない。
本当に血を分けた兄妹であったとしても、やはりすべてを話すのは無理だと士道は思う。
「ま、それが賢明ね。こっちであの子については調べておくから、今は狂三を優先しなさい」
「……わかった」
何をするべきか。何をしてはいけないのか。
ひとつ間違えば、取り返しのつかない未来が待っているかもしれない。
そういった危険性への不安が、プレッシャーとして重くのしかかっていることを、彼は今までとは比較できないほど強く感じていた。